

ISSN 1562-7675
DOI: 10.29716/TKSFLL



淡江外語論叢

淡江大學外國語文學院 印行 Published by College of Foreign Languages and Literatures, Tamkang University

December
2025

言語、文学、文化 言語、文学、文化
 Language, Literature, Culture
 Langue, Littérature, Cultures
 Lengua, Literatura, Cultura
 Sprache, Literatur, Kultur
 Язык, Литература и Культура
 言語、文学、文化 言語、文学、文化
 Language, Literature, Culture
 Langue, Littérature, Cultures
 Lengua, Literatura, Cultura
 Sprache, Literatur, Kultur
 Язык, Литература и Культура
 言語、文学、文化 言語、文学、文化
 Language, Literature, Culture
 Langue, Littérature, Cultures
 Lengua, Literatura, Cultura
 Sprache, Literatur, Kultur
 Язык, Литература и Культура
 言語、文学、文化 言語、文学、文化
 Language, Literature, Culture
 Langue, Littérature, Cultures
 Lengua, Literatura, Cultura
 Sprache, Literatur, Kultur
 Язык, Литература и Культура
 言語、文学、文化 言語、文学、文化
 Language, Literature, Culture
 Langue, Littérature, Cultures
 Lengua, Literatura, Cultura
 Sprache, Literatur, Kultur

No. **44**

44 淡江外語論叢 Tamkang Studies of Foreign Languages and Literatures December 2025 淡江大學外國語文學院 印行

淡江外語論叢

第44期 2025年12月

Tamkang Studies of Foreign Languages and Literatures No.44, December 2025

淡江大學外國語文學院 發行

Published by College of Foreign Languages and Literatures, Tamkang University

發行人/ Publisher: 林怡弟/ Yi-Ti Lin

主編/ Chief Editor: 林怡弟/ Yi-Ti Lin

執行編輯/ Executive Editor: 曾郁景/ Yu-Ching Tseng

編輯委員/ Editors: 曾郁景/ Yu-Ching Tseng、楊鎮魁/ Chen-Kuei Yang

戴毓芬/ Yu-Fen Tai、古孟玄/ Meng-Hsuan Ku

徐鵬飛/ Gilles Boileau、蔣之英/ Brigitte Chiang

張志成/ Jyh-Cherng Jang、林郁嫻/ Yu-Hsien Lin

江雯薰/ Wen-Shun Chiang、王憶雲/ Yi-Yun Wang

蘇淑燕/ Shwu-Yann Su、魏百谷/ Bai-Ku Wei

執行秘書/ Executive Secretary: 蔡金蓮/ Chin-Lien Tsai

編輯助理/ Editorial Assistant: 許慈庭/ Tzu-Ting Hsu

地址: 25137 新北市淡水區英專路 151 號

淡江大學外國語文學院

電話: 886-2-2621 5656 ext.2558

886-2-2622-4593

電子信箱: jtsfee@gmail.com

版權所有 未經同意不得轉載或翻譯

Address: Tamkang University

College of Foreign Languages and Literatures

No.151, Yingzhuan Rd., Danshui Dist., New Taipei City 25137, R.O.C.(Taiwan).

Tel: 886-2-2621 5656 ext.2558

886-2-2622-4593

E-Mail: jtsfee@gmail.com

All rights reserved. Reprint and translation rights must be obtained by writing to the address above.

ISSN 1562-7675

淡江外語論叢

December 2025 No.44

目 錄

Table of Contents

日本語発音教育における台湾
人教師の実践理念の探究
— 教師の語りから見える信
念と経験 —

羅濟立/Luo, Jili 1

Análisis de los mecanismos de la
lexicalización de la formación
compuesta en español

劉珍綾/Liu, Chen-Ling 25

重繪旅程: 論 V. S. 奈波爾
《抵達之謎》中的敘事與徵候

吳凱書/Wu, Kai-su 49

淡江外語論叢

June 2025 No.44

目 錄

Table of Contents

A Corpus-based Approach to *ko*
Syllables in Old Japanese:
focusing on disyllabic and
trisyllabic nouns

林智凱/Lin, Chihkai 65

「現実と非現実」から「愛情
と理解」へ
--村上春樹短編小説「タクシ
ーに乗った男」論

楊炳菁/Yang, Bingjing
關冰冰/Guan, Bingbing 88

〈本期收錄論文 2 篇，上期留稿 3 篇，獲推薦共計 5 篇。〉

日本語発音教育における台湾人教師の実践理念の探究 — 教師の語りから見える信念と経験 —

羅濟立/Luo, Jili

東吳大學日本語文學系教授

Department of Japanese Language and Culture, Soochow University

【摘要】

台湾の日本語教育現場中、発音教育仍面臨教材不足、教學標準不一致與教師理念分歧等多重挑戰。有鑑於此，本研究以三位具有二十年以上教學經驗的台灣日語發音教師為對象，運用半結構式訪談與敘事分析法，探討其教學理念與信念如何在個人生命經驗與教學歷程中逐步形成與轉變。研究採用對話式建構主義為理論架構，透過教師的生命故事，分析其對發音教育的認知與實踐策略。研究結果歸納出四大核心類別：「發音教育的意義與價值」、「教學設計與學習環境」、「教師角色與專業發展」、「學生學習與支持需求」，並指出教師的教育理念深受其成長背景、專業養成、教學經驗與學生互動等因素影響。此外，研究也發現，發音教育不僅關乎語音正確性，更與跨文化溝通、自我表達與學生學習動機密切相關。本研究希望能補足台灣在日語發音教育研究上的不足，並為未來之師資培育、課程設計與教學實踐提供參考依據。

【關鍵詞】

日語教育、發音教學、教師信念、敘事研究、台灣

【Abstract】

In Taiwan's Japanese language education field, pronunciation instruction still faces numerous challenges, including insufficient teaching materials, inconsistent instructional standards, and divergent teaching philosophies among educators. In response to these issues, this study investigates the teaching beliefs and philosophies of three Taiwanese Japanese pronunciation instructors, each with over twenty years of teaching experience. Through semi-structured interviews and narrative analysis, the study explores how their instructional beliefs were formed and transformed through personal life experiences and teaching trajectories. Adopting a dialogical constructivist approach, this research analyzes the teachers' life stories to uncover their perceptions of pronunciation education and their

teaching practices. The findings identify four major thematic categories: “The Significance and Value of Pronunciation Education,” “Instructional Design and Learning Environment,” “Teacher Roles and Professional Development,” and “Student Learning and Support Needs.” The study reveals that the instructors’ educational philosophies are deeply shaped by their personal backgrounds, professional training, teaching experiences, and interactions with students. Furthermore, it emphasizes that pronunciation education goes beyond phonetic accuracy, encompassing cross-cultural communication, self-expression, and student motivation. This study aims to address the research gap in Japanese pronunciation education in Taiwan and to provide useful insights for future teacher training, curriculum development, and instructional practice.

【Keywords】

Japanese language education, pronunciation instruction, teacher beliefs, narrative research, Taiwan

1. はじめに

近年、科学技術の進歩や社会環境の変化により、教育分野でのコミュニケーション能力の重要性がますます高まっている。特に日本語教育では、この能力が学生の成長に大きく寄与しており、良好なコミュニケーションスキルを身につけることで、自分の考えや感情を的確に表現できるようになる。優れたスキルは人間関係の構築だけでなく、問題解決や異文化間交流の場面でも重要な役割を果たす。台湾と日本の関係がより緊密化し、人的交流が増加する中、発音教育の重要性がさらに注目されている。明瞭な発音はスムーズな意思疎通を助け、誤解を防ぎ、相手に好印象を与えるだけでなく、学習者の自信にもつながる。

戸田（2008）は、日本語の発音教育が言語学習において重要な基盤であると指摘しているが、台湾では発音教育における課題が多い。例えば、教材やカリキュラムの不足、一貫性の欠如、さらには教師間での目標の不一致が問題視されている。こうした状況では、学生が学ぶ内容が教師ごとに異なり、結果として学習の進捗や質にばらつきが生じる可能性が高い。発音教育の効果を最大化するためには、体系的で一貫したプログラムを構築し、教師間で共通認識を持つことが急務である。

多様な価値観が共存する社会において、すべての教師が完全に一致した意見を持つことは現実的ではない。しかし、異なる見解を互いに尊重し、共識を築くことは可能であり重要である。共識とは、多様性を前提に、相互理解や支援を通じて共通の基盤を形成することである。これにより、異なる視点

を活用した新たな解決策が生まれる可能性が広がり、教育の質の向上につながる。

台湾における発音教育は体系的な取り組みが不足しているが、「日本語発音教育観」を再構築することで改善の余地がある。教育観とは、教師の価値観や信念が形作る教育の指針であり、教え方やカリキュラムに直接的な影響を与えるものである。教師が自身の教育観を見直し、学生のニーズに応じた指導法を柔軟に選択・調整することで、教育の目標をより効果的に達成することが期待される。

台湾の日本語教育における発音教育の課題を解明するため、本研究では 3 名の発音教師のライフストーリーを分析対象とする。ライフストーリー法を用いることで、彼らがどのように教育観を形成し、変化させてきたかを明らかにし、その過程で直面した課題や洞察を共有する。こうした研究アプローチは、学習者の視点や社会的背景を重視するものであり、日本語教育が抱える多様な課題を深く理解する上で有用である。

2. 先行研究

先行研究によれば、教師の成長と批判的思考は教育の質向上に不可欠であるとされている。岡崎・岡崎（1997）は、学習者の多様化に対応するため、「自己研修型教師」や「内省的実践家」の概念を提唱した。これは、従来の教授法を教える「教師研修」と異なり、教師自身が教育観を再評価し、授業を設計しながら継続的に改善を図る「教師成長」のプロセスを重視するものである。また、佐々木（2006、2010）は日本語教育の歴史を「教育時代」「支援時代」「共生時代」に分類し、特に「共生時代」において、教師の自主学習や協働学習が推奨されるようになったことを指摘した。折本（2022）は、教師が教育理論を学び、反省と実践を通じて成長する重要性を強調している。

さらに、発音教育に関する研究も進展している。小河原・河野（2002）は、教師の信念が教育経験や研修の影響を受け、発音教育の実施や方法に直接関与していることを示した。加えて、小河原・河野（2009）は、教師が学生に発音の重要性を認識させることが鍵であり、教師自身が信念を反省し続ける必要性を提起している。土岐（2010）は、学生が自信を持って発音練習に取り組める環境の整備が重要であり、発音教育は単なる技術指導を超えて、学生の音声表現力向上やスムーズなコミュニケーションの実現に貢献すべきだと述べている。また、須藤（2013）は、グループ活動や協働学習が発音教育の動機付けに効果的であり、教師の適切な介入が学習意欲を高めると指摘している。

川染（2016）は、発音教育が単に正確性を追求するものではなく、自然で効果的なコミュニケーションを実現する手段であると述べ、教師がその意義を深く理解し、学習成果を向上させることの重要性を強調した。千仙永（2017）は、日本語教育における発音指導を四つのモデルに分類し、教師養成における発音教育の課題を指摘した。彼はまた、発音教育の未来に向けて、発音指導の必要性や目的、メタ認知能力の育成、教育観の理解、学習の実態把握、教師間の協力、支援ツールの活用、指導実践研究の蓄積など、八つの提言を行い、日本語発音教育の方向性と実践の参考を示している。

一方、ライフストーリー研究は、教師の教育観形成を理解するうえで有益なアプローチとされている。桜井（2002）は、ライフストーリー研究を通じて語り手の主観やアイデンティティを深く掘り下げる意義を指摘し、三代（2014）は、日本語教育におけるこの研究手法が、教育環境の多様化や研究方法の多様化に対応して注目されるようになった背景を示した。飯野（2015）は、教師が自身の経験を語り直すことで教育観を再構築するプロセスを重視し、太田（2010）はオーストラリア、澤邊（2016）は韓国における日本語教師のライフストーリーを分析して教育現場での意義を明らかにしている。また、杉村（2022）は、台湾でのライフストーリー研究が不足している現状を指摘し、教師の海外経験が多文化的視点や教育実践の向上に与える影響を分析した。

本研究では、台湾の日本語発音教育観を深く理解するため、「対話的構築主義アプローチ」を採用する。この方法は、語り手とインタビュアーの対話を通じて語りの文脈性を分析し、教育観形成の多様なプロセスを明らかにするのに有効である（桜井 2002）。特に台湾の発音教育では、教師のライフストーリーを通じて教育観の形成や課題を明確にし、教育改革や教師研修プログラムの改善に貢献することが期待される。

以上の先行研究を基に、本研究は日本語発音教師のライフストーリーを分析し、教師の発音教育観の形成と変化を探求したい。特に台湾における発音教育の研究が少ない現状を補完し、教育の質向上に資する新たな視点を提供することを目的としている。

3. 調査の方法

3.1 調査の対象

本研究は、大学の日本語文学科か応用日本語学科で働き、20年ぐらいの豊富な教職経験を持つ50代～60代の台湾人日本語発音教師4名を対象とした¹。彼らの長年にわたる豊富な教育経験は、教育信念や実践の変遷を探る

1 質的研究の一つである複線経路・等至性モデル（TEM）を使用した荒川他（2012）は、分析人数に

上で、重要かつ深い基盤を提供している。本研究は、年齢層の異なる教師を対象とするのではなく、あえてベテラン教師に焦点を当てることで、長期にわたる教育実践、学生との相互作用、そしてカリキュラム上の課題への対応を通じて徐々に形成・深化してきた発音教育の理念と実践の全体像を明らかにすることを目的としている。

また、地域差を考慮し、4 人の教師は北部、中部、南部の大学から選ばれた。対象教師には、調査の筆者と関係のある、もしくは顔見知りの教師をできるだけ選ぶようにした。ライフストーリーを共有するには、語り手がある程度の信頼感を持つことが重要だからである。ちなみに、データ収集後、ある教師が言及した教育経験、背景、または発話量が他の被調査者と明らかに異なり、それが分析結果の均衡性に影響を与える可能性があるため、該当する教師を除外した。その結果、対象教師は 3 名に減少した。なお、台湾では日本語発音の教師が少なく特定されやすいため、対象教師のプロフィールは省略した。

3.2 データの収集と分析

本研究のデータ収集方法として、半構造化インタビューを採用した。インタビューは 2024 年 10 月から 12 月にかけて実施された。場所は対象教師の大学または調査者の自宅リビングであり、所要時間は約 90 分であった。インタビューは、参加者が自身の発音教育観について自由に語ることを促すために、筆者が主幹質問「これまで日本語発音の学習や教育にどのように向き合って取り組んできたかお話しください」から語りのきっかけとして提起し、対象教師の過去の経験を語り引き出した。インタビューは、対象教師から許可を得た上で全てスマートボイスレコーダーに録音された。インタビュー後、逐語的に書き起こされ、テキストデータとして分析に用いられた。本研究では、概念の抽出とサブカテゴリーの生成において、主に物語分析法 (Narrative Analysis) を採用した。研究者は対象教師の語りを繰り返し読み、重要なテーマをコード化することで、日本語発音の教育観に共通する主要なテーマを抽出した。そして、発音授業の状況や学歴背景を考慮に入れながら、具体的なサブカテゴリーを生成しました。さらに、主題分析 (Thematic Analysis) の手法を参考にし、語りの中で繰り返し現れるキーワードや表現を特定し、それらを体系的に整理した。このプロセスを通じて、対象教師の教育動機、課題、使用する教育戦略といった要素を深く掘り下げた。

ついて「1・4・9 の法則」を挙げ、分析人数が四人であれば多様性が見られると述べている。本研究でも 4 人を分析することで、質的に深く考察しながら、同時に多様性が見られるということから、日本語発音の指導計画に生かせると考えた。

3.3 倫理的配慮

本研究では、参加者のプライバシーと機密性を保護するため、インフォームド・コンセントの取得、匿名性の確保、データの安全な管理など、適切な倫理的配慮を行った。具体的には、調査開始時に本研究の目的を口頭および書面で説明し、インタビュー記録は本研究目的に限定して使用すること、研究協力は途中で中止可能であること、データの破棄を含めプライバシー保護に十分配慮することを明示し、対象者の承諾を得たうえで調査を実施した。また、本研究は「国立台湾大学行為与社会科学倫理委員会」の承認を受けて行われた。

4. 調査の結果

4.1 対象教師ライフストーリー

4.1.1 対象教師 A

A 先生は、幼少期から日本語に触れる環境で育ち、父親や親戚との会話を通じて方言や発音の違いを身近に感じていた。大学での厳格な発音教育を通じて、自身の発音意識が高まり、後に日本の大学へ留学した。留学先では、指導教授の助言を受けて研究テーマを日本語教育学から音声学へと変更し、音声学における機械分析やデータベースの活用方法を習得した。大学院では、学術的な深みと実証能力をさらに高め、基礎的な発音の授業から大学院での研究に至るまで、完全な音声学の枠組みを構築した。現在は、学生に正しい発音の重要性を説き、誤った発音の影響を改善し、職場での競争力を向上させるための指導を行っている。

4.1.2 対象教師 B

B 先生は、大学時代に文法に興味を持っていたが、音声学の講義に触発されて徐々に音声研究に惹かれ、対照研究の困難さや音声分野の研究者の少なさを背景に音声を研究テーマとして選んだ。研究分野は文法に特化しているわけではないが、文法への深い愛着があるため、自身が培ってきた文法の経験を学生たちに伝え、言語学習においてより確かな基礎を築けるよう支援し、文法学習の魅力を感じてもらいたいと考えている。それにもかかわらず、現在、学生に発音を楽しく学ばせる環境を整え、発音学習を言語コミュニケーションの重要な要素として位置づけるために力を注いでいる。また、学生が発音の抽象性に挫折しないよう、学習を「面白く」するための工夫を続けている。

4.1.3 対象教師 C

C 先生は、学生時代には音声学に特別な興味を持っていなかったが、研究生時代に音声学教材の繰り返しの読解や吃音現象の探究を通じて、音声学への関心を深め、修士課程で音声学を研究分野として確立した。特に、自身が発音学習で困難を経験したことをきっかけに、音声学を専門的な研究テーマとするに至った。現在では、基礎的な発音教育から音声学の専門知識までを学生に伝える役割を担い、学生が発音学習を通じて達成感を得られることを重視している。また、発音や聴解の指導に情熱を注ぎ、学生との知識共有や交流を心から楽しんでいる。

4.2 発音教育観の意味とサブカテゴリー

対象教師 3 人の発話から、ライフストーリーに含まれる発音教育観の意味要素を抽出した。抽中された意味要素の中で、対象教師 A は 40 個のサブカテゴリー、対象教師 B は 26 個のサブカテゴリー、対象教師 C は 36 個のサブカテゴリーがそれぞれ生成された。

表 1 対象教師の発音教育観の意味要素とそれに基づくサブカテゴリー

教師	サブカテゴリー	ライフストーリーに含まれていた発音教育観の意味要素
A	発音授業の重要性と目標	〈標準的な発音を向上させることは、職場での競争力とプロフェッショナルなイメージの向上につながる〉 〈正確な発音は潤滑剤のような役割を果たし、コミュニケーションをよりスムーズで楽しいものにする〉 〈正しい発音は言語の明瞭さと理解力を向上させ、競争の激しい場面（例：ディベート大会）で優位性を築く〉 〈発音の最終目標は、コミュニケーションの質を向上させることである〉 〈言語の質に対する基本的な要件は、コミュニケーションが可能であることである〉 〈学生が正確な発音で称賛を受けることで、発音教育が実際の言語運用に与える影響力を示す〉 〈発音はすべてではないが、非常に重要である。発音と他の教育内容のバランスを取ることが必要である〉
	教育戦略とコースデザイン	〈発音授業は基礎的な発音規則の指導に偏っており、音声学のレベルには深入りしていない〉 〈専門的な発音授業は、正確な発音を集中して学ぶことができ、教育の先見性を示す〉 〈発音以外の授業にも発音教育を取り入れることで、学生の音声の正確性を向上させることができる〉 〈発音教育を文法、読本、会話の授業に広げ、カリキュラム全体で相互に支援する体制を実現したい〉 〈正規の授業は教師が指導することで、学生が発音を効率的に習得でき、非正規の学習よりも効果的である〉 〈発音は学科のブランドを象徴し、発音教育には高い期待が寄せられる一方で、プレッシャーと名誉感を伴う〉 〈授業時間を増やし、説明と個別フィードバックを組み合わせることで効果を高めることができるが、現状では実現が難しい〉 〈教師は音声の変化に柔軟に対応し、適宜指導基準を調整する必要がある〉 〈多様な日本社会は言語の変遷を反映しており、教師は音声の変化を受け入れ、誤りと変体を区別し、現代日本語教育のニーズを満たすべき〉 〈日本語教育は現代の言語ニーズを反映し、学生の競争力を確保するために、教師は時代の変化に対応し続ける必要がある〉
		〈教師の発音は学生が模倣するモデルとなり、学生の学習に大きな影響を与える〉 〈日本語教師には発音の概念を備えることが求められ、誤った指導を避けるとともに、責任感を持って学生が正しい発音を習得できるようにするべき〉

	教師の役割と責任	<p>〈教師の発音には、伝達に伴うリスクと責任が伴う〉 〈教育は日本語使用者の育成へとシフトし、理論的な要件を軽減して、実用的な基礎とスキルに重点を置き、学生の負担を軽減すべき〉 〈教師は現代日本語の多様性を受け入れ、理論と実用のバランスを保ちながら、発音の変化に対する理解と教育方法を常に向上させるべき〉 〈少数派の教師には、音声教育が軽視されている現状を変える使命感が求められる〉</p>
	学生のニーズと学習課題	<p>〈学生には日本語の発音を 60%-70%程度目指すよう勧め、完璧を追求することで挫折しないようにする〉 〈学生の発音の概念は、コミュニケーションを重視し、完璧な発音への執着を減らすべき〉 〈学生の質の変化に応じて、発音教育の方法を調整し、学習効果を向上させる必要がある〉 〈中国語にはない日本語の発音が最も困難であり、過度に厳しく指摘することは避けるべき〉 〈発音の矯正は適度に行い、自信を損なわないようにする。完璧でなくても、学生は実際に日本語を使うことができる〉 〈学生の挫折感、発音記憶が短期間で定着しにくいこと由来しており、教師の忍耐強い指導が必要である。これは世界的な音声教育の課題でもある〉</p>
	個別指導とインタラクション	<p>〈個別指導は伝統的な教育方法を継承し、一對一の訂正を通じて発音の問題を正確に改善し、教育効果を高めるとともに教師と学生の相互作用を促進する〉 〈発音の授業には個別指導が必要であり、教師は忍耐強く取り組み、深いインタラクションを行う必要がある〉 〈大人数クラスでの発音教育は個別のニーズに対応しづらく、教育効果に影響を与える〉 〈発音教育には個別訂正が必要で、小規模クラスの方が適しているが、リソースの制約により実現が難しい状況である〉 〈クラス全員で発音練習を行うと個別の誤りを見分けにくく、発音教育の効果が制限される〉</p>
	テクノロジー支援と学習リソース	<p>〈発音辞典を参照する習慣を養うことで、発音の正確性と自主学習能力を向上させる〉 〈無料のデジタルツール（例：OJAD）を使用して発音を学ぶことを推奨するが、これらのツールの許容範囲が伝統的な教育基準と異なる可能性があることを理解する必要がある〉 〈学生のニーズに応じて教材の形式（例：簡単な図解の作成）を柔軟に調整し、適切な学習ツールを推薦することで、学生が発音をよりよく習得できるよう支援する〉</p>
	言語変化と時代の課題	<p>〈多様な日本社会は言語の変遷を反映しており、教師は音声の変化を受け入れ、誤りと変体を区別し、現代日本語教育のニーズを満たすべき〉 〈日本語教育は現代の言語ニーズを反映し、学生の競争力を確保する必要があり、教師は時代の変化に合わせて進化すべき〉 〈学生の質が低下し、発音を重視する程度が弱まっている〉</p>
B	教育戦略とコースデザイン	<p>〈授業では IPA（国際音声記号）を教え、学生が課外研修での発音授業に対応しやすくすることを目指す〉 〈発音授業は日本語学科の基礎教育において重要な役割を果たし、学生が学習スタイルに適応し、発音位置や核心スキルを適度に習得できるよう支援する〉 〈発音器官と単音の指導から始め、徐々に外来音や特殊拍の訓練を取り入れ、日本語特有の音韻特性を強調する〉 〈前期は単音とアクセントの訓練に焦点を当て、後期はイントネーションや口語表現に移行し、リズム指導を活用して楽しさと実用性を向上させる〉 〈発音授業では音声理論を取り入れ、実際の発音と音声、ローマ字表記などの違いを強調し、学生が理論を通じて音声学の概念を理解できるようにする〉 〈教材は実際のコミュニケーションに焦点を当て、単音の訓練から応用シナリオに移行し、文脈に応じた発音能力を向上させるべき〉 〈発音授業は応用志向にシフトし、社会文化の変化を組み込みながら、内容と方法を柔軟に調整し、現代的な表現ニーズに適応する必要がある〉 〈教師は個別にスピーチ原稿を修正し、練習を提供することで学生を支援するが、大人数クラスでの指導は負担が増える一方で、学生の発音能力を把握する助けになる〉</p>
	学生の学習動機と課題	<p>〈アクセントの記憶が困難で、無理を強いることを避け、嫌悪感を減らし、発音学習を楽しむよう促す〉 〈学生に単語を整理させて録音を行い、個別対応を提供することで、それぞれに適した学習方法を見つける手助けをする〉 〈学生のニーズに応じた多様な方法を採用し、受動的な学生のやる気を引き出すため、魅力的な活動を設計する〉 〈学生は多くの場合、受動的に学習しており、単語を「見る」だけで「覚えな</p>

		い」傾向がある。これが表現意欲の欠如や、語彙力不足による運用能力の低下につながっている) 〈学生はアニメの情熱的な語調に熱中し、日常的な実用表現を軽視する傾向があり、学習の興味と実際のニーズが乖離している)
	発音と異文化交流	〈日本には文化的な偏見が存在することがあり、良好な発音は異文化適応能力を高め、円滑な交流を促進し、友好的な対応を得る助けとなる) 〈発音の最終目的はコミュニケーションであり、考えを明確に伝えることで誤解を防ぐこと) 〈将来の発音教育では、会話などの文脈を取り入れ、流暢なコミュニケーションと音声スキルの実用性に焦点を当てることが期待される)
	専門知の継続と深化	〈大学時代に基礎音声学を学び、より深く研究するために独学を開始し、音声学の専門家の講義を聴講した) 〈大学院では読書会を通じて音声学の知識を深め、音声に関するテーマを含むシンポジウムに積極的に参加した) 〈学生から音声研究から外れていると指摘され、残念に思うこともあったが、それでも音声学を愛し、学生の興味を引き出すことに注力している) 〈行政経験を活かして革新的なカリキュラムを開発し、メディアや実務応用を取り入れることで、改革のニーズに応え、多様性を高め、業界のニーズに近づけた)
	テクノロジーと発音教育	〈テクノロジーは学習を支援するが、対面での交流が減少し、効果は学生の主体性に依存する。感情的な交流と現場でのインタラクションを重視する必要がある) 〈バーチャル技術は動機を高めるが、教師と学生の交流が減少し、教育の人間的な側面に影響を及ぼす)
	発音学習の未来の課題と機会	〈言語学の研究と教育が徐々に軽視され、語文学科の重きが他の分野に移行し、言語の重要性と価値が十分に認識されていない) 〈少子化が進むことで言語学科の募集が困難になり、学生の質や学科の発展に影響を及ぼしている) 〈政府は言語の普及に注力しているが、その実施効果や社会の重視度にはギャップがある) 〈言語の価値認識を高めることを期待しているが、軽視や資源の減少により縮小のリスクに直面し挫折を感じている)
C	発音授業の重要性と目標	〈文法は日本語学習の基礎であり、会話はコミュニケーション能力を養うものである。発音は細部を捕う役割を果たし、優先度は低いものの適度な重視が必要である) 〈発音授業は学生が日本語を自然に使用し、流暢に表現する能力を高め、称賛を受けることで学習意欲を向上させる) 〈発音授業は学生の自信と楽しさを育み、スピーキング活動を通じて達成感を高め、文法や状況によるプレッシャーを軽減する) 〈発音授業は実用性を重視し、朗読、タスク練習、音声課題へのフィードバックを通じて参加意欲と達成感を向上させる) 〈インターネットやアニメは学生の発音への興味を高めるが、一部の学生は単位だけのために履修し、深い動機を欠いている) 〈発音授業は人工的な訂正からプラットフォームによる訂正に移行し、効率を向上させたが、授業後のフィードバックにより教師の負担が増大している)
	教育戦略とコースデザイン	〈選択科目としては実用性を重視し、学期間で音声学の知識を簡素化し実践的な練習に集中する) 〈学生のレベルに合わせて、授業開始前に五十音と発音の基礎に焦点を当て、繰り返し練習で基礎発音を強化する) 〈ゲームやアフレコ活動を組み合わせ、楽しさと参加意欲を高め、シチュエーション練習で発音と言語運用能力を向上させる) 〈適切な教材を選び、発音の例を柔軟に活用して、内容が煩雑で退屈にならないようにする) 〈モデル音声ファイルを提供し、学生が授業後に音読練習を行い、学習効果を強化する) 〈オンライン宿題に対して2週間ごとにフィードバックを行い、期末には朗読で現場評価を実施し、問題のある発音を記録して学生に参考情報として提供する) 〈オンライン宿題とフィードバックを毎週行い、平常点に反映する。中間筆記試験で基礎知識を評価し、口頭試験と期末朗読で現場評価を行う) 〈リズムは授業の後半に組み込み、五十音の習得後にアクセントを学び、その後段階的にイントネーションと感情表現をカバーしていく)
		〈興味を引き出すことを目標に、日本語を楽しく読むことを重視し、過度な正確な発音の追求を避ける) 〈学生同士のインタラクションと交流を奨励し発音を改善するとともに、自主学習と相互助け合いの精神を育む)

<p>学生の学習動機と課題</p>	<p>〈現代の学生は研究への参加意欲が低下しており、良好なインタラクションと動機付けを通じて参加を引きつける必要がある〉 〈固定化した誤った発音は矯正が難しく、発音教育の課題となっている〉 〈外国人学生の発音は音声的背景の影響を受けやすく、特に M 国の学生には困難が多く、多様性と挑戦を示している〉</p>
<p>教師の専門性と自己成長</p>	<p>〈台湾の日本語発音教師の多くは専門的な訓練を欠いており、自学で音声学関連の知識を補う必要がある〉 〈音声学の基礎が不足しているため、教師は相談や読書を通じて研究の課題を克服する必要がある〉 〈自身の発音が十分に標準的ではないと認識しつつも、授業では専門性を発揮し、不足を明確に把握しながら継続的に改善を図る〉 〈フィードバックに挫折して発音授業を諦めかけたが、方法を調整して情熱を取り戻した。発音授業には教師の数倍の努力が必要とされる〉 〈単位を減らして授業と行政業務に集中し、研究を維持するために休息時間を犠牲にすることで、生活や個人の時間に影響を与える。〉 〈専門性と楽しさのバランスを保ちながら、質の高い授業と教室での専門性を両立させることは、教師にとっての挑戦である〉 〈学生の評価は教師の自信に影響を与え、肯定的な評価は改善への動機を与え、否定的な評価は情熱を削ぐことがある〉 〈同業の研究者がワークショップや交流会を通じて研究をつなぎ、協力を促進するプラットフォームを築き、交流と影響力を高めることを願う〉</p>
<p>インタラクションとテクノロジーの応用</p>	<p>〈オンラインでの訂正とフィードバックが学習効果を向上させ、学生の熱意と満足度が大幅に向上する〉 〈コースにインタラクティブ性と遊び心を取り入れ、柔軟なコミュニケーションで注意散漫に対応し、平等な雰囲気を作り出して学生の関心を引き付ける〉 〈授業が一方向的な講義から、対話型、自主学習、個別指導を組み合わせた方法へと転換する〉 〈現代技術はデータや音声メディアの取得を容易にし、教育と研究に利便性を提供する〉 〈視覚化ツールは発音授業を支援するが、技術的な細部に偏重することで、楽しさや学生の参加意欲に影響を与えることが懸念される〉 〈テクノロジーの変化に適応し、視覚化教育の実践研究を観察して新たなインスピレーションを探索する〉</p>
<p>教室の雰囲気と学習環境</p>	<p>〈学習障害のある学生の状況を理解した上で、誤解を解消するために教え方や態度を調整する〉 〈発音授業を通じて学生の興味と達成感を引き出し、従来のカリキュラムを補足し、楽しさを重視した学習環境を作り出す〉 〈厳格な要求を重視する教え方から、学習の楽しさや発音への興味を重視する教え方へと転換する〉</p>

さらに、表1のサブカテゴリーから「発音教育の重要性と価値」「発音習得を支える教育設計と学習環境」「教師の役割と専門性」「学生の学習と支援」の4つのカテゴリーが生成された。その発音教育観におけるカテゴリー間の関連図は図1のように示す。

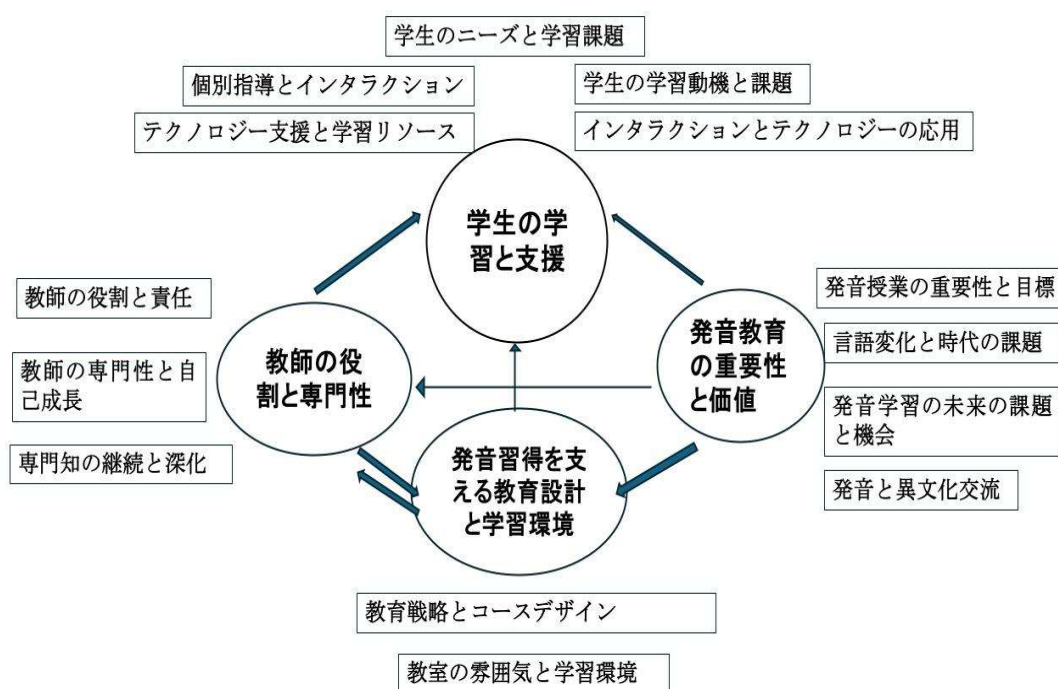


図 1 台湾人日本語教師の発音教育観

5. 台湾人日本語発音教師の教育観

5.1 発音教育の重要性と価値

「発音教育の重要性と価値」は、すべての発音教育活動の基盤であり、なぜ発音教育が重要であるのか、そして何を目指すべきかを定義することで、教育設計、教師の役割、学生の学習といった他のカテゴリーの方向性を決定する。例えば、発音の習得が異文化理解やコミュニケーション能力の向上に寄与することを目標とする場合、それを実現するための具体的な教育設計や支援方法が求められる。このように、発音教育で定義された目標は、教育戦略やコースデザインにおける授業内容や方法の設計に直接影響を与えるだけでなく、学習者の支援方法を具体化し、どのように学習者をサポートすべきかという指針を提供する。

教師 A は、標準的な発音の向上が職場での競争力やプロフェッショナルなイメージの向上に重要であり、正確な発音は円滑で楽しいコミュニケーションを促進し、言語の明瞭さと理解力を高めると述べている。また、発音教育の最終目標はコミュニケーションの質を向上させることであり、学生が正確な発音で称賛されることでその実用性が証明されるとしている。ただし、発音教育だけでなく、他の教育内容とのバランスも重要だと強調している。さらに、多様化する日本社会においては、教師が言語の変化を受け入れつつ、

誤りと変体を区別しながら現代の教育ニーズに対応することが求められると指摘。学生の競争力を維持するためには教育の進化が必要であり、同時に、学生の質の低下や発音の重要性が軽視されている現状に対処する必要があると述べている。

「特に私たちの学生は、多くがサービス業に従事しており、彼らは日本語の「質」に非常にこだわっています。その質とは、文法がどうかということではなく、「日本語がきれいに聞こえること」や「お客様が聞いて心地よく感じられること」を求めています。ですから、私は言います。「もしあなたの日本語の質が 70%に達しているなら、発音を改善することで 80%、90%にまで高めることができる」と。あなたの日本語がより明瞭で、聞いていて心地よいものになるからです。」(教師 A)

教師 B は、日本における文化的偏見を踏まえ、良好な発音が異文化適応能力を高め、円滑な交流や友好的な対応を助けると述べている。また、発音教育の目的は、明確なコミュニケーションによる誤解の防止にあると強調している。将来の発音教育では、会話などの文脈を取り入れ、流暢なコミュニケーションと実用的な音声スキルを重視する必要性を指摘している。しかし、言語学やその教育が軽視され、語文学科の重要性が他分野に押されつつある現状に懸念を示している。さらに、少子化による学生募集の難しさが学科の発展や学生の質に悪影響を及ぼしていると指摘している。政府が言語普及に取り組んでいるものの、その実効性や社会での重視度とのギャップが課題であり、言語の価値を高める取り組みが求められる一方で、資源の減少や縮小リスクへの懸念も述べている。

「実際のところ、日本人はやはり外国人に対して少し差別的なところがあると感じています。だから私は、「自分がそう思うだけかもしれないけれど」と前置きしながらも、学生たちに「発音が良いことは本当に素晴らしいことだ」と常に励ましています。発音が良いことで、日本人の中に溶け込みやすくなると感じるからです。」(教師 B)

教師 C は、発音授業が日本語学習において補助的な役割を果たし、学生の言語運用能力や学習意欲を向上させる手段であると述べている。文法が学習の基盤、会話がコミュニケーション能力を養うものである一方、発音は細部

を補完する役割を持ち、優先度は低いものの適度に重視する必要があると指摘している。また、発音授業を通じて学生に自信や楽しさを与え、スピーキング活動による達成感を高めることで、文法や状況によるプレッシャーを軽減できると強調している。授業の実用性向上のために、朗読やタスク練習、音声課題へのフィードバックを実施しているが、インターネットやアニメが発音への興味を高める一方で、一部の学生は単位取得を目的とし、深い動機を欠いている点を懸念している。さらに、発音訂正が人工的な方法から効率的なプラットフォーム利用に移行したことで、授業後のフィードバックが教師の負担を増加させている現状についても言及している。

「発音というのは、自分の日本語をより完璧にしたい、各方面でより美しく自然にしたいと望むときにおすすめるものです。しかし、発音が重要ではないと言うのは、どこか責任感が欠けているようにも思えるので、やはり必要だと思います。ただし、もし文法や会話などの順序から選ばなければならないのであれば、やはり文法を優先すべきだと思います。」(教師 C)

5.2 発音習得を支える教育設計と学習環境

「発音習得を支える教育設計と学習環境」は、発音教育の目標を具体化し、その達成方法を示す重要なカテゴリーであり、コースデザイン、教材の選定、授業の進め方、さらに学生の多様な学習スタイルに対応するための工夫を含む。このカテゴリーは教師の役割と専門性にも深く関わり、教師は戦略に基づいて授業を展開し、学生を指導する。また、教育戦略の実践には教師のスキルや専門性が不可欠であり、発音教育の重要性と目標に従って戦略が立案されるため、このカテゴリーは目標の達成において欠かせない存在となる。

教師 A は、発音授業が基礎的な発音規則に偏りがちな一方、専門的な授業は正確な発音を学ぶ重要な場であると述べている。また、発音教育を文法や会話など他の授業に統合することで、カリキュラム全体が連携し、学生の音声の正確性向上に寄与できると指摘している。正規の授業での指導が非正規学習よりも効率的であることも強調している。発音教育は学科のブランドを象徴する一方、期待とともにプレッシャーも伴うと認識しており、授業時間の拡大や個別フィードバックの強化による効果向上の必要性を述べつつ、実現には課題があると指摘している。また、言語の変化を受け入れつつ誤りを区別し、現代日本語教育のニーズに応じた対応が学生の競争力確保に重要だと強調している。

「だから、学習の過程では本当にたくさん聴くことが重要ですね。私たち自身ももっと聴かなければなりません。特に、若者の使う若者言葉の日本語は、私たちが学んでいた頃の日本語の発音とは大きく異なります。そして、学生がこの若者言葉の日本語に触れる機会は、私たちの頃に比べてはるかに多いです。昔は、生きた日本語を聴くのがどれほど難しかったかと思います。だから私は、今の日本語教育は現状に合わせる必要があると考えています。」(教師 A)

教師 B は、発音授業が日本語学科の基礎教育で重要な役割を果たし、学生が発音位置や核心スキルを適切に習得できるよう支援すると述べている。授業では IPA を活用し、発音器官や単音の指導から始め、日本語特有の音韻特性やアクセント、リズムに焦点を当てている。また、音声理論を取り入れ、実際の発音とローマ字表記の違いを強調し、学生が音声学を理論的に理解できるよう工夫している。さらに、教材は単音の訓練から応用シナリオに移行し、文脈に応じた発音能力の向上を目指している。発音授業は社会文化の変化に適応し、実用性を重視した内容にシフトする必要があると述べ、教師がスピーチ原稿の修正や練習を通じて個別に支援している。

「私が大学生だったとき、みんな鼻濁音を発音するように指導されていました。たとえば、卒業公演のとき、年配の先生が学生たちに鼻濁音を使うよう求めていました。そのとき、私は心の中で「今や皇室でさえ鼻濁音を使っていないのに」と思ったものです。でも、それを口にするのは気が引けました。ただ、時代が変わりつつある中で、そういったことに合わせていかなければならないのだと感じました。」(教師 B)

教師 C は、発音授業は実用性を重視し、学生のレベルに応じた基礎発音の強化と実践的な練習を中心に構築すべきだと述べている。五十音や発音基礎の繰り返し練習に加え、ゲームやアフレコ、さまざまなシチュエーション練習を取り入れ、楽しさと参加意欲を高める工夫をしている。また、教材選定やモデル音声の提供、オンライン宿題、フィードバックを通じて学生を継続的に支援する重要性を強調している。さらに、リズムやアクセント、感情表現の段階的指導で楽しい学習環境を整えることや、厳格な指導から興味を重視する方法への転換が必要だと指摘している。

「後に教学プラットフォームができて、ファイルをアップロードできるようになると、当然ながらネットの発展とともに授業のあり方も変わりました。授業はただ教えるだけではなく、何らかの活動を取り入れる必要が出てきました。例えば、1 時間や 2 時間の発音の授業では、2~3 種類の活動や課題を取り入れるようにしています。ただ教えるだけでは不十分になったのです。」（教師 C）

5.3 教師の役割と専門性

教師は発音教育の目標を達成するための実行者であり、学生に直接的な影響を与える存在である。このカテゴリーでは、教師の専門性向上や役割、責任が重視され、最新の知識を持って発音を指導し、学生一人ひとりのニーズに応える能力が求められる。また、教師は教育設計とコースデザインを実行する中心的な役割を担い、戦略を正しく理解し効果的に活用することで教育の質を向上させる。これにより、教師の指導は学生の学習成果に大きな影響を与え、学生の学習と支援に直接つながる。

教師 A は、教師の発音が学生の模倣のモデルとして重要であり、その正確性が学生の学習に大きな影響を与えるため、日本語教師は責任を持って正しい発音を指導すべきだと述べている。また、教育は日本語使用者の育成を目指し、理論よりも実用的な基礎やスキルに重点を置き、学生の負担を軽減する方向へ進むべきだと指摘している。さらに、教師には現代日本語の多様性を受け入れる姿勢が求められ、理論と実用のバランスを保ちながら、発音の変化に対応した教育方法を改善する必要があるとしている。音声教育が軽視されている現状に対し、特に少数派の教師がその改善に取り組む使命感を持つべきだとも強調している。

「すべての教員が少しでも発音の基本的な概念を持ってほしいと思っています。そうです、少なくとも間違っていないことが大事です。方言があっても構いませんし、多少なまりがあっても問題ありませんが、間違った発音であってははいけません。ですから私は言っています。「教えるということは良心的な事業です。」本を使って教えるだけでも可能ですが、自分の発音をしっかりと固めることがとても重要です。これは教育者としての基本的な責任だと思います。」（教師 A）

教師 B は、大学時代に基礎音声学を学び、独学や専門家の講義を通じて研究を深めたと述べている。また、大学院では読書会やシンポジウムへの参加

を通じて知識をさらに深化させた。一方、学生から音声研究への関与が減っていると指摘されることを残念に思いつつも、音声学への愛情を持ち続け、学生の興味を引き出す教育に努めていると強調している。さらに、行政経験を活かして革新的なカリキュラムを開発し、メディアや実務応用を取り入れることで、多様性を高め、業界のニーズに応える努力を続けていると述べている。

「私は、ビジネスコミュニケーションとは、業界内で多くの人と関係を持つ必要があり、人間関係が重要になる分野だと思います。ですので、自分が行政の仕事を担当するようになってから、この授業で学んだ内容が実際に応用される場面が多いと感じています。一方、発音に関しては、それほど大きな変化を感じたことはありません。ただ、先ほどお話ししたように、カリキュラム改革の中で実務応用の分野に関連する授業を増やしました。」（教師 B）

教師 C は、台湾の日本語発音教師が専門的訓練を受けていない現状を指摘し、自学や相談を通じて音声学の知識を補い、課題を克服する必要があると述べている。自身の発音の課題を認識しつつも、授業で専門性を発揮し、改善に努めている。一度挫折を経験したが、方法を見直すことで情熱を取り戻したとしている。発音授業には多大な努力が必要で、授業や行政業務に集中するため休む時間を削ることが生活に影響を与えると指摘している。さらに、専門性と楽しさを両立した授業の提供が挑戦であり、学生からの評価が教師の自信や情熱に大きく影響すると述べ、肯定的な評価は改善の動機となる一方、否定的な評価は情熱を削ぐ可能性があることを強調している。

「しかし、その後、授業を少し明るく活気のあるものに調整してみると、だんだん自分の仕事も意外と楽しいものだと感じるようになりました。ただし、仕事のプレッシャーや負担は非常に大きいです。毎日の授業が終わった後、提出された課題へのフィードバックを行うために、家に帰ってからも 3~4 時間の残業をする必要があります。40 人の学生の音声ファイルを一つ一つ確認しなければならず、それが時々怖く感じることもあります。発音の授業は、私の授業の中で 3 倍もの時間とエネルギーを費やしていると感じるからです。」（教師 C）

5.4 学生の学習と支援

「学生の学習と支援」は、すべての発音教育活動の最終的な成果物に該当し、学生が目標を達成し、学習意欲を維持しながら自信を持って発音能力を向上させることを目的とする。このカテゴリーには、学生の多様なニーズに応じたサポートや、テクノロジーを活用した学習環境の整備が含まれる。発音教育の重要性と目標に従い、学生が目指すべき方向性が明確になるとともに、教師の専門性を通じた適切な指導と支援を受けることで、学びの質が向上する。さらに、教育戦略とコースデザインによって整備された学習環境やリソースが学生を支え、目標の達成を促進する。

教師 A は、日本語発音教育で学生が完璧を追求しすぎて挫折しないよう、60%~70%の達成を目標にすることを勧めている。発音はコミュニケーションを重視すべきであり、完璧さへの執着を減らす必要があると述べ、中国語にはない日本語の発音に対しては、過度な指摘を避け、適度な矯正で学生の自信を損なわないことが重要だと指摘している。また、発音の定着が短期間では難しいため、教師には忍耐強い指導と個別対応が求められ、特に小規模クラスの効果を認めつつ、リソース不足が課題であると述べている。さらに、発音辞典やデジタルツール（例：OJAD）の活用を推奨し、学生の自主学習を支援する教材やツールの柔軟な活用が必要だと強調している。

「先ほどお話ししたように、学生の素質が私たちが望まない方向に進んでいる場合、私たちの教授法も変化させる必要があります。特に、学生が「発音なんて重要じゃない」と思っていたり、「発音は重要だとしても、教室に座っていれば自然に身につく」と考えている場合には、私たちの指導方法をそれに合わせて調整する必要があるのではないかと思います。」（教師 A）

教師 B は、発音教育では学生がアクセントの記憶に困難を感じた際、無理を強いるのではなく、楽しみながら学べる環境を整えることが重要だと述べている。また、学生に単語を整理し録音させるなど、個別対応で適した学習方法を見つける手助けが効果的だと指摘している。さらに、学生のニーズに応じた多様な方法を取り入れ、受動的な学習者のやる気を引き出す魅力的な活動を設計する必要性を強調している。学生が単語を「見る」だけで「覚えない」傾向があるため、これが表現意欲の低下や語彙力不足につながっていると指摘。加えて、アニメの情熱的な語調に熱中する一方、日常的な実用表現を軽視し、学習の興味と実際のニーズが乖離している点を問題視している。

「彼らが機械を使えば、それもまた練習の機会になると思います。さ

つき「アプリの話」をされましたが、彼らはあらゆるものを通じて学ぶことができます。たとえば、ウェブサイトを見るだけでも、私のように真似をしたり何かを試したりすれば、それ自体が学習のきっかけになります。つまり、学習の場はどんどん広がっていくのです。ただ、それを活用するかどうかは本人次第です。とはいえ、さっき話に戻りますが、一方的に受け身の学習をして口を開かない場合、発音への影響は大きくなります。誰も話さなくなれば、「話さなくてもいい」と考える人が増えるかもしれません。あるいは、技術の進歩によって、実際に対面する必要がなくなり、オンライン上のやりとりや文字の入力だけで済むようになります。例えば、ChatGPTのような技術を使えば、そうした状況がますます広がり、私たちの教え方や教育に影響を与える可能性もあると思います。」（教師 B）

教師 C は、発音教育では正確な発音を過度に追求せず、日本語を楽しく読むことを重視し、学生の興味を引き出すことが重要だと述べている。また、学生同士の交流や助け合いを通じて自主学習を促すことが、発音改善に効果的だと指摘している。一方、誤った発音の固定化や外国人学生の音声的背景による影響を課題として挙げ、特に○国の学生には発音面での多くの困難があると述べている。さらに、オンラインでのフィードバックやインタラクティブな授業の活用が学習効果を高めるとし、対話型、自主学習、個別指導を組み合わせた柔軟な授業の重要性を強調している。ただし、視覚化ツールの過剰な使用が学生の関心や参加意欲に悪影響を与える可能性があるため、テクノロジーを適切に活用し、新たなインスピレーションを探求する必要があると述べている。

「もしこれが将来の教授法となり、発音を視覚化することで学生が自身の改善点を確認できるようになるとしたら、確かにその方向性を発音の授業に取り入れる可能性について考える必要があります。しかし、それが学生にとって授業の負担になりすぎないかという懸念もあります。発音の楽しさが失われてしまうかもしれません。例えば、「楽しい発音」と「正しい発音を意識して修正すること」の間には、少なからず相反する部分があると感じます。そのため、これを導入することで、授業の雰囲気は少し堅苦しくなり、楽しくなくなる可能性があるとも思います。この点については慎重に観察しながら進めていくべき

だと思えます。」（教師 C）

6. 考察

前項では 3 名の対象教師のライフストーリーの分析を行った。ここでは分析の結果より、先行研究と 3 名の対象教師のライフストーリーを踏まえ、さらに考察を加えていく。

6.1 発音教育の再評価

発音教育は、学生の言語運用能力や異文化適応能力の向上において不可欠な役割を果たしている。しかし、日本語教育全体では軽視されがちな傾向が見られる。この課題を補完するために、対象教師のライフストーリーを基に、発音教育の実践とその意義を考察することが求められる。

まず、教師 A は幼少期から方言や発音の違いに親しみ、大学での厳格な発音教育を通じて発音への意識を高めた。また、日本の大学への留学経験を通じて音声学の研究を深め、「発音はコミュニケーションの潤滑剤として機能し、職場での競争力やプロフェッショナルなイメージ向上に寄与する」と述べている。このような背景から、教師 A は発音教育の最終目標を「コミュニケーションの質の向上」と捉え、その実用性を強調している。

一方、教師 B は大学時代に文法教育に関心を持ちながらも、音声学の講義に触発され、発音の抽象性による学生の挫折を防ぐための「楽しい学習環境」の構築に注力している。彼は「良好な発音は異文化適応能力を高め、異文化間交流を促進する」と考え、発音教育が単なる言語スキルの習得にとどまらず、広範な意義を持つことを示している。

また、教師 C は自身の発音学習における困難な経験を踏まえ、発音教育を通じて学生に達成感や自己肯定感を与えることを重要視している。彼の指導は、単なる正確性の追求にとどまらず、「学習の楽しさ」と「学生の意欲向上」を重視した実用的な教育を目指している。

これらのライフストーリーから、発音教育の重要性は次の 3 点に集約される。「職場や社会での競争力の向上（教師 A）」「異文化交流の促進（教師 B）」「達成感と学習意欲の向上（教師 C）」。さらに、先行研究（川染 2016、千仙永 2017）を踏まえると、発音教育は学習者のコミュニケーション能力の向上だけでなく、自己表現や異文化理解の促進にも寄与する包括的な教育活動であると考えられる。したがって、発音教育を教育カリキュラムの中心的要素として再評価し、他の科目（例：文法、会話）の教育内容とも有機的に統合することが必要である。

6.2 ライフストーリーと教育観の形成

教師 A、B、C のライフストーリーから、それぞれの人生経験が教育観の形成にどのように寄与しているかが明らかである。教師 A は幼少期から日本語に触れる環境で育ち、大学での厳格な発音教育と日本留学を通じて、発音教育への意識を高めた。さらに、音声学研究への転換を経て、方言アクセントや誤った発音の影響を改善する教育実践を行っている。教師 B は、音声学の講義に触発され、文法と音声の学問的融合を目指した。彼は学生が挫折しないよう、「楽しい学習環境」の構築に尽力し、音声学を学びやすくする工夫を続けている。一方、教師 C は、音声学への関心が後から芽生えたケースで、自身の困難な発音学習経験を通じて、学生に達成感を与える教育を重視している。

これらのライフストーリーの分析から、教師の教育観形成には、幼少期の経験、学術的探究、教育現場での実践が複合的に影響していることがわかる。このため、ライフストーリーの共有を通じた教師研修プログラムが、教育観の深化に有効であると考えられる。

6.3 学習者支援の方法

教師 A は、学生が完璧を追求しすぎて挫折しないよう、適度な矯正と個別指導を通じて効率的な学習を支援する一方で、大人数クラスでの対応やリソースの制約を課題として挙げている。教師 B は、楽しみながら学べる環境の構築や個別対応を通じた学習方法の最適化に加え、受動的な学生のやる気を引き出す動機付けの工夫を重視し、アニメへの過度な興味が実用表現の軽視につながる点を懸念している。教師 C は、発音学習において楽しさと興味を引き出すことを重視し、学生同士の協働学習を促進することで学習効果を高めると同時に、オンラインフィードバックや視覚化ツールを活用する一方で、技術の過剰な活用が関心低下を招く可能性を指摘している。このように、三者の考えは、それぞれ学生支援と教育方法の最適化に向けた異なる視点を提供している。

また、川染（2016）が「大人数クラスでの発音教育の課題を指摘し、個別の誤りに対応するために小規模クラスの導入や効率的な指導方法の開発が必要である」と述べ、土岐（2010）が「批判的な指導ではなく、学生が自信を持てる学習環境を作ることが重要だ」と強調しているように、教師は学生の多様なニーズに対応しつつ、限られたリソースの中で最大限の効果を生む教育方法を模索する必要がある。

6.4 発音教育と異文化理解の関連性

須藤（2013）は、協働学習やグループ活動が学生の発音意識や学習意欲を高める効果があることを示している。また、川染（2016）の研究では、

発音教育を「異文化理解の促進」の視点から再評価する必要性が指摘されている。たとえば、発音を通じて学生が多文化社会に適応しやすくなるようなカリキュラムデザインが求められている。

一方、教師 A は、標準的な発音の向上が職場での競争力やプロフェッショナルなイメージを高め、異文化交流を円滑にすると述べている。教師 B は、良好な発音が多文化適応能力を高め、誤解を防ぎ、友好的な対応を促進すると強調している。教師 C は、発音教育が学生の達成感や自信を育むとともに、インタラクティブを通じて異文化理解を深める重要な役割を果たすと考えている。三者とも、発音教育が多文化理解を促進する手段として重要であると認識しており、発音教育が多文化理解や国際交流の基盤となることが期待されている。このように、発音教育を異文化理解やグローバルコミュニケーション能力の育成における重要な要素として位置づけ、教育内容をデザインすることが必要である。

6.5 日本語発音教育への示唆

以上から、本研究によって得られた示唆について、以下のようにまとめた。

まず、教師研修プログラムの拡充が必要である。教師 A、B、C のライフストーリーが示すように、それぞれの経験や価値観が発音教育観の形成に大きな影響を与えている。このため、ライフストーリーの共有を通じて教育観を深める研修プログラムを設けることを提言する。例えば、共同授業、定期的な教材開発会議、研修制度などを提案する。さらに、先行研究や実践例を取り入れた教育方法の共有や、批判的思考を促進する場を提供することで、教師自身が教育観を再評価し、教育実践を改善するきっかけを作ることができる。

次に、発音教育のカリキュラム改革が求められる。発音教育を他の教育科目（例：文法、会話、読解）と統合することで、カリキュラム全体が相互に支援し合い、学生の発音スキルを効率的に向上させることが可能である。例えば、教師 A の提案する「発音教育をカリキュラム全体に広げるアプローチ」や、教師 B の「IPA やアクセント指導を段階的に組み込む方法」を実施することで、学習効果を高めることが期待される。さらに、クラス規模やリソースの制約を考慮し、少人数クラスやオンライン学習を活用した効率的な指導方法を導入することが重要である。

また、学習支援ツールの開発と導入が発音教育の質向上に寄与する。具体的には、OJAD や音声辞典などのデジタルツールを活用することで、学生の自主学習能力を強化し、授業外でも継続的に学習を進められる環境を整えることができる。さらに、ゲームやアクティビティを授業に取り入れること

で、発音学習を「楽しさ」につなげ、学生の学習意欲を引き出す工夫が求められる。これにより、学生が発音の抽象性に挫折することを防ぎ、積極的な学習姿勢を養うことができる。

最後に、異文化理解を組み込んだ発音教育の実施を提案したい。発音教育を通じて、学生が異文化社会におけるコミュニケーション能力を高めることは重要である。教師 B が指摘するように、良好な発音は異文化適応能力を支え、国際的な交流を円滑に進める基盤となる。もっとも、実際の教育現場では授業時間が限られており、発音指導に加えて異文化理解を十分に取り入れることは容易ではない。そのため、すべての授業で包括的に行うのではなく、授業の一部に異文化交流のシナリオを取り入れる、あるいは補助教材や課題として異文化に関するトピックを取り上げるなど、段階的かつ柔軟に実施する方法が現実的である。こうした工夫により、発音教育は単なる音声訓練にとどまらず、学生が実際の社会的・文化的文脈を想定しながら言語運用能力を高める機会となり、結果としてグローバル人材育成にも資する教育へと発展し得る。

7. 終わりに

本研究では、台湾の日本語発音教師 3 名のライフストーリーを通じて、彼らの発音教育観の形成過程とその実践の特徴を明らかにした。各教師がそれぞれの背景や経験に基づいて構築した発音教育観は、学生の学習環境や教育方法に大きな影響を与えており、それぞれの教育観には、発音教育を通じた学生支援の可能性が見出された。

教師 A は、発音教育を「職場での競争力向上」という観点から重視し、教師 B は「異文化交流の促進」としての意義を強調した。一方、教師 C は、自身の発音学習における困難な経験を背景に、学生が達成感を得られる教育を目指している。これらの視点は、発音教育が単なる技術指導にとどまらず、学生のコミュニケーション能力や自己表現力の向上、さらには異文化理解の深化に寄与する包括的な教育活動であることを示している。さらに、本研究では、発音教育が直面している課題にも言及した。たとえば、教材の不足や教師間の目標の不一致、教育リソースの制約などが挙げられる。これらの課題を克服するためには、教師間の協働や継続的な研修の実施、そしてテクノロジーを活用した効率的な教育方法の導入が求められる。

本研究の成果は、日本語教育全体における発音教育の再評価に貢献するものであり、台湾における発音教育の発展に新たな視点を提供するものと考えられる。今後は、さらに多くの教師や学生を対象に調査を行い、発音教育観の多様性や効果的な指導法のさらなる探究を進めることが課題である。ま

た、自身の授業記録や学生のフィードバック、学習成果との照合分析の実施も求められる。

引用文献

- 荒川歩、安田裕子、サトウタツヤ（2012）「複線経路・等至性モデルの TEM 図の描き方の一例」『立命館人間科学研究』25、京都：立命館大学人間科学研究所、pp.95 – 107
- 飯野令子（2015）「日本語教育に貢献する教師のライフストーリー研究とは」三代純平（編）、『日本語教育学としてのライフストーリー：語りを聞き、書くということ』東京：黒潮、pp.248 – 273
- 太田裕子（2010）『日本語教師の「意味世界」：オーストラリアの子どもに教える教師たちのライフストーリー』東京：ココ出版
- 岡崎敏雄、岡崎眸（1997）『日本語教育の実習—理論と実践』東京：アルク
- 小河原義朗、河野俊之（2002）「教師の音声教育観と指導の実際」『日本語教育方法研究会誌』9、東京：日本語教育方法研究会、pp.2-3
- 小河原義朗、河野俊之（2009）『日本語教師のための音声教育を考える本』東京：アルク
- 折本早木子（2022）「日本語教師養成課程における自己教育力の育成についての研究」『神戸親和女子大学国際教育研究センター紀要』7、神戸：親和女子大学国際教育研究センター、pp. 25-39
- 川染有（2016）「日本語教師の発音指導活動に関わる要因 — 教師インタビューの質的分析から—」『日本語教育』77、ソウル：韓国日本語教育学会、pp. 11-26
- 桜井厚（2002）『インタビューの社会学—ライフストーリーの聞き方—』東京：せりか書房
- 桜井厚（2012）『ライフストーリー論』東京：弘文堂
- 佐々木倫子（2006）「パラダイムシフト再考」国立国語研究所編『日本語教のための新たな文脈—学習環境、接触場面、コミュニケーションの多様性—』東京：アルク、pp. 259-282
- 佐々木倫子（2010）「日本語教師養成講座の充実を求めて—民間教師養成講座用の自己評価表試案—」『言語文化研究』創刊号、東京：桜美林大学、pp. 89-106
- 澤邊裕子（2016）「韓国の中高等教育段階における日本語教育の意味—教師のライフストーリーからの考察—」『宮城女子学院大学研究論文集』122、宮城県：宮城女子学院大学、pp.103 – 124

- 杉村佳彦（2022）「ライフストーリー研究から見る日本語教育者の変容—海外移動による教育と研究への影響を中心に—」『東呉外語學報』52、台北：東呉大学外国語学部、pp. 101-128
- 須藤潤（2013）「日本語音声教育における動機づけの意義とその可能性—「学習者間の協力」に関する事例的考察—」『コミュニカーレ』2、京都：同志社大学グローバル・コミュニケーション学会、pp.43-70
- 千仙永（2017）「日本語音声教育の変遷・課題・展望—日本国内における教師教育に着目して—」『早稲田日本語教育学』22、東京：早稲田大学日本語教育研究科、pp. 41-60
- 土岐哲（2010）『日本語教育からの音声研究』東京：ひつじ書房
- 戸田貴子（2008）「日本語教育と音声の関わり」『日本語教育と音声』東京：黒潮、pp.1-80
- 村井大介（2014）「地理歴史科教師の歴史教育観の特徴とその形成要因—教師のライフストーリーの聴き取りを通して—」『全国社会科教育学会社会科研』81、東京：全国社会科教育学会、pp.27-38
- 三代純平（2014）「日本語教育におけるライフストーリー研究の現在—その課題と可能性について—」『リテラシーズ』14、東京：黒潮、pp.1-10

本論文於 2025 年 4 月 9 日到稿，2025 年 10 月 15 日通過審查。

Análisis de los mecanismos de la lexicalización de la formación compuesta en español¹

劉珍綾/Liu, Chen-Ling

淡江大學歐洲語文學系副教授

Department of European Languages and Cultures, Tamkang University

【摘要】

本研究探討西文構詞成分的詞彙化現象，分析西語複合語素在詞彙化過程中的語法特徵。從詞彙化所依據的句法基礎進行結構性探究，我們發現，西文在形成詞彙化過程中，構詞、句法及語義層面均發生變化。我們歸納出影響西語複合構詞詞彙化的重要因素，包括語素融合、慣用語特徵、句法功能弱化、類推與再分析現象等。最終，我們延展詞彙化與語法化的互補機制理論，並運用在複合詞上。我們認為，這兩種轉換機制，在西文中，是一種位於同一形態層面上運作的相輔相成過程，兩者機制在構詞過程中，呈現出並行互動的關係。

【關鍵字】

詞彙化，融合，熟語特徵，類推，再分析

【Abstract】

This study examines the phenomenon of lexicalization in Spanish morphological components. It analyzes the lexicalization process of Spanish compositional patterns. It shows the formal and semantic characteristics of the lexicalization behavior experienced by structures of syntagmatic origin in the production of formations. The analysis reveals that phenomena such as fusion, idiomatization, syntactic weakening, analogy, reanalysis, and recategorization are indispensable factors in Spanish lexical formation. Ultimately, this study proposes a

¹ 本稿構思源自 2013 年於 Universidad de Valladolid 撰寫博士論文主題之一。博士論文未發表或出版，無 ISBN 碼。本文內容經重構，加入新資料，延展「詞彙化」進一步的問題意識。

theoretical extension of the complementary model between lexicalization and grammaticalization, applying it specifically to the domain of compound formation. The findings further demonstrate that grammaticalization and lexicalization in Spanish are mutually complementary processes and functionally integrated processes that operate within a shared morphological domain, that operate in the same morphological terrain. A close interaction between these two processes is dynamically observed in word formation.

【Keywords】

lexicalization, fusion, idiomaticity, analogy, reanalysis

1. Introducción

El fenómeno de la lexicalización, a menudo analizado en contraposición o en paralelo con la gramaticalización, constituye un eje central en los estudios contemporáneos sobre la evolución morfológica del español. Lejos de tratarse de un proceso marginal, la lexicalización incide de manera directa en la configuración del léxico, al permitir la integración de unidades que originalmente no formaban parte del repertorio léxico convencional. Desde diversas perspectivas, se ha intentado definir sus rasgos característicos, así como establecer sus vínculos con otros mecanismos de cambio lingüístico, particularmente con la gramaticalización, con la que mantiene una relación de complementariedad y, en ocasiones, de superposición funcional.

Partiendo de este enfoque, el análisis desarrollado en este trabajo pretende examinar los mecanismos que intervienen en la lexicalización de formaciones compuestas en español, atendiendo tanto a los factores estructurales implicados como a las implicaciones morfosintácticas y semánticas del proceso. Partiendo de un marco teórico comparativo, se analiza cómo la lexicalización, entendida como un proceso de fijación formal y semántica, opera en distintos niveles y da lugar a nuevas unidades léxicas que reflejan una pérdida de composicionalidad y una creciente autonomía estructural.

A diferencia de la gramaticalización, la lexicalización se interpreta como un proceso que actúa de manera complementaria que mantiene una interacción constante con esta en el contexto de la evolución lingüística (Elvira 2006 y 2020; Buenasfuentes 2007). Este proceso actúa como un mecanismo de formación léxica que, aunque avanza en dirección opuesta a la gramaticalización, comparte con ella ciertos rasgos característicos: como la fijación estructural de los elementos implicados, la pérdida o transformación de su significado original, la reclasificación gramatical y la reducción

fónica o fusión de elementos. A pesar de estas similitudes, se identifica una diferencia central entre ambos procesos: mientras la gramaticalización incorpora elementos al sistema gramatical reduciendo la irregularidad, la lexicalización tiende a introducir irregularidades al integrar unidades que escapan a las reglas gramaticales para formar parte del léxico (Buenafuentes 2006; Bosque 1982; Chafe 1968; Varela 2005).

Desde el marco teórico de la lexicalización y la gramaticalización, el presente estudio analiza la influencia del proceso de lexicalización sobre los formantes compositivos en la morfología del español. Tal como señala Bauer (1983), entre los distintos mecanismos morfológicos de creación léxica, la composición representa un caso paradigmático de lexicalización en español objeto de análisis, ya que supone un traspaso funcional del nivel morfológico al léxico. En sistema de lingüística española, una de las características distintivas de la composición es la fijación sintáctica. La consolidación de un significado referencial único, la integración de dos unidades léxicas simples en una única entrada en el léxico, así como por la imposibilidad de insertar elementos intermedios o modificar el orden interno de los componentes.

Junto a estas similitudes, también se destacan diferencias relevantes. Por ejemplo, en español se observa la pérdida del significado composicional en términos como *el interesado*, *considerando*, *pagaré*, así como la creciente autonomía de morfemas como *-logo*, *-ismo* y *crono-*. Estas características identifica una lengua en la que predomina una evolución histórica desde unidades autónomas hacia formas morfológicas dependientes, y en la que se detecta una escasa presencia de formantes lexicalizados en los contextos flexivo y derivativo. Asimismo, el fenómeno del acortamiento léxico que da origen a nuevas unidades autónomas, como *tele-* o *foto-* en español, no tiene correspondencia en la morfología china, donde no ocurre una segunda gramaticalización equivalente.

Para contrastar las convergencias y divergencias entre lexicalización y gramaticalización, Brinton y Traugott (2005: 110) sintetizan estos paralelismos en una tabla comparativa, cuyo modelo, en nuestra opinión, resulta aplicable tanto al inglés como al español en dominios y niveles morfológicos similares.

Tabla 1: Relación paralela en la dinámica de la gramaticalización y la lexicalización

	Gramaticalización	Lexicalización
Metáfora/Metonimia	+	+
Fusión	+	+
Unidireccionalidad	+	+
Gradualidad	+	+
Idiomática	+	+

Coalescencia	+	+
Descategorización	+	-
Subjetividad	+	-
Frecuencia	+	-
Debilitamiento semántico	+	-
Generalidad tipológica	+	-
Productividad	+	-

Tal como se ha expuesto en este apartado, la lexicalización y la gramaticalización comparten múltiples rasgos estructurales y funcionales, si bien operan en niveles distintos del sistema lingüístico. Una de las claves para comprender esta interacción reside en el análisis de los contextos morfológicos en los que ambos procesos se manifiestan con mayor claridad. Entre estos, la formación de compuestos léxicos en español constituye un terreno privilegiado para observar, desde una perspectiva empírica, los mecanismos que intervienen en la lexicalización. En lo que sigue, nos centraremos en las estructuras compuestas como expresión concreta del proceso lexicalizador, prestando atención a su evolución, sus grados de fijación y sus implicaciones morfosintácticas y semánticas.

2. Mecanismos de lexicalización en estructuras compuestas

Desde un enfoque sincrónico, la lexicalización puede entenderse como el proceso mediante el cual una unidad léxica se incorpora al inventario léxico de una lengua. Esta idea también hace referencia a la integración progresiva de ciertas formas lingüísticas —ya sean simples, complejas o portadoras de significados novedosos— dentro del léxico convencional, tal como señalan Brinton y Traugott (2005: 21). Partiendo de esta concepción general, puede afirmarse que, en lenguas como el inglés y el español, la formación de compuestos representa una manifestación clara de lexicalización, en tanto que supone una transferencia funcional desde una perspectiva morfológica hacia el ámbito léxico.

En el caso del español, compuestos como *bienvivir*, *pelirrojo*, *cuentagotas*, *nochebuena* (derivado de un sintagma) o *bienteveo* (originado a partir de una cláusula) ilustran de manera evidente este proceso. Estas construcciones, ya procedan de estructuras morfológicas o sintácticas, dan lugar a unidades léxicas complejas que se distinguen por su fijación formal y su significado unificado. En esta línea, puede sostenerse que la lexicalización, en el contexto de la composición léxica española, opera como un mecanismo de fijación —o, en términos tradicionales, de fosilización— que permite que ciertas construcciones sintácticas se consoliden como elementos léxicos

con función referencial. A partir de este marco teórico, el presente estudio se orienta al análisis de las propiedades que caracterizan el proceso de lexicalización en determinadas estructuras compositivas del español.

2.1 Procesos de fusión morfosintáctica

Uno de los primeros indicios del avance del proceso de lexicalización en las estructuras compuestas radica en su progresiva función de fusión. Desde una perspectiva diacrónica, diversos autores han subrayado que la lexicalización suele estar acompañada de procesos de univerbación y reducción fonológica, mediante los cuales una secuencia sintáctica o morfológica da lugar a una unidad cohesiva con significado propio. En esta sección se analizan ejemplos representativos que ilustran cómo se disuelve la frontera entre constituyentes para dar paso a nuevas formas lexicalizadas.

Según Girón Alconchel (2022), desde un enfoque histórico, la lexicalización ha sido comprendida como un proceso estrechamente ligado a la fusión, entendido como el proceso por el cual una secuencia léxica compleja da lugar a una unidad léxica simple, generalmente acompañada de una transformación significativa en su contenido semántico. Entre los ejemplos representativos de este fenómeno, los autores mencionan la univerbación, es decir, la evolución de un sintagma hacia una palabra única. Asimismo, subrayan que los procesos de lexicalización se inician cuando una expresión compuesta por varias palabras comienza a operar como una sola unidad gramatical. Véanse algunos ejemplos en distintos idiomas²:

Tabla 2: Operación de univerbación en la lexicalización

Idiomas	Ejemplos	Traducción en español
Inglés	topsy-turvy < top so turvy	‘arriba muy desordenado’ → desorden, patas arriba
Inglés	handicap < hand in the cap	‘mano en el sombrero’ → dificultad, discapacidad
Francés	aujourd’hui < au jour d’hui	‘al día de hoy’ → hoy
Alemán	langeweile < lange weile	‘largo tiempo’ → aburrimiento

De forma análoga, la composición léxica en tanto en español como en chino mandarín presenta la fusión como una característica común. En este proceso, combinaciones originalmente libres de palabras tienden a consolidarse como unidades

² Ejemplos tomados de Liu (2013: 291).

léxicas indivisibles, cuyos significados pueden o no derivarse de manera transparente de los elementos que las conforman. Estas univerbaciones suelen implicar algún grado de reducción fonológica y, con el tiempo, llegar a perder la transparencia morfológica o semántica. En español, compuestos como *anchicorto* (A+A), *helioterapia* (N+N), *maniatar* (N+V), *pelirrojo* (N+A), *quitapón* (V+V) , *salvavidas* (V+N) o *salvoconducto* (A+N) son considerados formas lexicalizadas precisamente por la pérdida de material fónico y la integración de sus componentes en una sola entidad léxica. Este fenómeno es coherente tanto con la perspectiva de Lliteras (2007) como con lo señalado por Brinton y Traugott (2005: 44): Desde una perspectiva histórica, las formaciones compuestas y derivadas constituyen ejemplos paradigmáticos del proceso de lexicalización, ya que en ellas se manifiestan mecanismos de coalescencia formal que diluyen las fronteras entre los morfemas constituyentes, dando origen a unidades léxicas integradas y estables a lo largo del tiempo.

Por otro lado, de acuerdo con la distinción que efectúa Contreras (2004), conviene proponer una gradación del proceso de lexicalización para los compuestos en español, dado que el grado de fusión entre sus elementos varía en función del significado semántico que adopta la estructura compositiva. La primera categoría reúne construcciones en las que los segmentos que la integran se articulan mediante mecanismos de aglutinación formal, generando así una nueva unidad léxica cuyo significado, sin embargo, permanece composicional. Ejemplos como *oso negro*, *papel blanco*, *glóbulo rojo* o *ballena azul* se sitúan dentro de esta fase del continuum de lexicalización, dado que los adjetivos cromáticos funcionan como clasificadores que indican la variedad o atributo global del referente. En estos casos, la construcción no implica la evocación de un concepto abstracto a través de mecanismos metafóricos. En contraste, el segundo grupo alude a aquellos procesos en los que una estructura originalmente gramatical se transforma en una unidad léxica dotada de un nuevo contenido semántico. Esta transición implica una reconfiguración del significado, producto de fenómenos como la metaforización o la metonimización, lo que da lugar a formas plenamente lexicalizadas. Compuestos de este tipo evidencian una mayor intensidad en el proceso de lexicalización, donde la fusión de elementos sintácticos activa la formación léxica a partir de una base originalmente sintagmática. A continuación se exponen ejemplos que ilustran esta dinámica de compuestos completamente lexicalizados:

Nombre + Nombre: *telaraña*, *hojalata*, *madreperla*, *baloncesto*, *puntapié*

Nombre + Adjetivo: *aguamarina*, *manirroto*, *boquidulce*, *nochebueno*, *hierbabuena*

Adjetivo + Nombre: *malhumor*, *ciempiés*, *medianoche*, *malapata*, *altavoz*

Verbo + Nombre: guardabosques, saltamontes, parabrisas, trabalenguas,

Verbo + Verbo: tientatenta, pasapasa, vaiven, quitapón, picapica

Oracionales: hazmerreír, sabelotodo, nomeolvides, correveidile, tentempié

2.2 Fijación idiomática en el léxico

Si bien la fusión formal constituye un aspecto central, otro mecanismo esencial en la lexicalización de compuestos es la fijación idiomática, cuyo análisis se desarrolla a continuación. Junto a la fusión formal, el componente semántico-pragmático del proceso lexicalizador adquiere especial relevancia en lo que respecta a la idiomatización. Cuando los constituyentes de una expresión dejan de funcionar como unidades independientes con significado literal y pasan a conformar una unidad interpretativa única, estamos ante un caso típico de fijación idiomática. Este fenómeno permite comprender cómo ciertas expresiones se consolidan en el léxico más allá de su motivación composicional original. En esta sección se analizarán los distintos grados de idiomatización y su aplicabilidad a compuestos en español y chino mandarín.

Tanto Brinton y Traugott (2005: § 2.3.4) como investigadores más recientes, entre ellos Pardo Llibrer (2023), coinciden en que el fenómeno de la fusión, propio de la lexicalización, ofrece una base explicativa sólida para examinar diversas dimensiones semánticas y pragmáticas que intervienen en la conformación de nuevas unidades léxicas. En este marco, se destacan particularmente dos procesos fundamentales: la idiomatización y la desmotivación. De acuerdo con estos investigadores, la idiomatización está estrechamente vinculada con la rutinización y convencionalización del uso lingüístico, fenómeno que propicia la univervación, entendida como el proceso mediante el cual se desdibujan los límites entre los elementos constituyentes de una expresión, favoreciendo así su simplificación formal. En efecto, Brinton y Traugott destacan que existe un amplio consenso en asociar el proceso de lexicalización con el de idiomatización. En esta misma línea, Lehmann (2002: 14) sostiene que ambos fenómenos deben entenderse como fases de un mismo proceso. Igualmente, Moreno Cabrera (1998: 214-215) afirma que las estructuras idiomatizadas constituyen casos paradigmáticos de lexicalización, al considerar que tanto la idiomatización como la desmotivación representan los rasgos semánticos y formales que señalan la integración de construcciones sintácticas o compuestas dentro del sistema léxico.

Por otro lado, Lipka (1992: 214) ofrece ejemplos en inglés como *wheelchair* ('silla de ruedas'), *pushchair* ('cochecito de bebé') o *trousersuit* ('traje con pantalón'), cuyas interpretaciones específicas y no deducibles a partir de sus componentes los convierten en ejemplos claros de idiomatización. Desde una perspectiva diacrónica, Bussmann (1996) también subraya la centralidad de la idiomatización en el proceso de

lexicalización, al señalar que el significado global de ciertas unidades no se deriva de forma transparente de sus partes constitutivas y que su motivación solo puede ser reconstruida mediante el análisis histórico. Entre los ejemplos que aporta figuran *cupboard* ('alacena'), *neighbor* ('vecino'), y *mincemeat* ('picadillo' o 'relleno').

En un planteamiento más reciente, Blank (2001: 1599-1600) desarrolla una tipología que establecen tres niveles diferenciados de idiomatización en las estructuras compuestas, ejemplificada a través de diferentes construcciones léxicas:

- a) Inglés: *wheelchair* (en español 'silla de ruedas')
- b) Alemán: *Hundekuchen* (en español 'galleta para perro')
- c) Italiano: *bocca di leone* (en español 'boca de dragón' [nombre de flor])

Según el autor, el orden c) > b) > a) refleja un incremento en el grado de lexicalización del compuesto. En el grupo a), se mantiene el significado literal de los constituyentes, aunque el significado global puede no ser del todo predecible. En b), el significado deriva del sentido general de los componentes, pero con una interpretación específica o no prototípica. Finalmente, en c) se produce una transformación semántica de tipo metafórico o metonímico, generando una opacidad completa en la interpretación del conjunto.

En efecto, tal como se ha observado en lenguas como el alemán, el inglés, el italiano y el español, la clasificación propuesta por Blank también resulta aplicable, según lo evidenciado en nuestra tesis doctoral (Liu, 2013), a las formaciones compuestas del chino mandarín y del español, los cuales manifiestan una escala gradual de idiomatización acorde con este mismo esquema. Esta correspondencia se ilustra en el cuadro que se presenta a continuación:

Tabla 3: Grados de idiomatización³

Agrupación de Blank	Ejemplos en chino mandarín y español
a) Hundekuchen en (galleta de perro)	Ejemplos de chino mandarín: Verbo-objeto: zhǔ cài 煮菜 'cocer' 'verdura' → <i>cocinar</i> Verbo-comp.: shēng gāo 升高 'subir' 'arriba' → <i>subir, levantar</i> Núcleo-modificador: tóu yūn 頭暈 'cabeza' 'mareado' → <i>marea</i> Modificación-núcleo: zhū ròu 豬肉 'cerdo' 'carne' → <i>carne de cerdo</i> Coordinado: zǐ mèi 兄弟 'hermana mayor' 'hermana menor' → <i>hermanas</i>

³ Los datos léxicos del chino mandarín utilizados en este trabajo proceden de Fang (1985) y Dong (2002).

	Ejemplos de español: N + A: pelirrubio N + N: cibernauta V + N: abrelatas
b) wheelchair (silla de ruedas)	Ejemplos de chino mandarín: Sujeto-predicado: xīn tiào 心跳 ‘corazón’ ‘saltar’ → <i>latido</i> Verbo-objeto: tóu zī 投資 ‘investigar’ ‘capital’ → <i>investigación</i> (financiera) Modificación-núcleo: lún chuán 輪船 ‘rueda’ ‘barco’ → <i>crucero</i> Coordinado: wén zì 文字 ‘texto’ ‘palabra’ → <i>palabra</i>
	Ejemplos de español: A + N: malasangre N + A: manirroto N + N: bocacalle Adv. + A: bienhechor
c) bocca di leone (boca de dragón)	Ejemplos de chino mandarín: Verbo-comp.: shòulèi 受累 ‘sufrir’ ‘cansado’ → <i>enrendo, enrendar</i> Modificación-núcleo: máo hái 毛孩 ‘peludo’ ‘hijo’ → <i>mascota como</i> <i>perros o gatos</i> Coordinado: gǔ ròu 骨肉 ‘hueso’ ‘carne’ → <i>hijos, hermanos</i> Verbo-objeto: chī kǔ 吃苦 ‘comer’ ‘amargura’ → <i>sufrir</i> Sujeto-predicado: rì shí 日蝕 ‘sol’ ‘corroerse’ → <i>eclipse solar</i>
	Ejemplos de español: A + N: altamar V + N: rompecabezas N + N: hojalata Oración: nomeolvides

Tal como se observa en el grupo a), los compuestos tanto en chino mandarín como en español presentan un elevado nivel de composicionalidad, ya que el significado global se puede inferir con facilidad a partir del sentido literal de sus componentes. En cambio, en el grupo b), aunque los componentes que conforman el compuesto mantienen el sentido semántico original, el conjunto puede manifestar una caracterización semántica específica. En estos casos, algunos compuestos adquieren significados denotativos particulares, los cuales deben ser interpretados según la prominencia o relevancia semántica que adquiere uno de los constituyentes en el

contexto del compuesto. Por último, en la agrupación c) se incluyen compuestos que participan en procesos de lexicalización mediante mecanismos metafóricos y metonímicos. En estas estructuras, se activan fenómenos como la personificación, la animalización, la cosificación, así como factores culturales, temporales o relaciones de parte-todo, entre otros, que provocan una pérdida del sentido composicional y una mayor opacidad semántica.

En definitiva, estos tres niveles de lexicalización, definidos según el grado de idiomatización, se identifican en compuestos tanto del chino mandarín como del español, sin que se evidencien diferencias significativas entre ambas lenguas. Este modelo gradual, por tanto, constituye un criterio de análisis generalizable que resulta fácilmente adaptable al análisis de la composición léxica en distintas lenguas naturales.

Como se ha observado, la idiomatización constituye una fase clave en la lexicalización de estructuras compuestas, al transformar progresivamente expresiones composicionales en unidades semánticamente opacas y formalmente fosilizadas. No obstante, esta fijación semántica va acompañada, de manera simultánea, por una transformación en el plano sintáctico: los elementos que integran la estructura compuesta tienden a perder su autonomía funcional dentro de la oración. Este fenómeno de debilitamiento sintáctico resulta esencial para comprender la consolidación morfológica de los compuestos, especialmente en aquellos casos en los que la secuencia original responde a un esquema gramatical productivo, como el de tipo verbo + nombre en español.

2.3 Naturaleza idiosincrática de las unidades léxicas

Más allá de la fusión formal y la fijación idiomática uno de ciertas unidades lexicalizadas, el proceso de mecanismo idiosincrático constituye otro de los pilares fundamentales en la consolidación de los compuestos como entidades léxicas. Esto se refiere a la pérdida de segmentabilidad morfológica y al incremento de la opacidad semántica, características que convierten a ciertas unidades en elementos no productivos dentro del sistema morfológico. Brinton y Traugott (2005: 33-34) destacan que, cuando una palabra alcanza un estado de lexicalización plena, deja de ser morfológicamente transparente, lo que la excluye de los patrones regulares de formación de palabras. Según el autor, de forma tradicional, el concepto de lexicalización se ha asociado con los mecanismos habituales de creación léxica, entre los cuales destaca la composición, lo cual contribuye al enriquecimiento del vocabulario en una lengua determinada. No obstante, diversos estudios recientes advierten que la lexicalización en su grado más avanzado no necesariamente proporciona información relevante sobre los mecanismos productivos de creación léxica. En otras palabras,

cuando una palabra alcanza un estado de lexicalización plena, deja de ser morfológicamente segmentable y, por ende, pierde su valor como modelo productivo (Brinton y Traugott, 2005: 21).

Un ejemplo claro en español es el caso de *nomeolvides*, cuya estructura compositiva se encuentra completamente lexicalizada, lo que la excluye de los patrones regulares de composición. De manera similar, *terremoto*, resultado de la lexicalización del sintagma latino *terrae motum*, ilustra este fenómeno, ya que el genitivo latino *terrae* ha perdido transparencia morfológica y se ha vuelto opaco para los hablantes contemporáneos.

Además de la pérdida de segmentabilidad y la opacidad semántica, otro indicador relevante en la lexicalización es el debilitamiento de la estructura sintáctica, como se verá en la siguiente sección.

3. Debilitamiento de la estructura sintáctica

Como es ampliamente reconocido y ha sido señalado por diversos especialistas en morfología general y del español (Benveniste 1977; Piera y Varela 1999), la formación compositiva tiene como base un origen sintáctico compartido. En el caso del español, el esquema verbo + nombre se distingue por su elevada productividad y por reflejar una estructura sintáctica de tipo predicativo, en la que el segundo constituyente actúa como complemento directo del verbo. No obstante, en el transcurso del proceso de lexicalización —entendido como la creación de una unidad léxica a partir de un sintagma—, a pesar de que la relación entre los elementos sigue siendo de naturaleza sintáctica, se evidencia un debilitamiento progresivo de la autonomía gramatical de los componentes. Esta pérdida de independencia sintáctica favorece la consolidación del compuesto como una unidad léxica, incrementando su cohesión interna y autonomía morfológica.

Este proceso se enmarca dentro de la escala de abstracción formulada por Heine, Claudi y Hünemeyer (1991), posteriormente desarrollada por Moreno Cabrera (1998), según la cual una estructura del tipo verbo + nombre —que inicialmente designa una acción o proceso, como *sacar algo*, *portar algo* o *guardar algo*— puede evolucionar hasta referirse a una entidad concreta, sea persona u objeto (*guardarropa*, *sacacorchos*, *portalápiz*, etc.), una vez lexicalizada.

En sintonía con esta observación, Dong (2002: 175-181) señala que, en chino mandarín, la lexicalización de construcciones verbo + objeto también se ve facilitada por la pérdida de autonomía sintáctica de los constituyentes, lo que propicia su aglutinación en una sola unidad léxica. Este mismo patrón puede extrapolarse a los compuestos verbo + nombre en español.

Por su parte, Hopper y Traugott (1993) destacan que los verbos que integran los compuestos VN en español suelen denotar acciones —como en *cortapuros*, *abrelatas* o *sacacorchos*—, y que ciertos verbos de uso frecuente, como *guardar* o *portar*, actúan como esquemas productivos dentro del proceso de lexicalización. Este proceso conlleva una atenuación del significado específico del verbo, el cual deja de expresar una acción concreta o delimitada en el tiempo. A continuación, se exponen ejemplos provenientes del español que ilustran este fenómeno.

Tabla 4: Formación lexicalizada a partir de esquemas verbo-objeto

Verbo con disminución de su función predicativa	Nombre con significado genérico o no referencial	Formas compositivas
salvar	vida	salvavidas
saltar	pared	saltaparedes
portar	bebé	portabebés
guardar	brisa	guardabrisa
portar	retrato	portarretratos
matar	suegra	matasuegras

En suma, cabe destacar que las formaciones léxicas de tipo verbo-nombre en español tienen su origen en estructuras oracionales simplificadas, las cuales operan como unidades de microsintaxis. No obstante, además del reconocimiento de su procedencia sintáctica, resulta esencial destacar la paulatina pérdida de autonomía sintáctica que experimentan sus constituyentes: el verbo tiende a perder su valor pleno como acción, mientras que el sustantivo adquiere una interpretación más específica o delimitada. Esta pérdida de independencia gramatical entre los constituyentes favorece su integración, facilitando así el proceso de fusión. Dicho proceso allana el camino hacia la lexicalización, dotando al conjunto resultante de una autonomía morfológica propia.

La progresiva pérdida de autonomía sintáctica en las construcciones compuestas no solo facilita su integración morfológica, sino que también sienta las bases para la activación de otros mecanismos fundamentales en el proceso de lexicalización. En particular, la analogía y el reanálisis emergen como estrategias de reinterpretación y expansión formal, que permiten generar nuevas unidades léxicas a partir de esquemas ya consolidados. Estos mecanismos, lejos de limitarse a un plano estructural, también operan como motores de cambio paradigmático en la organización interna del léxico. Este debilitamiento funcional allana el camino para la intervención de otros

mecanismos estructurales, como la analogía, el reanálisis y la descategorización, que analizaremos a continuación.

4. Analogía, reanálisis y descategorización

Los procesos de analogía y reanálisis desempeñan un papel decisivo en la evolución de los compuestos lexicalizados, ya que permiten reinterpretar estructuras existentes o extender patrones de formación a nuevas configuraciones. Tal como afirma Pérez Vigaray (1994), la formación de compuestos no responde simplemente a una combinación arbitraria de elementos, sino que sigue esquemas productivos que reflejan las regularidades y tendencias del sistema lingüístico. En este apartado, analizaremos cómo estos dos mecanismos interactúan en la construcción de nuevas unidades léxicas, y de qué manera contribuyen a la expansión formal y funcional del léxico en español.

Para Fauconnier (2005), en el contexto de la composición léxica del español, la analogía no implica necesariamente una alteración estructural directa, sino que actúa como mecanismo de extensión o generalización de una regla preexistente que ha sido previamente modificada mediante un proceso de reanálisis. En otras palabras, la analogía puede entenderse como la extensión de un patrón gramatical previamente establecido desde un ámbito limitado hacia una zona más amplia del sistema morfológico, lo que facilita la consolidación de nuevas estructuras formales. Tal como se observa en los compuestos de generalización que se presentan a continuación, el proceso de analogía permite la expansión de nuevos modelos compositivos, lo que a su vez conlleva una reconfiguración en el eje paradigmático del sistema. En algunos casos, esta expansión implica también una abstracción creciente del contenido semántico de los constituyentes, los cuales pueden adquirir significados menos transparentes y más gramaticalizados:

- N+A: manicorto, manirroto, manilargo, manivació,
- V+N: portaplumas, portalibros, portavoz, portalira,

Como se ha señalado de forma reiterada en la investigación lingüística, tanto el reanálisis como la analogía constituyen mecanismos fundamentales y complementarios en los procesos de transformación gramatical. Cifuentes Honrubia (2003: 40) destaca que entre los mecanismos estructurales implicados en la gramaticalización, el reanálisis destaca por su papel central. No obstante, su influencia no se restringe exclusivamente a este fenómeno, sino que también desempeña un papel significativo en otros procesos de mecanismos lingüísticos, tanto en la lexicalización como en la desgramaticalización. En el marco particular de la lexicalización compositiva, el reanálisis opera como una reinterpretación de estructuras preexistentes, en la que se reconfigura su organización interna sin que ello implique necesariamente una modificación de su forma externa. En

consonancia con esta perspectiva, Val Álvaro (1999: 4805) sostiene que determinadas unidades compuestas estructuradas según el esquema [V+V]N —como *bullebulle*, *alzaprima* o *mordihuí* o *picatoste*, — pueden interpretarse como el resultado de un reanálisis efectuado sobre construcciones sintácticas subyacentes. En estos casos, se asume la existencia de una coordinación de dos formas verbales que, una vez reinterpretadas, pasan a conformar una unidad léxica compleja. De manera similar, compuestos de procedencia oracional como *tentempié* ejemplifican un tipo de reanálisis basado en una resegmentación formal: la secuencia verbal *tente en pie* se consolida como una forma lexicalizada, caracterizada por su opacidad semántica y su estabilidad morfológica.

Este patrón también se verifica en palabras, en donde algunos compuestos léxicos han sido resultado de procesos análogos de reanálisis y lexicalización formal. Tal es el caso de *trampantojo* (< *trampa ante ojo*) e *hidalgo* (< *hijo de algo*), en los cuales se constata una reducción fonológica y una opacidad semántica progresiva, que culminan en la constitución de unidades léxicas simples.

Tal como indican Brinton y Traugott (2005), otro mecanismo que desempeña el papel de configuración para la lexicalización en las formaciones compuestas es descategorización. Este proceso consiste en la proyección de la unidireccionalidad a lo largo de un continuo de propiedades estructurales: una unidad lingüística que originalmente pertenece a una categoría gramatical mayor pasa a integrarse en una categoría menor. Paralelamente, en el plano fonológico, dicha unidad experimenta un cambio desde formas que tienden a ser más largas y acentuadas hacia otras más breves y con menor prominencia prosódica. Una manifestación representativa de este proceso en español es el cambio en la forma fónica de los elementos compositivos como *agridulce*, *boquiabierto*, *manirroto*, *hojalata*, *pelirrojo*, *telaraña*, entre otros.

Cabe señalar que, además de estos procesos de cambio gramatical relativamente comunes, es fundamental considerar que tales mecanismos no actúan de forma aislada en la formación compositiva en el español. Como sostienen Brinton y Traugott (2005), en los procedimientos de lexicalización y gramaticalización y de compuestos intervienen múltiples mecanismos interrelacionados de manera espontánea y dinámica. En otras palabras, no siempre es posible trazar límites categóricos precisos entre dichos procesos, ya que en la evolución de los elementos compositivos concurren simultáneamente transformaciones de índole gramatical y semántica, propias tanto de la gramaticalización como de la lexicalización.

Por ejemplo, en la formación del compuesto *teléfono rojo*, intervienen no solo mecanismos de generalización semántica que favorecen la abstracción conceptual, sino también procesos metafóricos y la influencia de préstamos léxicos. En casos como

manilargo y *manicorto*, además de la generalización semántica y el recurso a la metonimia, se observa la aplicación de mecanismos analógicos que promueven la creación de nuevos compuestos con estructuras sintácticas similares.

Todos estos mecanismos, lejos de operar de manera aislada, interactúan también con otros procesos de cambio lingüístico, en particular con la gramaticalización, como se abordará en el próximo apartado.

5. Articulación complementaria entre gramaticalización y lexicalización

A lo largo de lo mencionado anteriormente, se ha examinado cómo ciertos compuestos del español surgen a partir de una interacción compleja entre procesos de debilitamiento sintáctico, fusión formal y mecanismos como la analogía o el reanálisis. No obstante, estos fenómenos no pueden analizarse de forma aislada. Resulta necesario considerar el modo en que la lexicalización, como proceso gradual, convive e incluso se entrelaza con la gramaticalización dentro de una misma dinámica evolutiva.

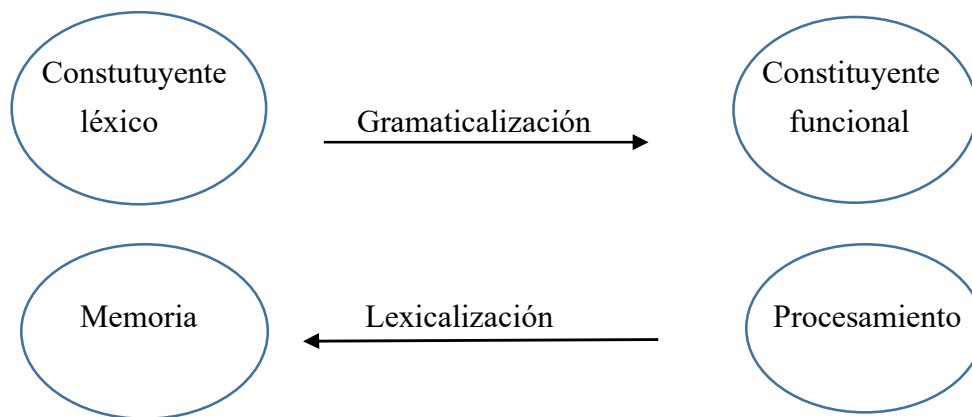
En términos generales, tanto la lexicalización como la gramaticalización participan activamente en la reconfiguración del sistema lingüístico. Aunque sus trayectorias aparenten ser divergentes —una orientada a la formación del léxico, otra a la creación de elementos funcionales—, ambas comparten ciertos efectos estructurales y responden a lógicas de cambio paralelas. En este apartado se exploran las zonas de contacto entre estos dos procesos, prestando especial atención a los casos en que operan de manera complementaria en la formación de compuestos.

Sin embargo, estos fenómenos se distinguen por la orientación divergente de sus trayectorias, dado que intervienen en esferas distintas del sistema lingüístico. De acuerdo con lo expuesto por Contreras (2004: 60), el trayecto de la lexicalización parte del ámbito sintáctico o morfológico y desemboca en el repertorio léxico, mientras que la gramaticalización interviene en segmentos léxicos o a agrupaciones sintagmáticas, los cuales experimentan un vaciamiento progresivo de sus rasgos semánticos y formales hasta adquirir funciones de tipo relacional, pudiendo incluso convertirse en operadores gramaticales.

Varela (2005b: 1133) define la gramaticalización como un mecanismo mediante el cual una unidad formalmente autónoma pasa a desempeñar un rol gramatical, lo que en algunos casos conlleva la pérdida de su independencia estructural y su incorporación en una sola palabra. Por el contrario, la lexicalización se concibe como una reconfiguración de naturaleza léxica, implicando la supresión o transformación de propiedades morfosintácticas. Esta última suele identificarse como una instancia de fijación idiomática, observable principalmente en locuciones cristalizadas, combinaciones congeladas y formaciones morfológicas carentes de motivación semántica.

Desde otra perspectiva, Elvira (2006: 23-25) recurre a la oposición conceptual entre léxico y gramática con el fin de clarificar la relación entre estos dos procesos. El autor argumenta que la delimitación conceptual de la gramaticalización y la lexicalización está condicionada por la interpretación que se atribuya a los conceptos de “léxico” y “gramática”, en función de sus raíces etimológicas. Así, plantea una oposición basada en dos ejes: el plano de las representaciones semánticas y el nivel de procesamiento cognitivo implicado en la articulación lingüística, proponiendo un modelo explicativo que permite distinguir con claridad las dinámicas operativas de cada fenómeno.

Tabla 5: Paralelismos y divergencias entre la lexicalización y la gramaticalización



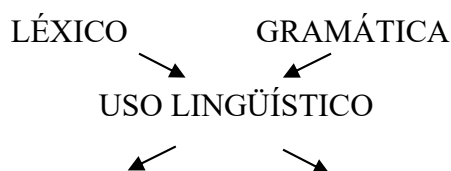
De acuerdo con el modelo propuesto, las nociones de gramaticalización y lexicalización no han de interpretarse como antagónicas, dado que operan en planos teóricos distintos. La gramaticalización se enmarca dentro de un eje semántico y se concibe como el tránsito mediante el cual una unidad con contenido léxico pasa a desempeñar una función de carácter gramatical o estructural. En este sentido, dicho proceso puede describirse como una funcionalización progresiva del significado. En contraste, la lexicalización no se articula en términos semánticos, sino que se inserta en el ámbito de los procedimientos generativos de formulaciones lingüísticas. Este fenómeno alude a una modificación en el método de acceso o formación de una unidad expresiva: lo que antes era producto de una construcción composicional o analítica, pasa a almacenarse como una entrada holística en el léxico mental, y su activación no requiere análisis estructural previo.

Lejos de constituir procesos excluyentes, gramaticalización y lexicalización se presentan como mecanismos interdependientes dentro de la dinámica evolutiva de las lenguas. Como apunta Moreno Cabrera (1998: 224), la transformación lingüística no es unidireccional, sino que admite trayectorias múltiples, lo cual implica que ambos

procesos participan activamente en la reconfiguración del sistema, interactuando de forma complementaria. Así, la lexicalización puede considerarse como un correlato funcional de la gramaticalización, compartiendo con esta última ciertos rasgos formales y funcionales propios del cambio lingüístico.

Wischer (2000: 364) respalda igualmente esta perspectiva, al sostener que lexicalización y gramaticalización constituyen procesos paralelos que inciden en el mismo eje de transformación, aunque lo hagan desde niveles estructurales distintos. Tal como afirma el autor, “se evidencia que la gramaticalización y la lexicalización no deben considerarse mecanismos contradictorios. Comparten ciertas afinidades, pero se desarrollan en planos diferentes del sistema lingüístico”. El siguiente gráfico ilustra la correspondencia funcional entre ambos procesos, así como su aplicación en distintos estratos de la organización del lenguaje.

Tabla 6: Relaciones paralelas entre gramaticalización y lexicalización⁴



Lexicalización	Gramaticalización
- un sintagma incrementa su nivel más léxico (<i>nomeolvides</i>)	- un sintagma intensifica su dependencia gramatical (<i>ir a + infinitivo ‘futuro’</i>)
	- una unidad léxica avanza en una unidad gramatical (<i>haber</i> como auxiliar)
- un lexema adquiere mayor autonomía léxica (<i>esposos</i>)	- un segmento gramatical incrementa su nivel gramatical (formación del futuro romance: <i>decir lo hé > lo diré</i>)

Desde una perspectiva formal, puede observarse que la lexicalización y la gramaticalización comparten ciertos efectos estructurales convergentes, particularmente en lo que respecta a la erosión de la materia fónica y a la coalescencia de unidades lingüísticas previamente segmentables. En efecto, ambos procesos generan transformaciones que implican una reducción fonológica y una integración progresiva de componentes, lo que contribuye a su opacificación estructural. En este sentido, Wischer (2000: 365) subraya esta disertación: Tanto la gramaticalización como la lexicalización se desarrollan en paralelo a una serie de procedimientos estructurales y fonológicos análogos, entre los que destacan la atenuación progresiva del material

⁴ Tablas 6 proceden del trabajo de Liu (2013: 271).

fónico, los procesos de reanálisis a nivel sintáctico, la pérdida de motivación composicional, la fijación de formas en estado fosilizado y la consolidación de patrones a través de la convencionalización.

De acuerdo con lo ya mencionado con anterioridad, la lexicalización y la gramaticalización la constituyen procesos que operan en ámbitos interrelacionados, aunque se desarrollan en niveles distintos del sistema lingüístico: podemos asumir que la gramaticalización le corresponde a un mecanismo de creación de unidades gramaticales, mientras que la lexicalización se orienta a la formación de unidades léxicas. Sin embargo, las fronteras entre ambos procesos no siempre resultan nítidas, lo que permite que en muchos casos actúen como procesos complementarios. En este sentido, tal como señala Moreno Cabrera (1998: 223), se manifiesta una clara inclinación y convergencia funcionales entre la gramaticalización y la lexicalización, dado que el primero tiende a complementar al segundo en el marco del cambio lingüístico. Esta perspectiva sugiere que, en el marco de la evolución lingüística, la comprensión de los fenómenos de cambio requiere el análisis conjunto de ambos mecanismos, ya que su interacción es fundamental para explicar el dinamismo de los elementos gramaticales y léxicos.

Esta idea de interrelación ha sido desarrollada por diversos autores, como Lehmann (2002), Buenafuentes (2006), Haas (2007) y Pardo (2023), quienes coinciden en destacar la complementariedad de ambos procesos en distintos niveles de análisis. Brinton y Traugott (2005: 86), en particular, proponen una cadena evolutiva en la que gramaticalización y lexicalización se integran como fases sucesivas dentro de un mismo continuo de cambio.

La interacción entre estos procesos se manifiesta con claridad en la evolución de ciertas formaciones compositivas tanto en español como en chino mandarín. En el caso del español, puede observarse, por ejemplo, cómo determinados formantes cultos atraviesan inicialmente una etapa de gramaticalización —en la que actúan como elementos vinculados a estructuras morfológicas complejas— para posteriormente adquirir autonomía léxica mediante procesos como el acortamiento o la acronimia, convirtiéndose en unidades independientes. Una vez lexicalizados, estos elementos pueden reinsertarse en nuevos procesos compositivos, en los cuales, a menudo, pierden su significado originario. Esta última etapa puede conllevar, como indica Wischer (2011: 364), un nuevo ciclo de gramaticalización que afecta a la estructura completa del compuesto o solo a una de sus partes.

En este sentido, lo que puede denominarse una “segunda generación de compuestos” resulta frecuentemente más productiva que la etapa inicial, debido a que los elementos lexicalizados ya no responden necesariamente a su valor etimológico,

sino que adquieren funciones estructurales más abiertas y gramaticalizadas dentro de nuevas construcciones⁵.

Tabla 7: Dinámica interactiva de la morfología del español.⁶

Gramaticalización		→	Lexicalización		→	Gramaticalización	
Sigdo. grecolatino	Ejemplos		Sigdo. lexicalizado	Ejemplos		Sigdo. lexicalizado	Ejemplos
Foto = 'luz'	fotografía fotoeléctrico fotofobia		Foto = 'fotografía'	fotomatón fotograma fotocopia		Foto = 'fotografía'	fotomatón fotograma fotocopia
Auto = 'por uno mismo'	automóvil autografía autorretrato		Auto = 'automóvil'	autopista autoescuela autovía		Auto = 'automóvil'	autopista autoescuela autovía
Tele = 'lejos'	telepatía televisión telescopio		Tele = 'televisión'	telebasura teletienda telecomedia		Tele = 'televisión'	telebasura teletienda telecomedia
Micro = 'pequeño'	microscopio micrómetro microbio	⇒	Micro = 'microscopio'	microinyector microcirugía microfotografía		Micro = 'microscopio'	microinyector microcirugía microfotografía
Euro = 'Europa, europeo'	euroasiático eurocámara euroescéptico		Euro = 'moneda'	eurozona euromercado eurobono		Euro = 'moneda'	eurozona euromercado eurobono
Eco = 'casa, morada, hábitat'	ecosistema ecología		Eco = 'ecología'	ecotasa ecoturismo ecodesarrollo		Eco = 'ecología'	ecotasa ecoturismo ecodesarrollo

En conclusión, resulta esencial interpretar estas relaciones de contenido como manifestaciones estructurales de los fenómenos de los procesos de naturaleza lexicalizadora o gramaticalizadora, ya que ello permite precisar con mayor claridad el origen de los elementos compositivos y el significado que adquieren en la unidad léxica resultante. Del mismo modo, se observa que, conforme avanzan dichos procesos, estos tienden a orientarse hacia una mayor especificidad o, en otros casos, hacia una creciente abstracción en el plano semántico.

⁵ De acuerdo con García Medall (1988), la forma prefijal auto- ha experimentado fenómenos como la elisión, la conversión en sustantivo y la extensión a distintas categorías gramaticales, lo cual permite considerarlo un constituyente gramaticalizado que facilita procesos de lexicalización o re-lexicalización.

⁶ Tabla recogida desde Liu (2013: 299).

El análisis de los diversos mecanismos implicados en la formación de compuestos evidencia que la lexicalización y la gramaticalización constituyen procesos interrelacionados y no excluyentes entre sí. Su interacción, lejos de responder a una lógica lineal o cerrada, revela una complementariedad estructural que se manifiesta con claridad en el plano morfológico. Desde esta perspectiva, conviene sintetizar los principales hallazgos y reflexionar sobre sus implicaciones teóricas para el estudio de los procesos de cambio lingüístico.

6. Resumen y conclusiones

Con base en el análisis desarrollado de este análisis integral, resulta pertinente sintetizar los hallazgos más relevantes y proponer algunas reflexiones finales, como se expone a continuación. Este trabajo ha explorado la lexicalización de formaciones compuestas en español, atendiendo tanto a sus aspectos formales como funcionales. Lejos de limitarse a una operación mecánica de combinación, la composición léxica revela un proceso de consolidación progresiva en el que intervienen factores fonológicos, sintácticos, semánticos y categoriales. La pérdida de transparencia morfológica, la fijación idiomática y el debilitamiento de la estructura sintáctica emergen como indicadores clave de dicho proceso.

Asimismo, se ha puesto de relieve que la lexicalización no puede entenderse sin considerar su relación con la gramaticalización. Ambas operan en planos distintos, pero sus efectos convergen en muchos casos, especialmente en la formación de compuestos que presentan rasgos de ambos procesos. El análisis ha mostrado que esta articulación no solo es posible, sino productiva, y que permite una lectura más completa del dinamismo morfológico en español.

El presente trabajo se ha centrado en el análisis de los principales formantes que han sido lexicalizados dentro de la morfología del español. En este marco, la lexicalización se entiende como un proceso evolutivo que actúa en dirección opuesta al modelo jerárquico asociado a la gramaticalización, dado que permite la constitución de unidades léxicas a partir de elementos dependientes con significado relacional. Entre los efectos más significativos de este proceso destacan la pérdida de composicionalidad semántica —como lo evidencian términos como *pagaré*, *boletín*, *ventanilla* o *lavabo*— y el incremento de la autonomía e independencia sintagmáticas.

Este estudio ha puesto en evidencia la función clave que desempeña la lexicalización en la génesis de compuestos, concebidos como resultados directos de dicho proceso al trasladarse información desde el nivel morfológico al léxico. A lo largo del análisis se ha podido constatar que las características fundamentales de la composición —considerada aquí una forma particular de lexicalización— se presentan

con notable consistencia en el caso del español. Estas características incluyen la fijación de la estructura sintáctica, la consolidación de un valor referencial único, la fusión de dos elementos léxicos simples en una unidad reconocida por el sistema lexicográfico, así como la imposibilidad de insertar otros elementos o alterar el orden interno de sus componentes.

Del mismo modo, se ha constatado la pertinencia de concebir la lexicalización como un proceso gradual, susceptible de ser descrito en términos de distintos niveles o grados de consolidación léxica. En este sentido, se ha confirmado el carácter idiosincrático de aquellos compuestos altamente lexicalizados. Además, la aplicación de criterios relacionados con los distintos grados de idiomática ha permitido identificar patrones recurrentes en la formación de compuestos lexicalizados en español.

A la luz de los estudios más recientes de Elvira (2020) y Girón Alconchel (2022), cabe concluir que la lexicalización no debe interpretarse como una excepción al principio de unidireccionalidad que rige los procesos gramaticales, sino como un procedimiento legítimo de incorporación léxica que actúa en forma complementaria con la gramaticalización dentro del marco general de la evolución lingüística. En este sentido, se hace evidente que el cambio lingüístico no responde a una trayectoria exclusivamente lineal, sino que se configura como un fenómeno bidireccional, en el que coexisten desplazamientos desde estructuras léxicas hacia funciones gramaticales, así como movimientos inversos desde configuraciones sintácticas hacia unidades del léxico. Esta reciprocidad funcional adquiere especial relevancia en el proceso de formación de compuestos en español, particularmente en aquellos casos en que intervienen elementos compositivos de origen culto, donde la interacción entre lexicalización y gramaticalización se manifiesta de manera especialmente clara y productiva. Así, resulta pertinente señalar que el fenómeno del acortamiento constituye un recurso productivo que se emplea de manera recurrente en la creación de nuevos compuestos, dado que numerosos elementos de origen grecolatino pueden someterse a procesos de lexicalización mediante los cuales adquieren nuevas significaciones. Tal es el caso de formantes como *tele-*, *foto-*, *electro-*, *hidro-*, *auto-*, *-logía*, *-(i)ficar*, *-metro*, *-forme*, entre otros.

Bibliografía

- Bauer, L. (1983), *English Word formation*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Benveniste, E. (1977), *Problemas de lingüística general*, Madrid: Siglo, XXI.
- Blank, A. (2001), *Einführung in die lexikalische Semantik für Romanisten*. Tübingen: Niemeyer.

- Blasco Mateo, E. (2002), “La lexicalización y las colocaciones.”, *Lingüística Española Actual*, XXIV, 35-61.
- Bosque, I. (1982), “Más allá de la lexicalización”, *Boletín de la Real Academia Española*, LVII, 103-158.
- Brinton, L. J. y E. C. Traugott. (2005), *Lexicalization and Language Change*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Buenafuentes, C. (2006), “Estudio evolutivo de la composición culta a partir de procesos de gramaticalización y lexicalización”, en J. Rodríguez Molina y D. M. Sáez de Rivera (coords.), *Diacronía, lengua española y lingüística*. Madrid: Síntesis, 211-224.
- Buenafuentes, C. (2007), *Procesos de gramaticalización y lexicalización en la formación de compuestos en español*, Tesis Doctoral, Universidad Autónoma de Barcelona.
- Bussmann, H. (ed.) (1996), *Routledge Dictionary of Language and Linguistics*, London: Routledge.
- Casado Velarde, M. (1999), “Otros procedimientos morfológicos: acortamientos, formación de siglas y acrónimos”, en I. Bosque y V. Demonte (dirs.). *Gramática descriptiva de la lengua española*. Madrid: Espasa Calpe, 5075-5096.
- Contreras, J. M. y A. Suñer. (2004), “Los procesos de lexicalización”, en E. Pérez Gaztelu, I. Zabala y L. Gràcia (eds.), *Las fronteras de la composición en las lenguas románticas y en vasco*, San Sebastián: Universidad de Deusto, 47-108.
- Chafe, W. L. (1968), “Idiomaticity as an Anomaly in the Chomskyan Paradigm”. *Foundations of Language*, Vol4, (2), 109-127.
- Chenling, L. (2013), *Morfología contrastiva del chino mandarín y el español: formas de gramaticalización y lexicalización*, Tesis Doctoral, Universidad de Valladolid.
- Dong, X.-F. (董秀芳) (2002), 『詞彙化: 漢語雙音詞的衍生和發展』, 成都: 四川民族出版社.
- Elvira, J. (2006), “Aproximación al proceso de lexicalización”, en J. Rodríguez Molina y D. M. Sáez de Rivera (coords.), *Diacronía, lengua española y lingüística*, Madrid: Síntesis, 21-41.
- Elvira, J. (2020), “Lexicalización primero, gramaticalización después. Aproximación a la génesis de cualquiera”, en Martínez Alcalde, M.^a J. et al. (eds.), *El español y*

las lenguas peninsulares en su diacronía: miradas sobre una historia compartida. Estudios dedicados a M.^a Teresa Echenique Elizondo. Tirant Humanidades y Université de Neuchâtel, 153-168.

Fauconnier, G. (2005), “Fusión conceptual y analogía” (trad. Eva Aladro), *revista CIC, Cuadernos de Información y Comunicación*, 10, 151-182.

Fang, Z.-S. (方祖燊) (1985), 〈國語複音詞形成與結構的研究〉, 《師大學報》, 30, 367-384.

Girón Alconchel, J. L. (2022), “Gramaticalización y lexicalización de locuciones conjuntivas y conectores ilativos a partir de cláusulas consecutivas”, en F. J. Herrero Ruiz de Loizaga, M. E. Azofra Sierra y R. González Pérez (coords.), *La configuración histórica del discurso: nuevas perspectivas en los procesos de gramaticalización, lexicalización y pragmatización*, 165-196.

Haas, F. (2007), “The development of English each other: grammaticalization, lexicalization o both?”, *English Language and Linguistics*, 11, 31-50.

Heine, B., U. Claudi y F. Hünnemeyer. (1991), *Grammaticalization: A Conceptual Framework*, Chicago: The University of Chicago Press.

Hopper, P. y E. C. Traugott (1993), *Gramaticalización*, Cambridge: Cambridge University Press.

Lang, M. F. (1992), *Formación de palabras en español* (trad. De Alberto Miranda Poza), Madrid: Cátedra.

Lázaro Mora, F. A. (1986), “Sobre la parasíntesis en español”, *Dicenda*, 5, 221-235.

Lehmann, C. (2002), “New reflections on grammaticalization and lexicalization”, en I Wischer y G. Diewald (eds.) : *New reflections on grammaticalization*, Amsterdam: John Benjamins, 1-18.

Lipka, L. (1992), “Lexicalization and institutionalization in English and German, or: Piefke, Wendehals, Smog, Perestroika, AIDS etc.”, *Zeitschrift für Anglistik und Amerikanistik*, 40, 2, 101-111.

Lliteras, M. (2007), “Lexicalización de adjetivos en locuciones nominales y en nombres compuestos (de luna llena a plenilunio)”, en M. Iliescu, H. Siller-Runggaldier y P. Danler (eds.), *Actes du XXVe Congrès International de Linguistique et de Philologie Romanes*. Innsbruck: De Gruyter, 759-767.

- Moreno Cabrera, J. C. (1998 [1984]), “On the relationships between grammaticalization and lexicalization”, en A. G. Ramat y P. Hopper (eds.), *The Limits of grammaticalization*. Amsterdam: John Benjamins, 211-227.
- Pérez Vigaray, J. M. (1994), *La composición nominal en español*, Tesis doctoral, Universidad de Las Palmas.
- Pardo Lobrer. A. (2023), “Sobre la lexicalización de no llega como forma aproximativa”, *Etudes romanes de Brno*, Vol. 44, N° 2, 249-266.
- Piera, C. y S. Varela Ortega (1999), “Relaciones entre morfología y sintaxis”, en I. Bosque y V. Demonte (dirs.), *Gramática descriptiva de la lengua española*, Madrid: Espasa Calpe, 4367-4422.
- Varela Ortega, S. (2005), “Lexicalización y cambio categorial”, en Luis Santos Río (coord.), *Palabras, norma, discurso: en memoria de Fernando Lázaro Carreter*, Salamanca: Universidad de Salamanca, 1133-1146.
- Wischer, I. (2011), “Grammaticalization and word formation”, en H. Narrog, y B. Heine (eds.), *The Oxford handbook of grammaticalization*, Oxford: Oxford University Press, 356-364.

本論文於 2025 年 5 月 28 日到稿，2025 年 10 月 13 日通過審查。

重繪旅程：論 V. S. 奈波爾《抵達之謎》中的

敘事與徵候¹

吳凱書/Wu, Kai-su

淡江大學英文學系助理教授

Department of English, Tamkang University

【摘要】

《抵達之謎》是奈波爾寫作生涯的轉捩點，其敘事落腳之處從西印度群島經驗、東印度以及伊斯蘭地區的旅遊札記，移轉到他在英格蘭威爾特郡的 10 年鄉村生活記述。作家對英倫觀念的調整與轉變與他對於千里達的看法息息相關。而《抵達之謎》中的千里達，與數十年前被他所拒斥的原鄉相較（尤其在《中間航道》裡），已經轉變成較為複雜的思考對象。在《抵達之謎》一書中，奈波爾的敘事者嘗試調和自身認同的矛盾，並且不自覺地暴露了他的精神徵候。本文將透過對該作品的敘事研究，思索奈波爾筆下英帝國的崩解與不列顛治世的逝去，以及被壓抑在表層敘事之下對於千里達的回歸慾望。藉由詹明信所重新修正其導師路易·阿圖塞的徵候式閱讀，本文挪用詹明信在《政治無意識》中所強調的「敘事作為社會象徵行為」這一命題來揭開文學作品中社會的意識形態壓迫所導致的個人創傷徵候，以期將《抵達之謎》中作家對於英國的觀察扣緊作家之於千里達在此書的邊緣記述。

【關鍵字】

敘事、徵候、英國、千里達、循環

【Abstract】

The Enigma of Arrival marks a shift from Naipaul's narratives on West Indian experiences, his East Indian and Islamic travelogues, to the account of his ten-year life at a

¹ 本文由作者博士論文第二章“Trinidad and England Revisited in V. S. Naipaul's *The Enigma of Arrival*”發展而成，然內容與理論框架均經過大幅度修改。全文改以詹明信《政治無意識》之理論為核心，重探奈波爾小說中的敘事形式如何作為一種處理後殖民歷史矛盾的「社會象徵行為」。

cottage in rural Wiltshire, England. Naipaul's constant adjustment of his perspectives of Pax Britannica and cosmopolitan London is closely linked with his views on Trinidad, which, if compared to its simplistic abject image in the author's narrative (notoriously in *The Middle Passage*) three decades ago, has become an ambivalent entity here. The paper intends to indicate that Naipaul's narrator in *The Enigma of Arrival* falls trapped in his narratorial gesture to reconcile his identity complications, which leaves traces of marginal remarks on his affective connection with his birthplace. To delve deep into the latent part of the narrative in the book so as to unmask the narrator's suppressed desire to return spiritually to Trinidad under his own manifest grand narrative of England, the paper borrows Fredric Jameson's symptomatic reading in which its credit lies in its potentiality to analyze the subtext with the concepts of what Jameson calls "the political unconscious" and "narrative as a socially symbolic act." To analyze Naipaul's narratology with symptomatology actually means to reveal the political aspects of his personal narrative, and thereby shows the cultural repressions and traumatic symptoms in his artistic performance.

【Keywords】

Narrative, symptom, England, Trinidad, circle

1. 前言

只有察覺那持續不斷的敘事之軌跡，並將在根本性的歷史中被壓抑與深埋的現實還原到文本表層，政治無意識教誨的功能與必要性才能被尋得。

《政治無意識》²

在詹明信的理論視域中，文學敘事從不只是現實的鏡像，而是一種積極的「社會象徵行為」，其功能在於為真實世界中無法化解的歷史矛盾，提供一帖想像性的解決方案。V. S. 奈波爾的作品，尤其是他那部充滿自傳色彩的《抵達之謎》，便為此一理論提供了絕佳的試驗場域。本文主張，奈波爾這部小說以其對英國鄉村衰敗的執著描繪，以及那循環往復、充滿憂鬱質地的敘事結構，本身即構成了一種複雜的意識形態策略。此策略的核心任務，在於「管理」後殖民流亡者的內在創傷，並試圖調和那同時朝向一個已然失落的帝國英國，與一個已被拒斥的千里達根源的雙重慾望——一個在現實中註定無法被滿足的慾望。本研究將運用詹明信式的徵候式閱讀，剖析小說的敘事形式如何成為圍堵此一歷史創傷的美學容

² 原文: "It is in detecting the traces of that uninterrupted narrative, in restoring to the surface of the text the repressed and buried reality of this fundamental history, that the doctrine of a political unconscious finds its function and its necessity" (20)。考量到中、英文語意之間的差異，本文斟酌附註英文原文。文中《政治無意識》(*The Political Unconscious*, 1981) 引文部份由筆者自行翻譯。

器，並揭示被壓抑的殖民地記憶如何以「徵候」的形式，不斷回返並擾動文本的表層。因此，儘管奈波爾本人強調書中的敘事者「全然就是我自己」(Gussow 1987:16)，甚至希望能「讓書中那位作者成為我自身」(Niven 1997:163)，本研究的焦點並非其自傳的真實性考據，而是旨在探問：此一在文本中被建構出的「自我」，其敘事本身如何執行了特定的意識形態功能。³

在《抵達之謎》中，作家心景 (mindscape) 的發展，是伴隨著對英國地景 (landscape) 的細膩描繪而展開的。本文的核心論點在於，小說關於身分認同的表層敘事，實則潛藏著奈波爾處理其早期 (六、七零年代) 對第三世界——特別是其原鄉千里達——的尖銳批判所引發的內在矛盾。即便關於千里達的記憶在書中僅以碎片化的形式出現，它們在文本中所佔據的位置，卻如同精神分析意義上的徵候，是潛意識內容的瞬間洩漏。奈波爾所探討的「抵達」之謎，其面向的終點除了可以是地理上的英國，更是一次在意識形態壓抑下，朝向千里達的精神性回歸。為了精準定位此一轉變，我們必須借重一種能夠揭示文本深層意識形態運作的分析方法。路易·阿圖塞 (Louis Althusser) 的「徵候式閱讀」提供了一個起點，它教導我們去關注文本的「沉默」、「空白」與「無意識」，以追溯那塑造了文本卻又無法被直接言說的「缺席原因」。然而，若僅止於此，我們的分析將會錯失文學最核心的生產性力量。

正是在此，詹明信的理論展現了推進這種力量的潛能。他認為，文學敘事不僅是被動地「顯露」意識形態壓抑的創傷，它本身就是一種積極的、用以解決創傷的「社會象徵行為」。在詹明信的框架中，「歷史」本身被類比為拉岡 (Jacques Lacan) 的「真實界」(the Real)：一個充滿創傷、無法被既有符號系統所完全捕捉的領域。正因為真實的歷史矛盾過於創傷而無法被直接面對，文化文本 (如小說) 便透過其形式與結構，創造出一個想像性的場域，使這些矛盾在美學的層次上看似得到了調和或解決。因此，詹明信的分析重心，便從阿圖塞式的追尋「缺席」，轉向了對文本「在場」——亦即文本形式本身——的細緻分析。這意味著，我們的詮釋對象，不應僅是奈波爾對千里達的邊緣化處理，而更應該是那主導了整部作品的、關於英國鄉村衰敗的、循環往復的敘事形式。正是這種看似與政治無關的美學形式，構成了奈波爾用以應對其後殖民歷史僵局的「社會象徵行為」。

本研究挪用詹明信的方法，旨在達成一種「超越式讀法」(to read beyond)，其目的並非如皮埃爾·馬歇雷 (Pierre Macherey) 對儒勒·凡爾納 (Jules Verne) 的分析那樣，僅僅是為了在文本內容中尋找階級鬥爭的直接對應物。⁴ 相反地，

³ 除了本文討論的《抵達之謎》(The Enigma of Arrival, 1987) 之外，奈波爾的「自傳式小說」還包括《米格爾大街》(Miguel Street, 1959)、《畢思沃斯先生的房子》(A House for Mr. Biswas, 1961) 與《世存之道》(A Way in the World, 1994)。後三本作品分別記述主角在千里達西班牙港 (Port of Spain, Trinidad) 的成長歷程、父親渴求擁有自己房子的落空與兒子對於乃父作家之夢的繼承、以及透過對大人物 (書中的 Lebrun 一般被認為是千里達的馬克思主義者詹姆斯 [C. L. R. James]) 或如《米格爾大街》的小角色的描述來建構各個時期的自我。

⁴ 在《世存之道》中，奈波爾透露出對於馬克思主義者詹姆斯 (參見註 2) 1938 年專著《黑色雅各賓》(The Black Jacobins: Toussaint L'Ouverture and the San Domingo Revolution) 的不認同，質疑詹姆斯所謂的加勒比海島國的革命天性。奈波爾認為將該地區的革命運動與法國大革命相連結

我們關注的是，當讀者在跟隨奈波爾的思維變異時，如何可能產生「誤認」(misrecognition)，並進而透過對這種閱讀經驗的分析，挖掘出那些造成「知識型斷裂」(epistemological disjuncture)的隱藏文本元素。換言之，《抵達之謎》的故事「內容」與傳統馬克思主義的革命主題並無直接關聯；真正驅動其政治潛能的，是其敘事「形式」⁵所開啟的辯證性閱讀空間。因此，本文將透過對奈波爾觀察周遭人、事、物的獨特敘事手法的分析，深入探討對《抵達之謎》進行徵候式閱讀的可能性，並藉由小說的核心主題——死亡與朽敗——來描繪出奈波爾在後帝國世界中獨特的「看與感的方式」。⁶

2. 「敘事作為社會象徵行為」

《抵達之謎》標誌著奈波爾創作軌跡的一次關鍵轉向，其敘事場景從早年對西印度群島、東印度及伊斯蘭世界的描摹，毅然轉向他在英格蘭威爾特郡長達十年的鄉村生活。除了六零年代的《史東先生與騎士們》(1963)與《仿擬者》(1967)，奈波爾幾乎再無任何作品如此直接地處理作家本人與英國生活及歐洲文化的深層糾葛。這部作品的重要性，更在於它構成了一次全面的作家生涯自我評定，其回顧內容涵蓋了從千里達到英國的自我放逐、寫作題材的掙扎、出版生涯的挫敗，⁷乃至於他對周遭人事物變遷進行細微觀察的刻意自我訓練。在眾多反思中，最後一項佔據了小說絕大部分篇幅，因為敘事者正試圖縫合那道「作家與人分裂」(Naipaul 2002:160)的鴻溝。⁸正如奈波爾在書中反覆指出的，這道分裂自他離開故土的那一刻便已然發生，並深刻形塑了他對改變、崩毀與死亡的感知。因此，即便《抵達之謎》是一部結構強韌的冥想式敘事，其行文時而旋繞、重複，甚至充滿細瑣的個人執念，這部作品依然為我們提供了一個絕佳的切入點，去探討其表層敘事之下，由政治無意識所構成的文本裂隙。

若將《抵達之謎》視為《畢思沃斯先生的房子》的精神續作，其理由不僅在於故事時間的延續，更在於兩部作品皆以極度個人化的敘事形式展開，刻意迴避了奈波爾一向所批判的、充斥於後殖民革命文學中的樣板式反帝政治話語。⁹從表面上看，奈波爾對歷史的處理似乎在此被簡化為對個人「他的-歷史」(his-stories)的沉思，這使他看似站在了詹明信的對立面。畢竟，作為馬克思主

是有疑慮的一種作法。

⁵ 本文第 4 部份討論的「循環敘事」為此種形式的一例。

⁶ 在此借用奈波爾 2007 年散文作品《作家看人》(*A Writer's People: Ways of Looking and Feeling*)的副標題。這本評論集裡「看與感的方式」主要是指沃爾特·柯特(Derek Walcott)、福樓拜(Gustave Flaubert)、包威爾(Anthony Powell)、甘地(Gandhi)、尼赫魯(Nehru)等人觀看世界的方式，而奈波爾對此有諸多批評。

⁷ 在這裡奈波爾暗指的是一本最終在 1969 年出版的歷史小說《失落的黃金國》(*The Loss of El Dorado*)。書寫這本小說的過程十分艱辛，加上與出版商之間的誤解，使得奈波爾飽受精神壓力之苦，多少影響了作家往後的身心狀態。即便作品最後發表了，奈波爾始終覺得這本小說不盡理想，因而在《世存之道》中對於沃爾特·雷利爵士(Sir Walter Raleigh)尋找黃金之國的這段逸事進行了大幅的重寫。

⁸ 文中《抵達之謎》的引文由筆者翻譯。

⁹ 參見註 4 與註 16。

義者的詹明信在《政治無意識》開篇便確立了其核心方法論：「永遠歷史化」（“Always historicize”；Jameson 1981:9）。然而，這種表面的矛盾，正是詹明信理論的用武之地。詹明信認為，真正的政治維度從不輕易在文本中直接顯現，這也正是文學與文化文本分析的必要性所在。值得注意的是，詹明信的詮釋路徑與狄爾泰、伽達默爾、里柯等人的傳統詮釋學有著本質區別。他獨創性地將拉岡學派的精神分析、李維·斯特勞斯與阿圖塞的結構主義，熔鑄於馬克思主義的框架之內。其核心方法，便是透過研究敘事的功能，來揭示文學藝術品中被意識形態所壓抑的創傷與徵候。以小說為例，敘事不僅是故事的載體，更能充當現實世界中社會政治情勢的索引。詹明信在《政治無意識》的副標題與內文中反覆申明，本書最重要的論點即為「敘事作為社會象徵行為」。在他看來，拉岡的象徵界之所以關鍵，在於它是通往「真實界」的唯一媒介，而詹明信正是將「真實界」類比為他自身的歷史概念：

歷史——阿圖塞「缺場的原因」、拉岡的「真實」——並不是文本，因為從本質上看來它是非敘事的、非再現性的；然而，還必須加上一個條件，即歷史除非以文本的形式出現，否則無法接近我們，換言之，只有通過先行的（再）文本化我們才能接近歷史。¹⁰（1981:82；原文著重）

歷史本身超越了個體的直接經驗，因此它存在於敘事所無法抵達的彼岸。但弔詭之處在於，若想理解歷史，卻又完全無法繞開文化或文學文本這些中介。這意味著，唯有透過文本與敘事的介入，我們才可能一窺歷史的殿堂。詹明信的論述看似陷入了他本人所批判的後結構主義式的非政治辯證迴圈與困窘（*aporia*），然而，他對精神分析的改造¹¹以及「敘事作為社會象徵行為」的核心論點，清晰地表明其最終目標始終在於如何從文本中解讀出其社會性：「本書將論證對文學文本進行政治性詮釋的優先權」（1981:17）。¹²

在拉岡的精神分析理論中，無意識的形成始於象徵界，這也正是個體習得語言的階段。在此時期，主體學會了區分自我與他者，從而導致了想像界中那種原初統一性的崩解。詹明信進一步闡發，作為象徵界主要仲裁者的敘事，其功能不僅是打破一個想像的整體，更是在「潛文本」（*subtext*）的層次上，被策略性地用來「社會化」那個不可觸及的真實界。或者，如亞當·羅伯斯（Adam Roberts）所言：「對詹明信而言，敘事是一種關鍵的中介模式，它調解著個人與社會、以

¹⁰ 原文如下：“That history—Althusser’s “absent cause,” Lacan’s “Real”—is *not* a text, for it is fundamentally non-narrative and nonrepresentational; what can be added, however, is the proviso that history is inaccessible to us except in textual form, or in other words, that it can be approached only by way of prior (re)textualization.”

¹¹ 羅柏·史考勒思（Robert Scholes）形容詹明信的理論為「一種解構的馬克思主義，且經常是尼采式的馬克思主義」（1983:173），因為他超越了庸俗馬克思主義（*vulgar Marxism*）所為人詬病的二元對立。早在1972年出版的《語言的牢籠》（*The Prison-House of Language*），詹明信就曾援用諸如德希達等後結構主義者關於語言的辯論來理解馬克思主義。

¹² 原文：“This book will argue the priority of the political interpretation of literary texts.”

及顯在的社會碎裂與潛藏其下的真實總體性之間的關係」(2000:81)。語言的習得帶來了主體的分裂，而欲望也正是在此一分裂中被生產出來。在傳統精神分析層面，欲望被視為個人的。但對詹明信而言，深埋於潛意識中的欲望，以及潛意識中對那些不可言說之物的壓抑機制，其本身就是一種政治行為，並頻繁地體現在文學文本之中。詹明信使用「潛文本」一詞，以區別於那些被直接書寫下來的文字。他將「潛文本」視為一個意識形態建構下的實體，一個介於純粹文本與歷史/真實界之間的概念。詹明信運用此詞彙時，常以其主動性與顛覆性，來對比庸俗馬克思主義那種認為任何文本皆被動臣服於特定「語境」(context)的僵化觀念。後者完全忽略了語言自身的能動性，即「潛文本」具有將「語境」主動包覆進來的能力。詹明信所推崇的文學詮釋，是將文本視為「對一先行存在的歷史與意識形態潛文本的重寫或重構。不言而喻，『潛文本』並非直接呈現，它不是一般意義上的外部現實，甚至不是歷史手稿中的傳統敘事，它本身必須總是在事後被(重)構出來」(1981:81; 原文著重)。換言之，詹明信所真正關切的文本，正是此一「潛文本」。

在 1979 年與伊莉莎白·哈瑞克的一場訪談中，奈波爾曾將庫司特勒的名言「人們能夠增加他們的知識，卻無法減去」詮釋為「人們無法捨棄他們已學到的一切」(1997:46)。¹³ 而在麥可·高拉(Michael Edward Gorra)的專著《帝國之後》中，他引用格雷厄姆·格林關於作家任務的定義¹⁴來評論奈波爾，其論斷極為精準：「帝國的原罪內隱於他所有的書寫之中，但對他而言，此原罪的『傷口』……已深到憤怒與復仇都無濟於事的程度。他的分析是徵候性而非因果性的」(1997:71; 筆者著重)。¹⁵ 這兩則文字恰好為我們的分析提供了入口。它指明，《抵達之謎》中的「政治介入」並非顯現於文本的表層，亦無法將之移除，而是潛藏於深處；正是透過奈波爾的敘事者那看似純屬個人的、旨在調和自身認同矛盾的努力，文本深層的徵候才得以經由闡釋而慢慢浮現。

3. 回歸千里達

麥可·高拉所指出的「徵候式」特質，精準地捕捉了奈波爾作品中那道貫穿始終的裂隙：他與千里達根源，和他所選擇的英國認同之間，那永不平息的緊張關係。事實上，圍繞奈波爾的激烈學術辯論本身，就是其文本「深層徵候」的外部投射。這些辯論的核心，往往聚焦於忠誠與背叛、歸屬與流放的二元對立，詰問他對英國的擁抱，是否構成了對其加勒比海過往的背棄。

在此論爭光譜的一端，是以希文·克喬伊(Selwyn R. Cudjoe)為代表的嚴厲

¹³ 兩句原文為“Men can add to their knowledge, but they cannot subtract”與“Men cannot unlearn what they have learned.”

¹⁴ 「就一個我們所共享的偉大公眾世界而言」，一個作家的任務應是「闡明他私人的世界」(a writer's task is to “illustrate his world in terms of the great public world we all share [Greene 1970:83])。

¹⁵ 原文為：“The original sin of empire is implicit in everything he writes, but for him its ‘wound,’ in Mr. Biswas’s words, remains ‘too deep for anger or thoughts of retribution’ [Naipaul 1969:483], and his analysis is *symptomatic*, not causal.”

批判，他指控奈波爾的作品「毋庸置疑地沈浸於當代占據主導地位的帝國主義意識型態以及種族主義成見」(Cudjoe 1988:224)。然而，如盧希安·駱荷 (Lucienne Loh) 等晚近的評論家則試圖超越這種道德批判，轉而探究奈波爾「懷英情緒」(English nostalgia) 下那必然產生的混雜與矛盾情感 (2010:102)。¹⁶ 駱荷巧妙地挪用「柴契爾主義」作為分析框架，指出其意識形態本身即為一悖論：它一方面頌揚保守的、傳統的、光榮的昔日英國；另一方面，為了經濟發展，又不得不容忍移民所帶來的種族與階級差異。駱荷認為，奈波爾的困境與此高度同構：他既渴望認同那由「白種愛德華時代和維多利亞時代帝國的成功」¹⁷ 所彰顯的英國性，又深知自己作為一名異族外來者的永恆他者身份。

與此同時，約翰·蘇 (John J. Su) 則從倫理學的角度，肯定了《抵達之謎》中潛藏的后殖民抵抗性。他哀嘆「大多數關於奈波爾的學術研究不把這本小說當作對於帝國主義的批評」(2005:72)，並指出，文本中瀟灑的「後帝國憂鬱」，雖然牽涉對英國性的懷舊，但這種懷舊拒絕定義「未來目標之中的國家認同」(2005:72)，從而對僵化的身份政治構成了一種倫理上的挑戰。然而，不論是駱荷對曖昧性的強調，或是蘇對懷舊倫理的發掘，其分析的重心仍較少觸及奈波爾如何具體處理那被邊緣化的千里達記憶。

從詹明信的視角來看，這些看似對立的批評路徑——克喬伊的意識形態批判、駱荷的歷史矛盾分析、蘇的懷舊倫理探討——並非相互排斥，而是共同描繪出了《抵達之謎》這部小說所要「想像性地解決」¹⁸ 的那個核心歷史矛盾的輪廓。¹⁹ 這個矛盾，正是英國社會學家保羅·吉爾羅伊 (Paul Gilroy) 在其著作中所診斷的「後殖民憂鬱」(postcolonial melancholia)。吉爾羅伊認為，昔日帝國在失去其殖民地之後，陷入了一種無法哀悼其失落、也無法真正面對其多種族現狀的憂鬱狀

¹⁶ 對於奈波爾批評第三世界頗有微詞的另一位後殖民學者為愛德華·薩伊德 (Edward Said)。在《文化與帝國主義》(Culture & Imperialism, 1993) 討論康拉德 (Joseph Conrad) 《黑暗之心》(Heart of Darkness, 1899) 的部份，薩伊德一開始先討論亞非的現狀。他認為這些前殖民地地區的大部份國家在政治上已經獨立，不過在許多層面依舊被歐洲國家所統治。薩伊德並不否認某些被殖民國曾「自取其害」(“self-inflicted wounds”)，且相信探究雙方複雜的殖民網絡關係的必要性。但薩伊德還是在這裡挖苦了奈波爾一番：「奈波爾這樣的批評家常說，他們(任何人都知道「他們」指的是有色人種、外國佬、黑鬼)咎由自取，且他認為一直談帝國主義的後遺症是無濟於事的」(19；原文著重)。但須注意的是，薩伊德並不一味否定奈波爾。在討論奈波爾的小說時，薩伊德讚揚前者描述流亡知識份子的功力，稱其擁有「卓越小說家的感知觸角」(“extraordinary antennae as a novelist”; 1996:49)。

¹⁷ 駱的原文為：“white Edwardian and Victorian imperial success memorialized by the privileged lifestyle and material extravagance of landed wealth and leisure” (2010:108)。

¹⁸ 奈波爾在抒發對於逝去大英帝國的惆悵時喜愛用「想像」(fantasy) 這個字詞，舉例：“So I grew to feel that the grandeur belonged to the past; that I had come to England at the wrong time; that I had come too late to find the England, the heart of empire, which (like a provincial, from a far corner of the empire) I had created in my fantasy” (2002: 141)；以及 “almost everything I read about history and other societies had an abstract quality. I could relate it only to what I knew: every kind of reading committed me to fantasy” (156)。

¹⁹ 在論述邏輯上，詹明信認為被各類意識形態覆蓋的當代人已經無法明辨意識形態的真偽，無論是種族主義、納粹大屠殺或階級主義歧視所制定的虛假/錯誤意識(白人至上、雅利安血統純正、富貴窮賤)。唯一的方式即找到一種最為超脫、相對能看清意識形態的闡述方法，而詹明信始終相信這方法即為擁有總體視域的馬克思主義。

態。奈波爾的文本，正是此一集體憂鬱在個人心靈上的最深刻體現。他的敘事，既是這種憂鬱的產物，也是一種試圖「治癒」或「管理」這種憂鬱的複雜策略。因此，要理解小說的敘事形式如何成為處理此一矛盾的「社會象徵行為」，我們必須首先深入檢視此一歷史性的僵局，如何在敘事者的個人經驗與身體上，銘刻下其創傷的痕跡。文本或多或少會牽扯進意識形態思想，而此時要達到一個如真實界般的歷史無異於緣木求魚。易言之，一個受限於時間與空間的文本無法超越意識形態的牽絆。對詹明信來說，意識形態說明了一個純粹歷史的喪失。想當然爾，沒有人，包括詹明信自己，能夠證明一個具有烏托邦概念的歷史存在，但他認為這歷史已先驗地存在在某處（be there in the sense of *a priori*），作為任何文本中的敘事可以明確指涉的目標。詹明信的理論並非將文學藝術等置於政治或歷史之下，也非高舉後結構多元文本融合的旗幟。政治無意識的概念所做的是尋找文學文本（text）以及社會政治文本（context）交流後所留下的任何軌跡，且試圖尋著軌跡找出一個能彰顯「作為社會象徵行為的文化產物」（“cultural artifacts as socially symbolic acts”；Jameson, 1981:20）。

即使駱荷指出了《抵達之謎》所生產的曖昧性與複雜性閱讀，對於奈波爾如何看待千里達並未處理。與駱荷將《抵達之謎》看作是「一種默示的後殖民抵抗形式」（2010:108）不同，約翰·蘇（John J. Su）在他關於懷舊之於晚期現代性的重要角色研究專書中，對於《抵達之謎》的革命後殖民性持肯定的態度。他哀嘆「大多數關於奈波爾的學術研究不把這本小說當作對於帝國主義的批評」（2005:72）。蘇氏認為伊恩·包肯（Ian Baucom）的「後帝國憂鬱」²⁰ 必定牽扯對英國性的懷舊情緒，這甚至可追溯到約翰·拉斯金（John Ruskin）與湯瑪斯·卡萊爾（Thomas Carlyle）的傳統。與此同時，這樣的懷舊之感拒絕定義「未來目標之中的國家認同」（2005:72）。在這方面，蘇氏指出了對於懷舊的過度重視所帶來的認識論上之問題。而這個由後帝國意識形態所生產的認識論使得原先應是自由流動的身份認同變得僵化，並對於 50 年代開始的重大移英運動所開展的新認同模式關上了大門。蘇氏認為奈波爾在書中必定也發現了意識形態的問題性，進而評判過去心傾的英國。

從詹明信的視角來看，克喬伊所見的「帝國主義意識形態」，是詹明信所說的意識形態的「圍堵」功能；而蘇氏所見的「懷舊倫理」，則可被視為文本中潛藏的「烏托邦衝動」，一種對和解與歸屬的渴望。駱荷的分析則精準地捕捉了這個矛盾的具體歷史形態。而《抵達之謎》的敘事形式，正是這個矛盾得以共存的場域。這個由帝國主義意識形態與懷舊倫理所構成的核心矛盾，除了可視為是一個理論上的辯證結構，它更深刻地滲透到文本的情感肌理與敘事者的個人經驗之中。事實上，這種歷史性的僵局在個人層面上的體現，正是以一種心理「徵候」的形式浮現，而奈波爾的敘事者正是在調和自身認同矛盾的過程中，不自覺地暴

²⁰ 「後帝國憂鬱」（“Postimperial Melancholia”）為包肯重要著作《不適之地》（*Out of Place: Englishness, Empire and the Location of Identity*, 1999）的章節名稱，書中亦有對《抵達之謎》的討論。

露了這些精神徵候。因此，要理解敘事形式如何「管理」此一矛盾，我們必須先檢視這些矛盾如何在敘事者身上留下痕跡，特別是他那反覆出現的、關於疾病、耗竭與精神崩潰的自我描述。這些個人的憂鬱與病理感受，正是「政治無意識」在文本中最直接的表徵。

奈波爾的敘事者，其精神與身體的耗竭狀態，構成了「政治無意識」在文本中最直接的表徵。在〈旅程〉一章中，敘事者談及自身的「智識疲倦」(“intellectual fatigue”；Naipaul, 2002:108)，並將自己描繪為一個不斷復發的病人(a patient with relapses)。²¹ 這種對個人病理的細緻描寫，不應被僅僅視為自傳式的自白，而應被解讀為巨大的、不可見的歷史力量在個體身上的直接銘刻。奈波爾在現實中被診斷出的「戰爭疲乏」(“Battle fatigue”)，在文本中被轉化為一種如夢似醒的「夢境敘事」(“dream narrative”；108)。這並非傳統意義上的戰爭創傷，而是一種源於存在性錯位的創傷：一個來自殖民邊陲的主體，其畢生嚮往的帝國中心，在他抵達之時卻已然衰敗；一個自我放逐的離鄉者，回望故土時，卻發現記憶中的家園已面目全非。這種個人層面的精神崩潰與病理感受，正是詹明信所指出的，當個體經驗與龐大的、無法被個人所「認知繪圖」(cognitively map)的全球系統(在此即為帝國解體與全球化移民的歷史進程)產生斷裂時，所浮現的典型「徵候」。因此，敘事者對於朽敗與遞變(mutability)的接受與拒斥，不僅是個人心境的擺盪，更是其身體作為歷史的感受器，對一個「持續更迭的世界」(Naipaul 2002:23)所做出的創傷性反應。

面對這種創傷性的歷史斷裂，奈波爾的敘事採取了一種深刻的意識形態「圍堵」(containment)策略：即將混亂的後帝國現實，轉化為一種可供審美的、關於英國田園景緻衰亡的敘事。敘事者對英國地景的迷戀，以及他從查爾斯·蘭姆、夏洛克·福爾摩斯與查爾斯·狄更斯學到的那個「宏偉倫敦」，正是這種圍堵策略的體現。他坦承：「是狄更斯及他的插畫家給了我理解這個城市的幻想。我當時……仍舊深信狄更斯所描述的倫敦的事實而不自知」(Naipaul 2002:144-45)。這種對文學想像的執著，是一種試圖在美學層面上，為失落的帝國中心建構一個穩定、可辨識符號系統的努力，一個用以抵禦外部歷史變遷的避風港。

然而，此一圍堵策略註定是脆弱且不穩定的，因為歷史的現實不斷侵入這個美學的庇護所。園丁傑克的存在，便是對此策略的第一次衝擊。敘事者最初將傑克視為「舊農民時代的剩餘」(Naipaul 2002:17)，試圖將他納入那個田園詩般的、正在逝去的英國想像之中。但這種想像很快便被現實所戳破。敘事者隨後體悟到：「我先前對於傑克的看法錯了，他並非是(過去的)殘餘；他創造了自己的生活、自己的世界、幾乎自己的一片大陸」(Naipaul 2002:99)。此處的「誤認」修正，標示著圍堵的失敗。傑克並非歷史的殘餘，而是一個與敘事者一樣的現代主體，他的存在戳破了那個被美學化的田園幻象。作家最終瞭解傑克其實與他相仿，他們都只來得及見到帝國落日西沉的餘暉。這個體悟，正是詹明信所謂

²¹ 稍後在有關菲利普斯太太(Mrs. Phillips)談論皮頓(Pitton)的段落(Naipaul: 2002:299)也出現了奈波爾成為病人的形象。

的，當個人經驗的「真實性」與歷史結構的「真理性」發生矛盾時，現代主義藝術所面臨的核心困境。

如果說對英國地景的描寫是一種意識形態圍堵，那麼文本中那些關於千里達的零星、突兀的記憶與言論，則構成了「政治無意識」的回歸。這些段落的功能，正是詹明信意義上的徵候，是文本壓抑機制下所洩漏出的裂隙。例如，敘事者那段關於「世界各地的野蠻人」將湧入倫敦的著名論述 (Naipaul 2002:154)，不應脫離其上下文。在發表這段看似貶損第三世界的言論之後，敘事者立刻轉向反思自己 18 歲時的文學挫敗，以及如何忽視了家鄉的故事。這段並置本身就是一個強烈的徵候。關於「野蠻人」的焦慮爆發，正是被壓抑的「他者」（包括他自身的殖民地出身）以一種扭曲、投射的形式回返，擾亂了敘事者對純淨英國傳統的幻想。而緊隨其後的自我反思，則是這種擾動所引發的無意識自白，或可稱之一種「用語錯置」(dislocation of the locution) 的現象。從霍米·巴巴 (Homi K. Bhabha) 的理論來看，這正是「無家感」(unhomely) 的體現：在帝國的家中，殖民地的鬼影卻不斷回返，使得家變得不再像家。

同樣，敘事者承認自己早年寫作「歪曲事情」(Naipaul 2002:314)，並感嘆其「殖民渺小性無法與我宏偉的志向相伴」(Naipaul 2002:99)，在徵候式閱讀下，這些都成為文本自身的元評論。它們是敘事壓抑機制的一次無意識的自我揭露。當敘事者談及他能「輕易地將自己投身於西班牙港兩百多年前的街道上」(Naipaul 2002:170)，²² 並最終承認「不管在心靈上或是形體上，正是從我小小的殖民地島嶼我出發了」(Naipaul 2002:167)，這標示著被壓抑的歷史記憶正不斷地爭取其話語權。正如史藤·普茲·默思朗 (Sten Pultz Moslund) 所評論的，這部小說正「以一種不同，或也許是更錯綜複雜的方式來處理後殖民性、移民及混雜」(Moslund 2010:174)。這些徵候的浮現，非簡單的「回歸千里達」得以概括，而是在一個新的理論框架下，揭示了奈波爾的離散認同。奈波爾此趟旅程亦非對一個固定根源的找尋，而是一個如斯圖亞特·霍爾 (Stuart Hall) 所言，在「根源」(roots) 與「路線」(routes) 之間不斷被生產、永遠處於過程中的「成為」(becoming)。霍爾認為，文化認同「並非一個已經完成的事實……而是一個『生產』的過程，它永遠不會完整，總是在過程中，並且總是在再現的內部，而非外部被建構的」(Hall 1990:222)。奈波爾筆下那看似矛盾、充滿悔恨與修正的回返敘事，正是這種永無止境的離散認同「生產」過程的真實寫照。

4. 循環敘事：終結與開始

我的主題，我要採取的敘事方式，我的角色——多年來我一直感覺他們急著要聲明自己，並且控制我的想法。但是，直到這種有關死亡的新意識出現，我才終於開始下筆。死亡是主題，或許它一直以來都是主題。

²² 西班牙港 (Port of Spain) 為千里達及托巴哥共和國的首都 (Republic of Trinidad and Tobago)。

《抵達之謎》

《抵達之謎》最引人注目的形式特徵，無疑是其結構上的循環性與對死亡、腐朽主題的執迷。這種形式並非隨筆式的偶然流露，而是一種精心構築的敘事策略，其節奏在希望與絕望之間反覆擺盪，構成了一種永不抵達終點的辯證運動。小說前四個主要章節的結尾，均以「循環」的意象作結，但每一次的重複都帶有差異，精準地描繪出敘事者心靈狀態的起伏。

此一循環的起點，見於〈傑克的花園〉的結尾。在目睹傑克的人生哲學——「他所主張的是在一切終結之時，首要的並不是超越生活的東西，而是生活本身」（Naipaul 2002:100）——之後，敘事者似乎找到了一種肯定的力量，將死亡視為生命延續的一部分：「對我來說，一個循環（“cycle”），在小屋裡……另一個循環在傑克妻子的生活裡」（2002:101）。此時，死亡似乎被成功地整合進一個生生不息的自然秩序中。然而，這種樂觀態度在〈旅程〉一章中迅速崩塌。章節開篇夢中那「炸裂的腦袋」與「我自己的死亡」（108），將敘事者重新拋入對朽敗的憂鬱癡迷之中（pathognomonic²³ seizure of melancholia）。記憶不再是通往和解的橋樑，而成了一條封閉的迴路。他感嘆道：「我們都進行了循環旅程（“circular journeys”），以至於時常轉了一圈又返回到我們原先的起點」（195）。此處的循環，不再是新生的允諾，反倒是創傷記憶的強迫性重複。

〈常春藤〉一章標示了一次短暫的康復。敘事者將焦點從自身轉移到對周遭人、事、物的細緻描繪，似乎暫時擺脫了內省的痛苦。他宣稱自己已用「世事流動丕變的觀念取代了朽敗的觀念」（304），並期待著「一個新的循環（“a new cycle”）」（303）的開始。但這個希望是如此脆弱，以至於在緊接的第四章〈烏鴉〉中，²⁴ 死亡的概念以前所未有的強度全面回返。艾倫、菲利普斯等人的相繼離世，徹底擊碎了敘事者試圖建立的哲學防禦。儘管他再次觀察到寡婦（菲利普斯太太）再婚的可能性，但這一次，他無法再從中汲取任何慰藉。先前關於生命循環的哲學思考，此刻顯得蒼白無力：

我曾帶著變化的觀念過生活，認為它會一直持續下去，我看到了一個流動的世界，而其中的人生就如同有時會交織在一起的一系列循環（“a series of cycles”）。但是，哲學對我而言目前已經失去作用了。土地不只是土地自身，而某些事物僅僅是它自己。土地知曉我們的氣息，也被我們的感情與記憶所觸動。而我生命中這個循環的終結，伴隨著我在莊園生活的結束，與強加於我的病痛纏繞在一塊，讓我感到無比的傷痛。（2002:366-67）

²³ “Pathognomonic” 這個字是由希臘字根 *páthos* 與 *gnōmon* 所組成，前者意為疾病（disease），而後者為判斷（judge），正是一種徵候與閱讀的結合字詞。

²⁴ 第 4 章題為〈烏鴉〉（“Rooks”），在書中菲利普斯先生的父親認為烏鴉同時代表著金錢與死亡（2002: 324）。

在這段告白中，抽象的哲學被具體的、附著於土地與記憶的情感所擊敗。經歷了這番正、反、合、再否定的辯證之後，敘事者最終退回到他所說的「等待與撤退的心情」(142)，承認了漂泊的無盡與對死亡關注的無法逃離。這四個章節構成了一個巨大的、不斷內旋的循環，為最終章的告別儀式鋪平了道路。

從詹明信的理論視角出發，這種看似屬於個人心理層面的循環敘事，其本身正是小說最核心的「社會象徵行為」。它是一種意識形態策略，旨在為一個真實的、無法在現實中被解決的歷史矛盾，提供一個想像性的、美學層面上的解決方案。這個真實的歷史矛盾，正是後殖民知識分子所面臨的存在性僵局 (aporia)：一方面，他無法真正歸屬於那個已然衰敗的帝國中心；另一方面，他又已然與其加勒比海的根源產生了無法彌合的疏離。他既是帝國的孤兒，又是故鄉的棄子，懸置在一個既非此亦非彼的歷史空間之中。

面對此一詹明信稱之為「歷史的真實界」(the Real of History) 創傷性的歷史現實，敘事無法提供一個現實的政治或社會解答。於是，它轉而在形式層面給出一個「想像性的解決方案」。奈波爾的循環敘事，其根本功能便是將這個充滿創傷的、具體的、歷史性的矛盾 (中心 vs. 邊陲，殖民者 vs. 被殖民者)，轉化為一個抽象的、永恆的、哲學性的循環 (生命 vs. 死亡，希望 vs. 絕望)。透過這種形式操作，歷史的劇痛被「自然化」了，個人的漂泊被「普遍化」了。希望與絕望的交替，取代了倫敦與千里達的對抗。正是在這個意義上，小說的循環形式成功地圍堵了那股來自「真實界」的、無法被直接言說的歷史創痛，將其轉化為一種可以被忍受，甚至可以被審美化的封閉美學宇宙。

詹明信指出，「歷史是那傷害之物，是那抗拒慾望並為個人與集體實踐劃下無情界線之物……但這段歷史只能透過其效應被理解，而絕非直接作為某種物化的力量被理解」(1981:102)。在《抵達之謎》中，歷史的「效應」便是敘事者的憂鬱與漂泊感，而「循環敘事」這一形式，正是小說用以理解和處理這些效應的美學機制。它並未真正解決任何問題，但它成功地將問題轉化為一種可以被忍受、甚至被欣賞的形式。

詹明信的「認知繪圖」(cognitive mapping) 概念或能進一步理解奈波爾的形式選擇。「認知繪圖」指的是一種美學功能，旨在幫助個體在精神上定位自身於一個日益龐大、複雜且無法被直接感知的全球系統之中。在列寧所定義的帝國主義階段，個體的生活經驗與塑造這種經驗的全球結構之間，產生了巨大的斷裂。詹明信敏銳地指出，一個生活在倫敦的個體，其日常經驗的「真理」，實際上遠在印度、牙買加或香港；它與整個大英帝國的殖民體系緊密相連。現代主義文學的誕生，正是為了應對這種「如果個人經驗是真實的，那它就不可能是真理；如果一個關於此內容的科學模型是真理，那它就超越了個人經驗」的困境。

從這個角度看，奈波爾的敘事者正是一個在晚期帝國空間中，徹底喪失了「認知繪圖」能力的主體。他身處威爾特郡的鄉村，一個看似寧靜的小角落，卻無法在精神上繪製出將這個角落與千里達的殖民歷史、全球性的移民浪潮、以及整個帝國解體的龐大網絡聯繫起來的地圖。他能感受到歷史的「效應」(個人的憂鬱、

衰敗的景觀)，卻無法把握其「原因」(那不可見的全球體系)。正是這種認知繪圖的失敗，導致了敘事的向內轉向。因為無法繪製外部世界的宏觀地圖，敘事只能轉而繪製內心世界的微觀地圖。於是，對歷史矛盾的處理，退化為對個人情緒擺盪的記錄。那不斷重複、無法前進的「循環敘事」，正是這種認知失敗在形式上的直接體現。它不再是一個積極的、試圖描繪總體性的現代主義方案，而更像是一個後現代的、承認失敗的症狀：一個被困在自身經驗碎片中的主體，只能透過強迫性的重複，來徒勞地應對一個他無法理解的外部世界。因此，小說的循環形式，既是一種「社會象徵行為」，試圖在美學上「解決」矛盾；同時，它也是這種解決方案歸於失敗的「徵候」。這個封閉的美學宇宙，既是庇護所，也是一座由語言構成的牢籠。

5. 結尾

在小說的最終章〈告別儀式〉中，奈波爾的敘事完成了一次關鍵的地理與精神回歸。因妹妹莎蒂(Sati)的葬禮而重返千里達，敘事者被迫從前四章那種對英國鄉村衰敗的美學沉思中抽離，直面一個具體的、不可化約的死亡。這一章以一種後設小說的姿態，揭示了整部書的寫作緣起：正是在千里達的葬禮上，在「面臨了真正的死亡，以及對人們重新燃起的驚奇之感，我推開了草稿以及遲疑，開始以極快的速度書寫傑克與他的花園」(Naipaul 2002:387)。²⁵ 此處，「真正的死亡」與前四章中那些被哲學化、被納入自然循環的死亡形成了尖銳的對比。莎蒂的死，是歷史的真實界(the Real of History)對敘事者所建構的美學庇護所的猛烈衝擊，它迫使那被壓抑的、作為「附屬敘事」的千里達，在此刻躍升為文本的核心。

這種敘事結構上的「頭尾互換」——以英國傑克之死的思考為開端，²⁶ 卻在結尾揭示其寫作動機源於千里達的葬禮——正是小說最深刻的辯證之處。它揭示了整部作品的政治無意識：那看似主體的、關於英國的宏大敘事，其根源始終在於那被壓抑、被邊緣化的千里達經驗。前四章中那正、反、正、反的循環敘事，在此導向了一種結構形式與其內容的最終「合題」。以傑克之死引發的對死亡的美學化思考為起點，最終以千里達的「真實死亡」觸發寫作的「新生」為結束，整部小說的結構本身，形成了一個從英國到千里達、再返回書寫本身的巨大迴圈。這不僅是地理上的往返，更是一次在形式層面上對創傷的處理與昇華。

從詹明信的理論視角觀之，這個巨大的結構迴圈，正是《抵達之謎》最終的、也是最宏大的「社會象徵行為」。如果說前四章的循環敘事是透過將歷史矛盾「自然化」來進行圍堵，那麼整部小說的最終形式，則是透過將寫作行為本身「美學化」，來提供一個更高層次的想像性解決方案。詹明信曾論及，意識形態的功能不僅在於壓抑，更在於同時釋放烏托邦的衝動——對和解、對整體性的渴望。在

²⁵ 此為整本書的最後一句話：“And that was when, faced with a real death, and with this new wonder about men, I laid aside my drafts and hesitations and began to write fast about Jack and his garden.”

²⁶ 若再向前推探，則發現奈波爾將本書獻給其弟席瓦·奈波爾(Shiva Naipaul)，以緬懷這位40歲即死於心臟病的親人。

此，小說的形式本身成為了那個烏托邦的場域。它無法在現實中解決奈波爾的身份認同危機，也無法彌合帝國中心與殖民邊陲的鴻溝，但它創造了一個封閉的、自足的美學宇宙。在這個宇宙裡，歷史的創傷被轉化為敘事的動力，個人的痛苦被昇華為藝術的開端。正如詹明信所言，「歷史是那傷害之物……但這段歷史只能透過其效應被理解」(1981:102)。²⁷ 奈波爾的敘事，正是將歷史的「效應」(個人的漂泊、精神的崩潰、對死亡的恐懼)轉化為美學「形式」的過程。

然而，這個抵達是終點嗎？或許，奈波爾最終抵達的，並非一個安穩的家園，而是小說的形式本身。這個由循環、衰敗與冥想精心構築而成的美學形式，成為唯一能夠容納並調和其內在矛盾的空間。但這個空間並非靜止的庇護所，而是一個不斷運動的、永恆回返的旅程。閱讀的首要目標，如詹明信所提醒的，在於「將根本性的歷史中被壓抑與深埋的現實還原到文本表層」。本研究透過對《抵達之謎》的徵候式閱讀，正是試圖將那些文本的空白、邊緣與斷裂之處，重新置回後殖民的歷史現實之中。歷經闡釋之後的《抵達之謎》，不再僅僅是一本向內求索的個人沉思錄，而是一個深藏著政治無意識的潛文本。它如默思朗所言，是以「一種更錯綜複雜的方式來處理後殖民性、移民及混雜」(Moslund 2010:174)。

地理上，奈波爾離開了千里達，抵達了英格蘭；精神上，他從後者返回並重新登陸了自己的島嶼。然而，在文本的層次上，他最終抵達的，是書寫本身，一個能夠將無盡的漂泊轉化為永恆循環的形式。在這個形式的家園裡，歷史的劇痛被轉化為美學的節奏，個人的漂泊被賦予了普世的意義。奈波爾透過書寫，為自己那無處安放的靈魂，繪製了一幅永恆回返的旅程地圖。這部作品因此為我們提供了一個深刻的範例，展示了後殖民文學如何運用美學形式，來協商、管理、並最終賦予那無可迴避的政治無意識一個可以被言說的形體。

引用書目

- Baucom, Ian (1999). *Out of Place: Englishness, Empire, and the Locations of Identity*. Princeton: Princeton University Press.
- Cudjoe, Selwyn R (1988). *V. S. Naipaul: A Materialist Reading*. Amherst: University of Massachusetts Press.
- Gilroy, Paul (2005). *Postcolonial Melancholia*. New York: Columbia University Press.
- Gorra, Michael Edward (1997). *After Empire: Scott, Naipaul, Rushdie*. Chicago:

²⁷ 鑑於歷史之強大作用力及其無所不在之滲透性，詹明信在其著名的箴言「永遠歷史化！」(Always historize!)中，明確指出歷史無法被直接實證性地考察。換言之，我們不能將「歷史」視為一個獨立的、可被直接觀察與分析的「客體」(object)，此乃本體論上的「物化謬誤」(reification fallacy)。相反地，我們僅能如同偵探般，透過其在文化場域中留下的「效應」(effects)或「徵候」(symptoms)進行回溯性推斷，以勾勒其隱匿之樣貌。這些「痕跡」涵蓋了廣泛的文化文本(如文學作品、電影)、社會制度、建築形式乃至個體無意識層面的慾望與焦慮。因此，奈波爾之小說文本，例如《抵達之謎》，即為歷史作用於文化場域所生成之「效應」之一隅。

- University of Chicago Press.
- Greene, Graham (1970). *Collected Essays*. Harmondsworth: Penguin Books.
- Gussow, Mel (1987). The Enigma of V. S. Naipaul's Search for Himself in Writing. *New York Times*. April 25, 1987: 16.
- Hall, Stuart (1990). *Cultural Identity and Diaspora*. In Jonathan Rutherford (Ed.), *Identity: Community, Culture, Difference* (pp. 222–237). London: Lawrence & Wishart.
- Hardwick, Elizabeth (1997). Meeting V. S. Naipaul. In Feroza Jussawalla (Ed.), *Conversations with V. S. Naipaul* (pp. 44-49). Jackson: University Press of Mississippi.
- Jameson, Fredric (1988). *Cognitive Mapping*. In Cary Nelson and Lawrence Grossberg (Eds.), *Marxism and the Interpretation of Culture* (pp. 347–360). Urbana: University of Illinois Press.
- . (1988). *The Ideologies of Theory: Essays 1971-1986*. Minneapolis: University of Minnesota Press.
- . (1981). *The Political Unconscious: Narrative as a Socially Symbolic Act*. Ithaca: Cornell University Press.
- Loh, Lucienne (2010). Rural Heritage and Colonial Nostalgia in the Thatcher Years: V. S. Naipaul's *The Enigma of Arrival*. In Louisa Hadley and Elizabeth Ho (Ed.), *Thatcher and After: Margaret Thatcher and Her Afterlife in Contemporary Culture* (pp. 96-114). New York: Palgrave Macmillan.
- Macherey, Pierre (1978). *A Theory of Literary Production*, translated by Geoffrey Wall. London: Routledge & Kegan Paul.
- Moslund, Sten Pultz (2010). *Migration Literature and Hybridity: the Different Speeds of Transcultural Change*. Basingstoke: Palgrave Macmillan.
- Naipaul, V. S (2002). *The Enigma of Arrival*. London: Picador. (Original work published 1987)
- . *A House for Mr. Biswas* (1969). London: Penguin. (Original work published 1961)
- . *The Middle Passage* (1981). New York: Vintage. (Original work published 1962).
- . *The Mimic Men* (1969). London: Penguin. (Original work published 1967)
- Niven, Alastair (1997). V. S. Naipaul Talks to Alastair Niven. In Feroza Jussawalla (Ed.), *Conversations with V. S. Naipaul* (pp. 162-165). Jackson: University Press of Mississippi.
- Roberts, Adam (2000). *Fredric Jameson*. London: Routledge.
- Said, Edward (1993). *Culture & Imperialism*. New York: Vintage Books.

- . (1996). *Representations of the Intellectual*. New York: Vintage Books. (Original work published 1994).
- Scholes, Robert (1983). Interpretation and Narrative: Kermode and Jameson. *Novel: A Forum on Fiction*, 17, 1: 266-278.
- Seshadri-Crooks, Kalpana (2000). Surviving Theory: A Conversation with Homi K. Bhabha. In Fawzia Afzal-Khan and Kalpana Seshadri-Crooks (Ed.), *The Pre-Occupation of Postcolonial Studies* (pp. 369-379). Durham: Duke University Press.
- Su, John J (2005). *Ethics and Nostalgia in the Contemporary Novel*. Cambridge, UK: Cambridge University Press.

本論文於 2025 年 2 月 24 日到稿，2025 年 6 月 26 日通過審查。

A Corpus-based Approach to *ko* Syllables in Old Japanese: focusing on disyllabic and trisyllabic nouns

林智凱/Lin, Chihkai

國立臺灣科技大學語言中心 助理教授

Language Center, National Taiwan University of Science and Technology

【摘要】

本研究旨在研究古日語中的 *ko* 音節在語料庫中的真實使用情形，並以雙音節及三音節名詞為主要分析對象。古日語文獻主要依賴漢字做為紀錄媒介，紀錄時，透過音譯字手段，而 *ko* 音節則是由三大類漢字轉寫，分別為第一類的「己」和「忌」，第二類的「許」、「巨」、「居」、「去」和「虛」，以及第三類的「興」。若不同漢字可同時轉寫 *ko* 音節，其音值則應彼此相近或是相同，其背後之方言差異及時代落差應可忽略不計。而本文將從兩方面探討古日語中 *ko* 音節的音譯漢字：外部因素，方言差異及時間差異；內部因素，字中的音節位置。

本研究資料主要來自 Oxford-NINJAL Corpus of Old Japanese (ONCOJ) 中的古日語雙音節及三音節名詞，其中必須包含至少兩個 *o* 母音，且至少其中一個音節須為 *ko*。收集到的語料包含 12 個雙音節名詞與 18 個三音節名詞。結果顯示音譯字「許」與「己」為主要用字，並在方言差異及時代落差，呈現出顯著差異。音譯字「許」在古日語中，不分方言及時代，皆被大量使用，但音譯字「己」主要於古日語後期使用(東西古日語皆同)。而音節位置上，音譯字「許」與「己」仍呈顯出顯著差異。最後，本研究亦討論非主要音譯字之使用情形，結果發現非主要音譯字主要出現在古日語早期文獻《日本書紀》中。

【關鍵字】

ko 音節、古日語、方言差異、時代落差、音節位置

【Abstract】

This paper conducts a corpus-based analysis of *ko* syllables in Old Japanese as represented in disyllabic and trisyllabic nouns. Old Japanese was historically transcribed using Chinese phonograms, with *ko* syllables represented by three distinct Middle Chinese rhyme classes: the first class includes phonograms 己 and 忌, the second class comprises phonograms 許, 巨, 居, 去, and 虛, and the third class contains phonogram 興. If these eight phonograms were entirely interchangeable in Old Japanese, dialectal and temporal variation would presumably be minimal. This paper thus scrutinizes the actual deployment of these eight phonograms from two perspectives: external factors (dialectal distinctions and temporal variation) and internal factors (positional occurrence of the *ko* syllable within phonological words).

The data are sourced from the Oxford-NINJAL Corpus of Old Japanese (ONCOJ), focusing on disyllabic and trisyllabic nouns that include at least two *o* vowels (one of which is a *ko* syllable). The dataset encompasses 12 disyllabic and 18 trisyllabic nouns, revealing marked dialectal and temporal patterns in the use of the principal phonograms 許 and 己. Specifically, 許 appears prevalently across Old Japanese, while 己 exhibits increased usage in Eastern Old Japanese and Late Western Old Japanese. Additionally, analysis of *ko* syllable positions within words indicates a statistically significant distributional contrast between 許 and 己 depending on whether they appear in the initial or subsequent syllables. Furthermore, the remaining, less dominant phonograms are primarily confined to the *Nihon Shoki*, an Early Western Old Japanese text.

【Keywords】

ko syllable, Old Japanese, dialectal differences, temporal variation, syllable positions

1. Introduction

This paper examines the alternation of *ko*¹ [kə]² syllables in Old Japanese through a corpus-based approach, focusing on both dialectal differences and temporal variations. Historically, Old Japanese was primarily documented using phonograms (Chinese

¹ This paper adheres to Vovin's (2005) classification of *ko* syllables, where the vowel is identified as *otsu-rui* (乙類). In contrast, the *ko-rui* (甲類) vowel represents the syllable as *wo* in *kwo* [ko] syllables.

² The reconstruction of the *ko* syllable in this paper is based on Miyake (2003). Alternative reconstructions of the *ko* syllable in Old Japanese include [ko] (Mabuchi, 1994), [kə] (Kasama, 2015), and [kə] (Mori, 1991; Hayata, 2017).

characters), which are known as “*man’yōgana signs*”.³ A prominent feature of this documentation is the interchangeable use of various phonograms to represent the same Old Japanese syllable.⁴ *Ko* syllables can be transcribed with the phonograms 己, 許, 巨, 居, 去, 虛, 忌, and 興.⁵ However, these eight phonograms correspond to three distinct rhyme classes in Middle Chinese: phonograms 己 and 忌 fall under one class, phonograms 許, 巨, 居, 去, and 虛 form the second, and phonogram 興 constitutes the third. The first rhyme class, comprising phonograms 己 and 忌, belongs to 止攝 *zhǐshè*, where the vowels are reconstructed as front high [i] or mid-high [i̯] vowels.⁶ In contrast, the five phonograms, phonograms 許, 巨, 居, 去, and 虛, belong to 遇攝 *yùshè*, a rhyme class characterized by a mid-back vowel [o]. The phonogram 興, meanwhile, is categorized under 曾攝 *zēngshè*, which involves a front high vowel [i] or [jə]. Table 1 summarizes the reconstructions of Middle Chinese pronunciations for these phonograms as proposed by Li (1980), Tung (1993), and Baxter & Sagart (2014).

Table 1: Reconstructions of phonograms for *ko* syllables in Middle Chinese⁷

	己	忌	居	許	巨	去	虛	興
Li (1980)	kǐ	gǐ	kjwo	xjwo	gjwo	k ^h jwo	xjwo	xjəŋg
Tung (1993)	ki	g ^{hi}	kjo	xjo	g ^h jo	k ^h jo	xjo	xjəŋ
Baxter and Sagart (2014)	ki	gi	kjo	xjo		k ^h jo	xjo	xing

³ While the *Man’yōshū* remains the primary source for Old Japanese, other significant texts include the *Kojiki* and *Nihon Shoki*. This paper opts not to use the term “*man’yōgana signs*” to refer to the kanji utilized in Old Japanese; instead, it employs the broader term “phonogram.”

⁴ In Old Japanese, phonograms served in various capacities: as *ongana* (phonetic readings), *kungana* (semantic readings), or disyllabic representations. The eight phonograms are primarily used as *ongana*. A phonogram functioning as *kungana* for the *ko* syllable is 木, while phonograms used disyllabically for the *ko* syllable include 金 [kəmu], 今 [kəmu], 近 [kənə], 乞 [kəti], and 興 [kəNkə].

⁵ In Old Japanese, there are two varieties of phonograms. Variety A originates from adaptations of Early Middle Chinese transmitted via the Korean peninsula, whereas Variety B derives from Late Middle Chinese. Variety A, the more prevalent form, appears extensively across Old Japanese texts, with the notable exception of the *Nihon Shoki*, where Variety B is predominantly featured. For the *ko* syllable, Variety A phonograms include 己, 許, 巨, 居, 去, 虛, 忌, and 興, while Variety B phonograms consist of 許, 巨, 居, 去, 虛, 舉, 莒, 捩, 渠, and 興.

⁶ In Chinese historical phonology, the term 攝 *shè* ‘rhyme class’ refers to the categorization of vowels. There are 16 recognized *shè*, which are divided based on their coda types. The rhyme classes with vocalic codas include 果 *guǒ*, 假 *jiǎ*, 遇 *yù*, 蟹 *xiè*, 止 *zhǐ*, 效 *xiào*, and 流 *liú*, and those with nasal or stop codas are 咸 *xián*, 深 *shēn*, 山 *shān*, 臻 *zhēn*, 宕 *dàng*, 梗 *gěng*, 曾 *zēng*, 通 *tōng*, and 江 *jiāng*.

⁷ As indicated in Table 1, different reconstructions exist for 興: [xjəŋg] (Li 1980), [xjəŋ] (Tung 1993), and [xing] (Baxter & Sagart 2014). The variation in vowel quality does not affect the main argument of this paper regarding the interchangeability of phonograms.

Given the presence of three distinct rhyme classes for these eight phonograms, with vowels categorized as either front [i] or back [o], the actual usage of the *ko* syllable in Old Japanese merits closer examination. If all these phonograms were indeed used to represent the *ko* [kə] syllable, they would theoretically alternate within the same phonological word. For instance, the word *kokoro* ‘heart’ is attested with various transcriptions, such as 己許呂 (MYS 5.796), 許許呂 (MYS 15.3723), and 去去里 (MYS 20.4390). Since these three transcriptions denote the same word, the phonograms 己, 許, and 去 should be phonologically equivalent or phonetically similar, suggesting that phonograms from 止攝 *zhǐshè* and 遇攝 *yùshè* classes were interchangeable in Old Japanese.

Examining phonograms exclusively through the prism of Chinese phonology may suggest that the eight phonograms utilized in Old Japanese—己, 許, 巨, 居, 去, 虛, 忌, and 興—are fundamentally distinct from one another. However, their *Goon* readings (吳音), a layer of Sino-Japanese phonology from the 5th to 7th centuries, reveal similar pronunciations across these phonograms: [ko] for 己, 居, 去, and 虛; [go] for 忌 and 巨; and [kou] for 興. These *Goon* readings imply that the eight phonograms could be interchangeable in representing the *ko* syllable.

While the *Goon* readings clearly indicate the potential interchangeability of the eight phonograms for the *ko* syllable, a critical question emerges: Are these eight phonograms, employed to represent *ko* syllables across different rhyme classes, phonologically equivalent on the surface, or do they encode deeper distinctions related to dialectal differences or temporal variations? If they were indeed interchangeable, one would expect consistent usage across various texts and periods. However, any systematic variation might suggest that the phonograms were intended to capture nuanced phonological distinctions, potentially reflecting shifts in pronunciation or regional variations that may not be immediately evident at the surface level.

To investigate the usage of the eight phonograms representing the *ko* syllable in Old Japanese, this paper adopts a corpus-based approach focused on disyllabic and trisyllabic nouns that contain at least two *o* vowels, one of which is specifically a *ko* syllable. This systematic methodology facilitates an exploration of both synchronic and diachronic variations in the usage of the *ko* syllable within defined linguistic contexts. The paper is structured as follows: Section 2 outlines the corpus, detailing the data collection and classification criteria, including the selection of texts and the identification process for disyllabic and trisyllabic nouns. This section also addresses the rigorous methods employed to pinpoint instances featuring two *o* vowels, including one *ko* syllable, while emphasizing the importance of accounting for regional linguistic diversity in Old Japanese. Section 3

presents the results, illustrating distribution patterns of nouns with the *ko* syllable. Section 4 discusses two key factors influencing *ko* alternation: external factor as dialectal and temporal variation and internal factor as the positions of *ko* syllables in a phonological word. Dialectal differences examine regional contrasts between Western and Eastern Old Japanese, while temporal variations address distinctions between Early and Late Western Old Japanese. Additional discussions will cover the positions of *ko* syllables within disyllabic and trisyllabic nouns. The use of non-dominant phonograms in *ko* syllable contexts is also discussed in Section 4. Finally, Section 5 synthesizes the findings and concludes the paper.

2. Corpus, data collection and data classification

The corpus used in this paper is The Oxford-NINJAL Corpus of Old Japanese (ONCOJ), which includes seven important sources for Old Japanese, as summarized in Table 2.

Table 2: Seven sources in ONCOJ

Title			Number of poems	Date of compilation
<i>Kojiki kayō</i>	古事記歌謡	KK	112	712 CE
<i>Nihon shoki kayō</i>	日本書紀歌謡	NSK	133	720 CE
<i>Fudoki kayō</i>	風土記歌謡	FK	20	730s CE
<i>Bussokuseki-ka</i>	仏足石歌	BS	21	After 753 CE
<i>Man'yōshū</i>	万葉集	MYS	4,685	After 759 CE
<i>Shoku nihongi kayō</i>	続日本紀歌謡	SNK	8	797 CE
<i>Jōgū shōtoku hōō teisetsu</i>	上宮聖徳法王帝説	JSHT	4	Date unknown

A total of 4,983 poems are included in the ONCOJ; however, 94% of these poems are concentrated in MYS. Among the seven sources, not every poem is transcribed using phonograms. For instance, the word *kokoro* ‘heart’ can be represented phonetically with the phonograms 己許呂 (MYS 5.796) and 許許呂 (MYS 15.3723), but it can also appear logographically as 心 (MYS 3.253a) or occasionally as 情 (MYS 11.2749). In this analysis, the logograms are excluded from consideration.

A function in ONCOJ, called **DICTIONARY**, allows users to search for words within the corpus. The word selection process in this paper is based on the complete word list

compiled from ONCOJ in 2022.⁸ To avoid interference from morphological processes, only nouns (including particles) are analyzed in this paper. The analysis specifically focuses on disyllabic and trisyllabic nouns containing at least two *o* vowels, with one of the syllables being *ko*. For instance, *koko* ‘here’ contains two *ko* syllables, while *koso* ‘focus particle’ has two *o* vowels and one *ko* syllable. In the case of trisyllabic nouns, *kokoro* ‘heart’ includes three *o* vowels and two *ko* syllables, while *konomo* ‘this side’ has three *o* vowels but only one *ko* syllable. Two types of words are excluded from the dataset: words with only one *ko* syllable and other vowels in the remaining syllables, such as *kore* ‘this (one)’ (MYS.15.3638), and words that contain *o* vowels but lack *ko* syllables, e.g. *yoso* ‘(from) afar; elsewhere; outside’ (MYS.15.3631).

The collected data arrange thoroughly in the period of Old Japanese (approximately the whole 8th century), and they are divided into two main dialects: Western Old Japanese (WOJ) and Eastern Old Japanese (EOJ). Western Old Japanese is further classified into two periods: Early Western Old Japanese (EWOJ) and Late Western Old Japanese (LWOJ). Among the seven sources for Old Japanese, volumes 14 and 20 in MYS are recognized as EOJ or as Azuma Old Japanese (Kupchik 2023), and the rest of the eighteen volumes in MYS and the other six sources are Western Old Japanese. As for temporal differences, Vovin (2005) has suggested that *Kojiki kayō* (KK), *Jōgū Shōtoku hōō teisetsu* (JSHT), *Nihonshoki kayō* (NSK), and *Fudoki kayō* (FK) are recognized as EWOJ. In this period, volume 5 in MYS is also a representative work of EWOJ. As for LWOJ, works include volumes 15, 17, 18, 19 in MYS, *Bussokuseki-ka* (BS), and *Shoku nihongi kayō* (SNK). After data collection and classification, the results are presented in Section 3.

3. Results

The corpus data include 12 disyllabic nouns and 18 trisyllabic nouns, as listed in Tables 3 and 4, respectively.⁹ In Table 3, there are 123 tokens for *koto* ‘thing’, 116 tokens for *koso* ‘focus particle’, 26 tokens for *toko* ‘bed’, 25 tokens for *soko* ‘there’, 14 tokens for *koko* ‘here’, 11 tokens for *poko* ‘spear’, 8 tokens for *koro* ‘time’, 6 tokens for *komo* ‘mat (made from straw or leaves of the rice plant)’, 4 tokens for *yoko* ‘side’, 2 tokens for *kozo* ‘tonight’, 2 tokens for *noko* ‘place name’, and 1 token for *kozo* ‘last year’.

⁸ In 2023, the word list has been removed from ONCOJ, and the only the search function in DICTIONARY is maintained.

⁹ *Kogoto* ‘[unknown]’ is not included in Table 3 because it is an adverb.

Table 3: 12 disyllabic nouns¹⁰

No.	Nouns	Gloss	Tokens
1.	<i>koto</i>	thing	123
2.	<i>koso</i>	focus particle	116
3.	<i>toko</i>	bed	26
4.	<i>soko</i>	there	25
5.	<i>koko</i>	here	14
6.	<i>poko</i>	spear	11
7.	<i>koro</i>	time	8
8.	<i>komo</i>	mat (made from straw or leaves of the rice plant)	6
9.	<i>yoko</i>	side	4
10.	<i>kozo</i>	tonight	2
11.	<i>noko</i>	place name	2
12.	<i>kozo</i>	last year	1

In Table 4, the eighteen trisyllabic nouns are *kokoro* ‘heart’ (76 tokens), *mikoto* ‘honorable words; highness’ (43 tokens), *koromo* ‘robe, garment’ (23 tokens), *tokoyo* ‘eternal world’ (9 tokens), *koyopi* ‘tonight’ (9 tokens), *mokoro* ‘like, similar to’ (5 tokens), *konomo* ‘this side’ (4 tokens), *kokono* ‘nine’ (2 tokens). The words with only one token are *dokoro* ‘place’, *kodoki* ‘prayer’, *koroku* ‘crow’s call “Caw caw”’, *nokori* ‘remaining (deverbal of nokor- ‘remain’)', *sokopi* ‘bottom, limit’, *tokopa* ‘evergreen leaf’, *tokoro* ‘place’, *yapoko* ‘many halberds’, *yokosa* ‘horizontal position’ and *yutoko* ‘bed’.

Table 4: 18 trisyllabic nouns¹¹

No.	Nouns	Gloss	Tokens
1.	<i>kokoro</i>	heart	76
2.	<i>mikoto</i>	honorable words; highness	43
3.	<i>koromo</i>	robe, garment	23
4.	<i>tokoyo</i>	eternal world	9
5.	<i>koyopi</i>	tonight	9
6.	<i>mokoro</i>	like, similar to	5
7.	<i>konomo</i>	this side	4
8.	<i>kokono</i>	nine	2
9.	<i>dokoro</i>	place	1
10.	<i>kodoki</i>	prayer	1
11.	<i>koroku</i>	crow’s call “Caw caw”	1

¹⁰ The meaning of the word *yoko* in ONCOJ is ‘across, horizontal, but it is marked as a noun. To be consistent, the meaning of this word is changed to ‘side’.

¹¹ The meaning of the word, *mokoro* ‘like, similar to’ would suggest that it is an adjective, but it should be a noun in the real usage of this word, as it always follows genitive *no*.

12.	<i>nokori</i>	remaining (deverbal of <i>nokor-</i> 'remain')	1
13.	<i>sokopi</i>	bottom, limit	1
14.	<i>tokopa</i>	evergreen leaf	1
15.	<i>tokoro</i>	place	1
16.	<i>yapoko</i>	many halberds	1
17.	<i>yokosa</i>	horizontal position	1
18.	<i>yutoko</i>	bed	1

3.1 Disyllabic nouns

The distributions of the twelve disyllabic nouns are discussed below. Table 5 shows the distributions of the word *koto* 'thing' (123 tokens).

Table 5: Sets of transcription for *koto* 'thing'

<i>koto</i>	EWOJ	LWOJ	EOJ	Total
許等	FK (1) MYS 5 (7) JSHT (1)	MYS 15 (7) MYS 17 (11) MYS 18 (9)	MYS 14 (6) MYS 20 (11)	53
許登	KK (11)	MYS 15 (4) MYS 17(7) MYS 18 (9)	MYS 14 (8) MYS 20 (2)	41
己等	FK (1) MYS 5 (2)	MYS 17 (1) MYS 19 (1)	MYS 14 (1) MYS 20 (9)	15
巨騰	NSK (2) MYS 5 (1)			3
虛等	NSK (3)			3
舉騰	NSK (2)			2
去等	NSK (1)			1
居登	NSK (1)			1
居等	NSK (1)			1
計等	MYS 5 (1)			1
渠騰	NSK (1)			1
己登			MYS14 (1)	1

For *koto* 'thing', there are 12 sets of transcriptions. More than 75% of the tokens are found in two sets of transcriptions: 許等 (53 tokens) and 許登 (41 tokens). Other sets like 己等 (15 tokens), 巨騰 (3 tokens), and 虛等 (3 tokens) are relative low in frequency.

The word *koso* ‘focus particle’, as shown in Table 6, is transcribed in 8 sets with 116 tokens. 70% of the transcriptions goes to 許曾 (82 tokens), followed by 己曾 (15 tokens) and 許增 (8 tokens).

Table 6: Sets of transcription for *koso* ‘focus particle’

<i>koso</i>	EWOJ	LWOJ	EOJ	Total
許曾	NSK (2) FK (1) KK (13) MYS 1 (3) MYS 2 (2) MYS 3 (2) MYS 4 (3) MYS 5 (3) MYS 6 (1) MYS 7 (4) MYS 8 (4) MYS 9 (1) MYS 10 (2) JSHT (1)	MYS 15 (4) MYS 16 (4) MYS 17 (6) MYS 18 (6) MYS 19 (5)	MYS 14 (14) MYS 20 (1)	82
己曾	MYS 1 (1) MYS 2 (2) MYS 3 (1) MYS 5 (1) MYS 6 (1) MYS 9 (2) MYS 11 (1)	MYS 16 (2) MYS 19 (2)	MYS 14 (1) MYS 20 (1)	15
許增	MYS 7 (1) MYS 10 (2) MYS 11 (1) MYS 12 (4)			8
虛曾	NSK (4)			4
舉曾	NSK (3)			3
去曾	NSK (1)	SNK (1)		2
己所	MYS 3 (1)			1
虛層	NSK (1)			1

Table 7 presents the word *toko* ‘bed’ (26 tokens), which is commonly transcribed by 等許 (14 tokens).

Table 7: Sets of transcription for *toko* ‘bed’

<i>toko</i>	EWOJ	LWOJ	EOJ	Total
等許	FK (3) MYS 5 (2)	MYS 15 (1) MYS 17 (3) MYS 18 (1)	MYS 14 (2) MYS 20 (2)	14
登許	KK (3) MYS 5 (1)	MYS 17 (4)		8
登己		MYS 17 (1)		1
等己	MYS 5 (1)			1
等虛	NSK (1)			1
騰舉	NSK (1)			1

Table 8 presents the word *soko* ‘there’, which occurs 25 times in total, with the phonogram transcription 曾許 being the most common, accounting for 13 tokens.

Table 8: Sets of transcription for *soko* ‘there’

<i>soko</i>	EWOJ	LWOJ	EOJ	Total
曾許	KK (1) MYS 1 (1) MYS 3 (1) MYS 5 (1) MYS 6 (1) MYS 7 (1) MYS 13 (1)	MYS 17 (4) MYS 19 (2)		13
曾己		MYS 17 (2) MYS 19 (1)	MYS 20 (1)	4
所虛	MYS 2 (2)			2
賊據	NSK (2)			2
所己	MYS 2 (1)			1
所許	MYS 9 (1)			1
曾虛	NSK (1)			1
則許		MYS 17 (1)		1

Table 9 presents the word *koko* ‘here’ (14 tokens), which is commonly transcribed by 許己 (7 tokens).

Table 9: Sets of transcription for *koko* ‘here’

<i>koko</i>	EWOJ	LWOJ	EOJ	Total
許己	MYS 8 (1)	MYS 15 (1) MYS 17 (1) MYS 18 (3)	MYS 20 (1)	7
己許	MYS 13 (1)	MYS 15 (1)	MYS 14 (2)	4
許許	KK (1)		MYS 20 (1)	2
虛虛	NSK (1)			1

Table 10 presents the following words: *poko* ‘spear’ (11 tokens in total), commonly transcribed as 保許 (8 tokens); *koro* ‘time’ (8 tokens in total), with the predominant transcription being 許呂 (5 tokens); *komo* ‘mat made from straw or leaves of the rice plant’ (4 tokens in total), primarily transcribed as 許母 (4 tokens).

Table 10: Sets of transcription for *poko* ‘spear’, *koro* ‘time’, and *komo* ‘mat (made from straw or leaves of the rice plant)’

<i>poko</i>	EWOJ	LWOJ	EOJ	Total
保許		MYS 17 (6) MYS 18 (2)		8
保己		MYS 17 (2)	MYS 20 (1)	3
<hr/>				
<i>koro</i>	EWOJ	LWOJ	EOJ	Total
許呂	MYS 4 (1)	MYS 15 (3)	MYS 14 (1)	5
己呂	MYS 2 (1) MYS 11 (1)		MYS 14 (1)	3
<hr/>				
<i>komo</i>	EWOJ	LWOJ	EOJ	Total
許母	KK (3) MYS (1)			4
許莽	NSK (1)			1
舉慕	NSK (1)			1

The other words are low in frequency in the corpus, as shown in Table 11. The words include *yoko* ‘side’ (4 tokens), *kozo* ‘tonight’ (2 tokens), *noko* ‘place name’ (2 tokens), and *kozo* ‘last year’ (1 token).

Table 11: Sets of transcription for *yoko* ‘side’, *kozo* ‘tonight’, *noko* ‘place name’, and *kozo* ‘last year’

<i>yoko</i>	EWOJ	LWOJ	EOJ	Total
余許	KK (1)		MYS 20 (1)	2
与許			MYS 14 (1)	1
与己		MYS 18 (1)		1
<hr/>				
<i>kozo</i>	EWOJ	LWOJ	EOJ	Total
許存	KK (1)			1
去樽	NSK (1)			1
<hr/>				
<i>noko</i>	EWOJ	LWOJ	EOJ	Total
能許		MYS 15 (2)		2
<hr/>				
<i>kozo</i>	EWOJ	LWOJ	EOJ	Total
許序		MYS 18 (1)		1

Table 12 summarizes the total distribution of the ten phonograms representing *ko* syllables across different periods and dialects in disyllabic nouns.

Table 12: Total distribution of the ten phonograms for *ko* syllables in different period of time and dialects (2 syllables)

Phonograms	EWOJ	LWOJ	EOJ	Total
許	98	109	54	261
己	19	19	19	57
虛	14			14
舉	7			7
去	3	1		4
巨	3			3
居	2			2
據	2			2
渠	1			1
計	1			1
Total	150	129	73	352

The dataset comprises a total of 352 tokens, with a significant majority attributed to the phonogram 許, which accounts for 261 tokens. This highlights the predominance of 許 in the corpus, indicating its crucial role in representing the *ko* syllable within disyllabic nouns. Following this, the phonogram 己 has a notable but much lower frequency,

contributing 57 tokens. The remaining phonograms exhibit relatively infrequent occurrences, suggesting their limited use in this context. Specifically, 虛 appears 14 times, while 舉 is recorded 7 times. Further down the frequency scale, the phonograms 去, 巨, 居, 據, 渠, and 計 show even lesser representation, with counts of 4, 3, 2, 2, 1, and 1 tokens, respectively.

3.2 Trisyllabic nouns

The details of the 18 nouns are presented below. Table 13 first illustrates the distribution of the word *kokoro* ‘heart’, which has a total of 76 tokens. In Table 13, *kokoro* is transcribed in seven different sets, with the predominant transcription being 許己呂 (40 tokens). This is followed by 21 tokens for 己許呂 and 10 tokens for 許許呂. The remaining four sets—己己呂, 去去里, 虛居呂, and 虛虛呂—each have sporadic token counts.

Table 13: Sets of transcription for *kokoro* ‘heart’

<i>kokoro</i>	EWOJ	LWOJ	EOJ	Total
許己呂		MYS 15 (6) MYS 17 (10) MYS 18 (14) MYS 19 (1)	MYS 14 (1) MYS 20 (8)	40
己許呂	MYS 5 (1)	MYS 15 (2) MYS 17 (1)	MYS 14 (14) MYS 20 (3)	21
許許呂	KK (5) MYS 5 (4)	MYS 15 (1)		10
虛虛呂	NSK (2)			2
己己呂			MYS 20 (1)	1
去去里			MYS 20 (1)	1
虛居呂	NSK (1)			1

Table 14 displays the distribution of the word *mikoto* ‘honorable words; highness’, which has a total of 43 tokens. The four sets of transcriptions are as follows: 美許等 (21 tokens), 美許登 (14 tokens), 美己等 (6 tokens), and 弥許等 (2 tokens).

Table 14: Sets of transcription for *mikoto* ‘honorable words; highness’

<i>mikoto</i>	EWOJ	LWOJ	EOJ	Total
弥許等	MYS 5 (1)	MYS 15 (1)		2
美己等		MYS 19 (1)	MYS 14 (1) MYS 20 (4)	6
美許登	KK (5)	MYS 17 (3) MYS 18 (4)	MYS 20 (2)	14
美許等	KK (1)	MYS 15 (1)	MYS 20 (8)	21

	MYS 5 (3)	MYS 17 (3) MYS 18 (3) MYS 19 (2)		
--	-----------	--	--	--

Table 15 illustrates the distribution of the word *koromo* ‘robe, garment’, which comprises a total of 23 tokens. The transcription of 許呂母 accounts for nine tokens, followed by 許呂毛 with five tokens, and 己呂母 with four tokens. Additionally, the transcription 虛呂望 appears twice. The sets 己呂毛, 去呂毛, and 己呂武 each occur only once in the corpus.¹²

Table 15: Sets of transcription for *koromo* ‘robe, garment’

<i>koromo</i>	EWOJ	LWOJ	EOJ	Total
許呂母		MYS 15 (7)	MYS 14 (1) MYS 20 (1)	9
許呂毛		MYS 15 (3) MYS 18 (1)	MYS 14 (1)	5
己呂毛		MYS 15 (1)		1
己呂母		MYS 17 (1)	MYS 14 (1) MYS 20 (2)	4
虛呂望	NSK (2)			2
去呂毛			MYS 20 (1)	1
己呂武			MYS 20 (1)	1

Table 16 presents the distribution of the word *tokoyo* ‘eternal world’, which totals 9 tokens. Among these, there are four tokens for 等許余 and two for 等許与. Additionally, the sets 等己与, 等虛予, and 騰舉預 each occur only once in the corpus.

Table 16: Sets of transcription for *tokoyo* ‘eternal world’

<i>tokoyo</i>	EWOJ	LWOJ	EOJ	Total
等許余	KK (2) FK (1)	MYS 18 (1)		4
等許与	FK (2)			2
等己与	MYS 5 (1)			1
等虛予	NSK (1)			1
騰舉預	NSK (1)			1

¹² In the corpus, the word *koromo* (‘robe, garment’) also appears in the variation *goromo* when it follows other syllables. An example of this usage is found in 奈礼其呂母 (*naregoromo*), meaning ‘of the familiar robe’ (MYS 15.3625). However, the tokens of *goromo* are not included in Table 14.

Table 17 illustrates the distribution of the word *koyopi* ‘tonight’, which has a total of 9 tokens across five sets. Among these, 許余比 accounts for five tokens. The sets 己与比, 己余必, 虛予比, and 許与比 each appear only once in the corpus.

Table 17: Sets of transcription for *koyopi* ‘tonight’

<i>koyopi</i>	EWOJ	LWOJ	EOJ	Total
許余比		MYS 18 (1)	MYS 14 (4)	5
己与比			MYS 20 (1)	1
己余必			MYS 14 (1)	1
虛予比	NSK (1)			1
許与比			MYS 14 (1)	1

Table 18 displays the distributions of three words: *mokoro* (‘like, similar to’) with 5 tokens in three sets, *konomo* ‘this side’ with 4 tokens in three sets, and *kokono* ‘nine’ with 2 tokens in two sets. For *mokoro*, the tokens include three for 母許呂, one for 毛己呂, and one for 母己呂. In the case of *konomo*, there are two tokens for 許能母, one for 許乃母, and one for 許乃毛. Lastly, *kokono* is represented by two sets, each with only one token: 許許能 and 虛虛能.

Table 18: Sets of transcription for *mokoro* ‘like, similar to’, *konomo* ‘this side’ and *kokono* ‘nine’

<i>mokoro</i>	EWOJ	LWOJ	EOJ	Total
母許呂	MYS 2 (2)		MYS 14 (1)	3
毛己呂			MYS 14 (1)	1
母己呂			MYS 20 (1)	1
<hr/>				
<i>konomo</i>	EWOJ	LWOJ	EOJ	Total
許乃母			MYS 14 (1)	1
許能母	MYS 17 (1)		MYS 14 (1)	2
許乃毛	MYS 17 (1)			1
<hr/>				
<i>kokono</i>	EWOJ	LWOJ	EOJ	Total
許許能	KK (1)			1
虛虛能	NSK (1)			1

Table 19 presents 10 sets of transcription that each contain only one token in the corpus. These transcriptions are as follows: 止己呂 for *dokoro* ‘place’, 許騰伎 for *kodoki* ‘prayer’, 許呂久 for *koroku* ‘crow’s call “Caw caw”’, 能己里 for *nokori* ‘remaining’, 曾許比 for *sokopi* ‘bottom, limit’, 登許波 for *tokopa* ‘evergreen leaf’, 等己呂 for *tokoro*

‘place’, 夜保許 for *yapoko* ‘many halberds’, 与己佐 for *yokosa* ‘horizontal position’, and 由等許 for *yutoko* ‘bed’.

Table 19: Sets of transcription with only one token

Noun	Gloss	Transcription	Source	Token
<i>dokoro</i>	place	止己呂	MYS 14	1
<i>kodoki</i>	prayer	許騰伎	BS	1
<i>koroku</i>	crow’s call “Caw caw”	許呂久	MYS 14	1
<i>nokori</i>	Remaining (deverbal of nokor- ‘remain’)	能己里	MYS 20	1
<i>sokopi</i>	bottom, limit	曾許比	MYS 15	1
<i>tokopa</i>	evergreen leaf	登許波	MYS 14	1
<i>tokoro</i>	place	等己呂	MYS 19	1
<i>yapoko</i>	many halberds	夜保許	MYS 18	1
<i>yokosa</i>	horizontal position	与己佐	MYS 18	1
<i>yutoko</i>	bed	由等許	MYS 20	1

In conclusion, Table 20 summarizes the total distribution of the six phonograms representing *ko* syllables in trisyllabic nouns.

Table 20: Total distribution of the ten phonograms for *ko* syllables in different period of time and dialects (3 syllables)

Phonograms	EWOJ	LWOJ	EOJ	Total
許	38	71	50	159
己	2	40	42	84
虛	11			11
去			3	3
舉	1			1
居	1			1
Total	53	111	95	259

The dataset comprises a total of 259 tokens, with a predominant majority attributed to the phonogram 許, which accounts for 159 tokens. This signifies its prominence in the representation of *ko* syllables within the corpus. Following closely is the phonogram 己, which contributes 84 tokens to the total count. In contrast, the remaining four phonograms exhibit relatively low frequencies of occurrence. Phonogram 虛 is represented by 11 tokens, while phonograms 去 and 居 are recorded with only 1 token each. Additionally, phonogram 舉 also contributes a solitary token to the overall distribution.

4. Discussion

The frequent utilization of the two phonograms 許 and 己, as illustrated in Tables 12 and 20, indicates a strong possibility of their interchangeability in Old Japanese. This interchangeability is evident not only in their co-occurrence within the same lexical item, as demonstrated by transcriptions like 許己呂 and 己許呂 for the term *kokoro* ‘heart’, but also in their alternation across various textual sources, such as 許呂母 and 己呂母 for *koromo* ‘robe, garment’.

To explore whether any substantive distinctions exist between these two phonograms 許 and 己, the analysis will focus on two external factors previously discussed in Section 2: dialectal differences and temporal variations (see Section 4.1). The examination of dialectal differences includes WOJ and EOJ, while temporal variations consider EWOJ and LWOJ. Additionally, this paper discusses the positions of the phonograms for the *ko* syllable as an internal factor in Section 4.2 to ascertain if significant differences arise based on their placement within disyllabic and trisyllabic nouns. Lastly, Section 4.3 explores the phonograms that exhibit lower frequencies, aiming to elucidate their roles and implications within the corpus.

4.1 Dialectal differences and temporal variations

A general trend concerning the usage of the ten phonograms is summarized in Table 21, underscoring the potential influence of these factors.

Table 21: Total distribution of the ten phonograms for *ko* syllables in different period of time and dialects

Phonograms	EWOJ		LWOJ		EOJ		Total
	2S	3S	2S	3S	2S	3S	
許	98	38	109	71	54	50	420
己	19	2	19	40	19	42	141
虛	14	11					25
舉	7	1					8
去	3		1			3	7
巨	3						3
居	2	1					3
據	2						2
渠	1						1
計	1						1
Total	150	53	129	111	73	95	611

*2S = disyllabic nouns, 3S = trisyllabic nouns

Table 21 presents the total distribution of the ten phonograms for *ko* syllables in disyllabic and trisyllabic nouns across different time periods and dialects. The data reveals notable differences in the frequency of use between the two primary phonograms 許 and 己. Specifically, the phonogram 許 occurs more frequently in both EWOJ and LWOJ, with 136 and 180 tokens, respectively, and also in EOJ with 104 tokens, totaling 420 tokens. In contrast, the phonogram 己 is less common in EWOJ (21 tokens) but rises significantly in LWOJ (59 tokens) and EOJ (61 tokens), with a total of 141 tokens. The remaining phonograms appear infrequently, with 虛 being the most notable among them (25 tokens in EWOJ), followed by 舉 (8 tokens in EWOJ) and 去 (7 tokens). The phonograms 巨, 居, 據, 渠, and 計 each have fewer tokens, totaling three or fewer in the dataset.

To determine whether there is a significant difference in the distribution of phonograms 許 and 己 across different time periods and dialects, a chi-square test was conducted. The results indicate a statistically significant difference ($\chi^2 = 23.8447, p < .01$), suggesting that the use of the two main phonograms is not uniformly distributed over time and across dialects. This finding supports the hypothesis that dialectal and temporal factors played a role in the alternation between phonograms 許 and 己. Furthermore, the two phonograms are also compared when they appear in disyllabic and trisyllabic nouns. In disyllabic nouns, there is no significant difference between temporal and dialectal factors ($\chi^2 = 4.3096, p = .12$); however, in trisyllabic nouns, there is a significant difference between temporal and dialectal factors ($\chi^2 = 20.5641, p < .01$)

4.2 Phonograms for *ko* syllables in different positions

Tables 21 and 22 below present a detailed breakdown of dialectal differences and temporal variations in the distribution of phonograms for *ko* syllables, specifically focusing on their positions within disyllabic and trisyllabic nouns. The third syllable is excluded from analysis due to a low frequency of occurrence, allowing for a clearer comparison of positional patterns across the first and second syllables.

In Table 22, which addresses the distribution of *ko* syllables in disyllabic nouns across dialects, 270 tokens place *ko* in the first syllable, while only 82 tokens feature *ko* in the second syllable. This distribution suggests a stronger association of *ko* with the initial syllable in these dialectal contexts, which may indicate a positional preference or functional role of the *ko* syllable within Old Japanese phonological structure.

Table 22: Total distribution of the ten phonograms for *ko* syllables in different syllables
 (from disyllabic nouns)

Phonograms	Syllable 1	Syllable 2	Total
許	205	56	261
己	39	18	57
虛	9	5	14
舉	6	1	7
去	4	0	4
巨	3	0	3
居	2	0	2
據	0	2	2
計	1	0	1
渠	1	0	1
Total	270	82	352

Table 23, examining temporal variations from trisyllabic nouns, reveals 116 tokens with *ko* in the first syllable, 141 in the second, and only 2 in the third syllable. The higher frequency of *ko* in the second syllable across time periods highlights a possible diachronic shift, where the position of *ko* in the word structure becomes more flexible or varied over time. The minimal presence of *ko* in the third syllable (just 2 tokens) reinforces its marginal role in this position, suggesting that the first and second syllables served as primary positions for *ko* syllable representation.

Table 23: Total distribution of the six phonograms for *ko* syllables in different syllables
 (from trisyllabic nouns)

Phonograms	Syllable 1	Syllable 2	Syllable 3	Total
許	77	80	2	159
己	30	54		84
虛	7	4		11
去	2	1		3
居		1		1
舉		1		1
Total	116	141	2	259

Table 24 below presents the distribution of the frequently occurring *ko* syllables—specifically, the phonograms 許, 己, and 虛—analyzed according to dialectal differences and temporal variations across different syllabic positions.

Table 24: Dialectal differences and temporal variations in different syllables

Phonograms	Syllable 1				Syllable 2			
	EWOJ	LWOJ	EOJ	Total	EWOJ	LWOJ	EOJ	Total
許	88	129	65	282	48	50	38	136
己	17	12	40	69	4	47	21	72
Total	105	141	105	351	52	97	59	208

The data indicate that the phonogram 許 is predominantly used in the first syllable across all examined time periods and dialects, with counts of 88 tokens in EWOJ, 129 in LWOJ, and 65 in EOJ, summing to a total of 282 tokens. For its usage in the second syllable, 許 shows relatively consistent distribution across dialects and periods, 48 tokens in EWOJ, 50 in LWOJ, and 38 in EOJ, totaling 136 occurrences. In contrast, the phonogram 己 displays a distinct distribution pattern: its presence in the first syllable is limited in EWOJ (17 tokens) and LWOJ (12 tokens) but is more substantial in EOJ (40 tokens), culminating in 69 tokens overall. In the second syllable, the phonogram 己 exhibits a stronger presence in LWOJ (47 tokens), with reduced occurrences in EWOJ (4 tokens) and EOJ (21 tokens), leading to a total of 72 tokens.

To assess whether the observed distributions of the phonograms 許 and 己 across syllable positions are statistically meaningful, chi-square tests were conducted. The analyses revealed significant differences in distribution for both the first and second syllable positions, with chi-square values of $\chi^2 = 34.4925$ for the first syllable and $\chi^2 = 24.8856$ for the second syllable ($p < .01$ for both). These results indicate that the distribution of 許 and 己 across syllable positions is not uniform and that their usage varies substantially depending on syllable position for specific phonological or orthographic preferences.

In addition, a between-group comparison was conducted to examine differences across dialects and time periods. For the phonogram 許, the chi-square test did not reveal a significant difference ($\chi^2 = 3.0901$, $p = .2$), suggesting a relatively stable usage across dialectal and temporal contexts. However, the phonogram 己 showed a statistically significant difference ($\chi^2 = 17.9667$, $p < .01$), indicating notable variation influenced by dialect and time period. These findings suggest that, while phonogram 許 maintains a more consistent distribution, the use of phonogram 己 varies considerably, underscoring that the alternation between these phonograms in Old Japanese is not random. Instead, it appears to reflect underlying linguistic distinctions that align with both dialectal and temporal variations.

The within-group and between-group comparisons of the phonograms 許 and 己 clearly indicate significant differences in their syllable positions and regional origins. Although phonograms 許 and 己 may be interchangeable in Old Japanese, their usage patterns reveal notable variations influenced by temporal and dialectal factors. As

illustrated in Table 24, phonogram 己 appears with only 21 tokens in EWOJ, compared to 136 tokens for phonogram 許 during the same period. This suggests that phonogram 己 was not commonly used in early transcriptions of trisyllabic nouns. Such observations highlight phonogram 許 as the predominant sign in the earlier stages of Old Japanese, reflecting its more extensive application in the linguistic landscape of that time.

The distribution of the phonogram 己 reveals its increasing prominence over time. In EOJ, phonogram 己 is frequently used in the first syllable, whereas in LWOJ, it is more commonly found in the second syllable. This shift suggests that phonogram 己 may have originated in EOJ, where it was primarily employed in the first syllable, before spreading to WOJ, where its usage became more concentrated in the second syllable. In contrast, phonogram 許 appears consistently from the earliest stages of WOJ, maintaining widespread use across both WOJ and EOJ. Its presence in EWOJ, along with its pervasive use in later periods and dialects, underscores its status as a more established form in Old Japanese transcription practices. This dynamic illustrates how the phonogram 己 evolved in its application, reflecting broader trends in the linguistic landscape of Old Japanese while emphasizing the enduring presence of phonogram 許 throughout various stages.

4.3 Other phonograms

Beyond the statistical analysis in Sections 4.1 and 4.2, the distribution and usage of certain phonograms warrant further discussion, particularly those confined to EWOJ. One such phonogram 虛 is notably exclusive to EWOJ, as illustrated by its limited distribution in Table 20. A close examination of primary sources confirms that the phonogram 虛 is attested in NSK, with 23 tokens, alongside a sparse presence in the MYS 2, which contains only two tokens. This restricted distribution strongly suggests that phonogram 虛 was predominantly used during the very early stages of Old Japanese, likely reflecting regional or chronological specificity.

Similarly, the phonogram 舉 also shows a limited distribution, confined exclusively to EWOJ and appearing solely in NSK, with eight tokens. Like the phonogram 虛, this suggests that phonogram 舉 was characteristic of the early period of Old Japanese. The exclusive appearance of both phonograms 虛 and 舉 in NSK highlights the importance of this text as a repository of older linguistic forms, which were gradually phased out in subsequent Old Japanese writings.

In contrast, the phonogram 去 appears across both WOJ and EOJ, with a more regionally diversified usage. In WOJ, phonogram 去 is predominantly found in NKS (3 tokens), while in EOJ, it is attested in MYS 20 (3 tokens). This suggests that the phonogram 去 may have had dialectal significance, with regional scribes or speakers in both western

and eastern dialects adopting this sign, possibly for slightly different phonological or lexical purposes.

The other phonograms—巨, 居, 據, 渠, and 計—show a similarly narrow distribution, primarily in EWOJ, notably in NSK and MYS 5. For instance, phonogram 巨 appears in NSK (2 tokens) and MYS 5 (1 token); phonogram 居 is found in NSK (3 tokens); phonogram 據 appears in NSK (2 tokens); phonogram 渠 is present in NSK (1 token); and phonogram 計 is recorded in MYS 5 (1 token). This pattern reflects their specialized use, likely limited to specific textual traditions or regional linguistic variants. The concentration of these signs in a small number of texts from the early period suggests that they may have served specialized orthographic or phonetic purposes, with their function becoming obsolete as Old Japanese evolved.

5. Conclusion

This paper has employed a corpus-based approach to analyze the use of *ko* syllables in Old Japanese, focusing specifically on disyllabic and trisyllabic nouns. In Old Japanese, *ko* syllables are represented by two groups of phonograms: one group reflecting a front vowel and the other reflecting a back vowel. Data from the online corpus ONCOJ reveal that dialectal differences and temporal variations significantly influenced the choice of phonograms for *ko* syllables. Two phonograms 許 and 己 emerged as the most frequently used representations of the *ko* syllable. A closer examination of these two phonograms shows that phonogram 許 was consistently and widely used across various time periods and dialects in Old Japanese, while phonogram 己 was predominantly employed in EOJ and LWOJ, indicating a more regionally and temporally specific usage pattern.

Furthermore, the examination of the less frequently used phonograms—虛, 攀, 去, 巨, 居, 據, 渠, and 計—highlights the complexity of early Old Japanese orthography. Their distribution, particularly their confinement to specific dialects and texts, provides valuable insights into the regional linguistic diversity of Old Japanese and the historical shifts in its written form. These signs, many of which were phased out by the later stages of Old Japanese, serve as key markers of linguistic change and regional variation, reinforcing the importance of early texts like NSK in preserving the archaic linguistic features of the Japanese language.

In conclusion, this paper underscores the importance of considering both dialectal and temporal factors when examining historical languages. The findings presented here contribute to a deeper understanding of Old Japanese phonology and orthography, particularly the intricate relationship between the selection of phonograms and the broader historical context in which they were used. Future research could expand this analysis by exploring other syllables and phonograms in Old Japanese, as well as considering potential

external influences, such as contact with other languages, that may have further shaped the evolution of the language's writing system.

References

- Baxter, William H., and Laurent Sagart. 2014. *Old Chinese: a new reconstruction*. New York: Oxford University Press.
- Hayata, Teruhiro. 2017. *Jodai Nihongo no Onyin* [Old Japanese Phonology]. Tokyo: Iwanami.
- Kasama, Yuichiro. 2015. Jodai Tokushu Kanatsukai Boyin Tairitsusetsu no Kentou: Awasete Jodaigo no Boyin Taikai nitsuite ronzu [Revisit the contrast of vowels in Old Japanese: from the phonological inventory in Old Japanese]. *Gobun Kenkyu* 119, 14-34.
- Kupchik, John. 2023. *Azuma Old Japanese: A Comparative Grammar and Reconstruction*.
- Li, Fang-kuei. 1980. *Shangguyi Yanjiu* [A Study of Old Chinese]. Beijing: Commercial Press.
- Mabuchi, Kazuo. 1994. *Kokugo Onyinron* [Japanese Phonology]. Tokyo: Kasamashoin.
- Miyake, Marc. 2003. *Old Japanese: A phonetic reconstruction*. New York: Routledge Curzon.
- Mori, Hiromichi. 1991. *Kodai no Onyin to Nihon Shoki no Seiritsu*. Tokyo: Taishukan.
- Tung, T'ung-ho. 1993. *Hanyu Yinyunxue* [Chinese Phonology]. Taipei: The Liberal Arts Press.
- Vovin, Alexander. 2005. *A Descriptive and Comparative Grammar of Western Old Japanese*. Folkestone, Kent: Global Oriental.

本論文於 2024 年 11 月 3 日到稿，2025 年 5 月 14 日通過審查。

「現実と非現実」から「愛情と理解」へ
--村上春樹短編小説「タクシーに乗った男」論

楊炳菁/Yang, Bingjing¹

關冰冰/Guan, Bingbing²

北京外國語大學日語學院副教授¹；浙江外國語學院東方語言文化學院副教授²

School of Japanese and International Studies, Beijing Foreign Studies University

School of Asian Languages and Cultures, Zhejiang International Studies University

【摘要】

《迴轉木馬的終端》是村上春樹以其獨特技法，嘗試使既有的現實主義重新復甦的一部短篇小說集。在第二篇《計程車上的男人》中，小說通過多重敘事，提出了「何謂現實」的問題，並表現出現實與非現實並非能夠明確劃分，而是在本質上不可分割。經由對小說多重嵌套結構以及登場人物身份設定的文本分析，可以揭示故事中現實與非現實邊界的曖昧性。在此基礎上得出的結論是：為了逼近世界的本質，所需要的並非是區分現實與非現實的能力，而是一種植根於「愛與理解」的姿態。

【關鍵詞】

村上春樹，《計程車上的男人》，現實與非現實，愛與理解

【Abstract】

Dead Heat on a Merry-Go-Round is a short story collection in which Haruki Murakami, through his distinctive techniques, attempts to revitalize conventional realism. In the second story, "The Man Who Rode the Taxi", the question "What is reality?" is posed through a multilayered narration that incorporates two embedded tales, expressing that reality and unreality cannot be clearly separated and are essentially inseparable. A textual analysis focusing on the nested structure and the identity settings of the characters reveals the ambiguity of the boundary between reality and unreality within the narrative. On this basis, the conclusion is drawn that what is required to approach the essence of the world is not the ability to distinguish between reality and unreality, but rather an attitude grounded in "love

and understanding.”

【Keywords】

Haruki Murakami, *The Man Who Rode the Taxi*, reality and unreality. love and understanding

1. はじめに

村上春樹は、短編集『回転木馬のデッド・ヒート』を自選集¹に収録するにあたり、「ある種の絶対的な真実のようなもの」（村上春樹 1991：XII）を掴み出したいと「宣言」し、従来のリアリズムの再生を試みた。この「宣言」に基づき、関氷氷と楊炳菁は第一作「レーダーホーゼン」における客観性の不確かさを指摘し、リアリズムとの緊密な関係性を浮き彫りにした²。もし村上が自身の「宣言」に基づいて短編集を編集したのであれば、続く第二作「タクシーに乗った男」³もリアリズムの問題を扱っているはずである。

「タクシーに乗った男」に関する既存の研究は多くはなく、主な論考として、酒井英行「『タクシーに乗った男』——夢の終わり／人生の始まり」、駒之嶺泰暁「〈言祝ぎ〉の物語——村上春樹「タクシーに乗った男」論——」、浅利文子「村上春樹『ノルウェイの森』とつながる『回転木馬のデッド・ヒート』」、および前文で触れた関氷氷・楊炳菁「リアリズムの破壊と蘇生の試み——「レーダーホーゼン」と「タクシーに乗った男」における村上春樹の「ツイスト」」が挙げられる。

酒井は、本作を、女性主人公が仕事や恋愛の夢に破れ、「別れた夫との和解」（酒井英行 2001:109）を経て青春の夢を昇華させる過程として捉えている。駒之嶺は、絵の中の男性を、彼女の人生と並行して成長する存在とみなし、アテネでの再会が彼女にもたらしたカタルシスに注目する⁴。一方、浅利は『ノルウェイの森』との関係を軸に短編集全体を論じ、本作を青春期の終

1 ここていう「自選集」とは、全8巻からなる『村上春樹全作品 1979～1989』（講談社、1990-1991）を指す。

2 関氷氷・楊炳菁（2023）、「リアリズムの破壊と蘇生の試み——「レーダーホーゼン」と「タクシーに乗った男」における村上春樹の「ツイスト」——」、『早稲田大学国際文学館ジャーナル』1号、13-22頁。

3 「タクシーに乗った男」の初出は1984年2月号の『IN★POCKET』（講談社刊、月刊文芸PR誌・文庫情報誌）である。その後、短編集『回転木馬のデッド・ヒート』（1985年、講談社）に収録され、『村上春樹全作品 1979～1989⑤短編集II』（1991年、講談社）に再録された。本稿では、『村上春樹全作品 1979～1989⑤短編集II』収録版を底本とし、以下本文の引用ではページ数のみを記す。

4 駒之嶺泰暁(2023),「〈言祝ぎ〉の物語——村上春樹『タクシーに乗った男』論——」、『Murakami Review』第5号,14-25頁。

焉に直面する登場人物の物語として位置づけている⁵。これら三者はいずれも独自の視点から本作を論じているが、村上の「宣言」には触れていない。他方、関・楊の「リアリズムの破壊と蘇生の試み」は「宣言」を出発点としているが、「タクシーに乗った男」への言及は限定的であり、内容分析よりも語りの手法に焦点を当てたものである。

以上のように、先行研究においては、作品内容を具体的に分析した論考は村上の「宣言」を視野に入れておらず、逆に「宣言」を基軸とする論考は作品の具体性に踏み込んでいない。しかし、『回転木馬のデッド・ヒート』に収められた以上、「タクシーに乗った男」はリアリズムとの緊密な関連性を有しており、村上の「宣言」を踏まえて内容を読むことは、作品の真意を明らかにする秘鍵となるだけでなく、短編集における役割や位置づけに対する探求にも繋がっている。そこで本稿では、村上の「宣言」に立脚しつつ、「タクシーに乗った男」がどのような物語であり、そこに込められた主題が何であるのかを改めて検討する。

2. 物語の構造および登場人物の設定

「タクシーに乗った男」の内容をまとめれば、次のようになる。四十歳前後の女性画廊オーナーが「僕」のインタビューを受け、『タクシーに乗った男』6の話をした。彼女はその絵をニューヨークで購入したが、帰国時に焼却した。ところが今年の夏、彼女はアテネのタクシーで絵の男と乗り合わせ、彼との別れを通じて彼女は貴重な教訓を得た。

まとめからも分かるように、本作は「入れ子が幾重にも設定され」（村上春樹研究会 2007: 112）ており、その大枠として、「僕」が女性の画廊オーナー（彼女）にインタビューする形式をとっている。その大枠の中に、彼女が『タクシーに乗った男』の絵を購入し、日々それを凝視していたという小話と、アテネで絵の男性と偶然タクシーで同乗したという二つの小話が挿入されている。さらに、タクシーや絵画も額縁とみなせば、これら二つの小話にはそれぞれ別の入れ子構造が存在すると言える。ただし、入れ子とはあくまで語りの構造を示すものであり、内容面から見ると、二つの小話の関係には以下のような特徴が認められる。

まず、時系列上は前後関係にあるものの、いずれも彼女が〈タクシーに乗った男〉と向き合う場面を描いており、その構図は同一である。このため、第二の小話は第一の反復とみなすことも可能であるが、それは単なる繰り返

5 浅利文子 (2019) , 「村上春樹『ノルウェイの森』とつながる『回転木馬のデッド・ヒート』」, 『異文化論文編』第20巻, 111-133頁。

6 本稿では、小説と同名の絵のタイトルについては二重かぎ括弧を用い、『タクシーに乗った男』と表記する。

しではない。すなわち、第一の小話では彼女は絵の中の人物と向き合い、第二の小話では現実の人物と向き合っている。こうした点から見れば、第二の小話には非現実から現実への転換が生じていると言えるだろう。

実際、本作に登場するすべての人物が、現実と非現実という問題に直面していることがわかる。本作の登場人物は、語り手である「僕」、「僕」と同行するカメラマン、チェコの亡命画家、タクシーに同乗した男性、画廊の女性オーナー（彼女）、彼女の元夫、ドイツ人の画学生の計七名である。「僕」は「小説を書きはじめた」（267）作家であり、カメラマンは写真を専門に撮る人物である。彼女、ドイツ人の画学生、亡命画家の三人はいずれも絵画に関わる立場であり、彼女の元夫とタクシーの男性は俳優という設定である。一見すると互いに無関係のような職業設定であるが、実は重要な共通性がある。すなわち、小説・写真・絵画・演劇いずれも表現領域に属し、現実と非現実の扱いに密接に関わっているのである。しかし、同じ表現領域に属していると言っても、俳優は他の三者とは大きく異なる特徴を有する。俳優は映画や演劇において劇中の人物を演じることを職業とするが、実生活においも演技をしているのか否かは外形からは判別しにくい場合もある。ここで注目すべきは、彼女の元夫とタクシーの男は彼女の人生に深く関わる存在であり、なおかつどちらも俳優という職業に設定されている点である。要するに登場人物の七名は現実と非現実の扱いにそれぞれ関与しており、その中でも彼女ともっとも深く関わる二名が俳優である。この職業設定に何らかの深意が潜んでいることはここから窺われる。

ここで、彼女の人生に強い影響を与えた彼女の元夫とタクシーの男について、さらに考察を進めたい。

小説において、彼女の元夫に関する記述は多くはなく、先行研究においてもそれほど重視されてこなかった。作中から読み取れるのは、彼が「オフ・オフ・ブロードウェイの役者をしていた」（276）こと、そして「職があったとしても、そんなのはたいした金にはな」（276）らず、経済的に不安定な生活を送っていたこと、また彼女が彼との関係を断ち切り、「子供も手放し」（277）て日本に帰国した、という点に限られる。彼女自身、「細かいことはあまり申しあげたくないので省かせていただきます」（277）と述べているため、詳細な事情は明らかにされていない。しかしながら、夫と別れ、さらには子供を手放して帰国するという決断を下す以上、元夫は彼女の生活に極めて大きな影響を与えた存在であったことは間違いない。

次に、彼女と同じタクシーに乗り合わせた男性について考察する。この男性はギリシャ国立劇場に所属する俳優であり、夜会服に蝶ネクタイという正装で、「とても大きな立派なパーティー」（280）に向かう途中であった。タクシーの中で彼と彼女は言葉を交わし、彼は「古いものがいちばん優れてい

ます」(279)と語り、下車の際には「よいご旅行を」(280)とギリシャ語で挨拶を交わした。この男性は、まさに『タクシーに乗った男』に描かれた人物であり、彼女の人生において最も重要な存在となる。というのも、彼との出会いを通じて、彼女は「人は何かを消し去ることはできない——消え去るのを待つしかない」(281)という教訓を得たからである。

彼女の人生に深く関わった元夫とタクシーの男が、ともに俳優として設定されている点は、極めて象徴的な意味を帯びていると考えられる。シェイクスピアがかつて「この世は舞台、人はみな役者」という名言を残していることから、小説における俳優という職業設定は一層興味深いものとなる。もちろん、この言葉を想起したからといって、二人の男性の職業が俳優に設定された理由が、シェイクスピアの影響によるものであると断定することはできない。ただし、「この世は舞台、人はみな役者」という言葉は、むしろこの設定を読み解くうえで有効なヒントとなることを指摘しておきたい。実際、このシェイクスピアの名言は、『莊子』における「胡蝶の夢」と本質的に同質の発想を有している。すなわち、いずれも現実と非現実の境界が本質的に曖昧であることを示唆しており、現実そのものが幻である可能性を内包しているのである。

このような観点に立つと、彼女の人生に深く関与する二人の男性が俳優として設定されていることは、彼女をめぐる二つの小話を読み解く際に重要な鍵を与えていると言える。俳優という設定は単なる職業上の属性ではなく、現実と非現実の境界を揺さぶる機能的装置として作動している。この装置を考慮に入れることで、従来の「青春の終焉」や「人生の和解」といった心理的物語にとどまらず、認識そのものの不確かさと表象の多層性をめぐる問題へと大きく転換し、物語全体の理解そのものを再構築する契機となる。

次節では、この点に着目し、俳優という設定がいかなる役割を果たしているのか、また二つの小話がどのように解釈されるべきかについて検討を進めたい。

3. 二つの小話

まず、一つ目の小話について検討したい。この小話には彼女の元夫が登場するが、物語の中心となっているのは、『タクシーに乗った男』という絵を彼女が購入する過程、絵に描かれた男性の描写、そして彼女がその男性に抱いた感情である。

彼女にとって、絵に描かれた男性は「凡庸という名のタクシーの中に閉じこめられ」(277)た存在であり、それはまさに彼女自身の姿の投影でもある。言い換えれば、彼女は現実における自身の境遇を絵の中の男性に重ね合わせているのである。しかし、彼女はなぜ「凡庸な背景の檻」(277)に閉じ込め

られたと感じたのか。そして、その「檻」を作り出したものは一体何であったのか。

ここでまず考えられるのは才能の問題である。作中の描写から、彼女はもともと絵画に夢を抱いてアメリカへ渡ったが、ある時点で自身には才能がないことを悟ったことがうかがえる。ただし、その悟りが彼女自身の内発的な認識に基づくものである以上、絵画の才能が抑圧されたとは考えにくい。それに対し、彼女には商才があり、絵画の夢を断念した後は画商として活動を始め、そのキャリアは順調に進み、顧客からの信頼も得ていた。さらに、「僕」に取材されている現在も同種の仕事を継続していることから、商才が閉じ込められていたとも言えないだろう。

そうであるならば、閉じ込められていたのは生活そのものであった可能性が高い。なぜなら、彼女は帰国前に夫と別れ、子供も手放している。職業的には大きな支障がなかったにもかかわらず、こうした選択を迫られたということは、彼女の生活の根幹において深刻な問題が存在していたことを示唆している。具体的な事情は明示されていないものの、亡命画家から絵を買う時、120 ドルを出したのは「痛い出費」(276) だったことや、「生活費のおおかたは私が稼いでいた」(275-276) などの描写からは、当時の生活が困難を極めていたことが窺える。また、「その時私は何もかもを捨てようと思ったんです。(中略) その土地で私を捉えたすべての夢や希望や愛や、そういうものの残像の何もかもをです」(277-278) という彼女の言葉は、かつて幸福を夢見ていた彼女が、その夢の完全な崩壊を経験したことを物語っている。

それでは、彼女にそのような幸福の幻想を抱かせたのは一体誰だったのだろうか。小説には明確に描かれていないが、彼女に幻想を抱かせた存在の一人が元夫であったことは、ほぼ間違いないだろう。彼女が結婚を決意したとき、目の前にいた彼は<俳優>であったのか、それとも現実世界に生きる一人の<男>であったのか。その職業が俳優であったという事実は、彼女に幻想を抱かせる契機となった可能性を否定できない。一方で、元夫と別れ、さらに子供さえも手放すという決断は、彼女が結婚および家庭生活に対して深い幻滅を抱いたことを意味する。このような夢からの覚醒は、彼女がかつて現実と非現実とを混同し、夫の実像を見極めることなく、結婚という重大な人生の選択をしてしまったことを示唆している。時間の経過とともに、彼女は<夢の夫>など存在せず、彼はただの凡庸な一人の人間にすぎなかったことに気づいたと推察される。しかし、彼女がそのことに気づいたときには、すでに結婚生活という「檻」に囚われていたのである。

すなわち、彼女が閉じ込められていたのは生活そのものであり、その「檻」を作り出したのは、凡庸な結婚生活であったと考えられる。当然ながら、夢からの覚醒とそれに伴う幻滅には段階がある。彼女が亡命画家から絵を購入

した時点で、すでに幻滅の兆しは現れていたが、その段階ではまだ明確に自覚していたわけではなかったと考えられる。しかし、『タクシーに乗った男』の絵を日々眺めている間、彼女は自身の状況に明確に気づき、非現実から現実へと完全に転じたといえるだろう。

以上をまとめるならば、第一の小話は、彼女が非現実から現実へと目覚めていく過程を描いた物語であると解釈できる。非現実を生み出したのは、現実に存在する俳優＝彼女の元夫であり、彼女を夢から引き戻したのは、現実には存在しない〈絵の男〉だったのである。

次に、二つ目の小話を検討する。第二の小話においては、〈絵の男〉が現実に登場し、彼女と同じタクシーに乗り合わせた。彼については、先行研究において相応の注目が払われているが、現実と非現実、および俳優であることという二つの観点からは、十分に考察されてこなかったように思われる。

「去年の夏、アテネの街で私は彼に会ったのです。彼です。絵の中の『タクシーに乗った男』にです。間違いはありません。たしかに彼でした」(278)と彼女が語るように、「彼」という語には三度も傍点が付されている。村上が傍点を用いた理由は明示されていないが、文脈からすれば、彼女の確信の強さを印象づける意図があったと解釈できる。もし彼女の認識が正しければ、絵画の人物が現実世界に出現したことになり、先述した非現実から現実への転換が、逆に非現実の現実化という形で現れたことになる。

男性はフォーマルな装いで、パーティーに向かっていると彼女に告げたが、このような装いでタクシーに乗る場面は、現実ではあまり頻繁には見られず、非現実的な印象を与える。また、彼が俳優である以上、実際にパーティーへ向かっていたのか、それとも何らかの劇中の一場面だったのかは明確でない。だが、彼女にとっては、これが現実の出来事として受け取られていたことは疑いようがない。ここで問うべきは、彼女が現実と信じたその状況において出会った彼は、現実の人物だったのか、それとも演技中の俳優としての彼だったのか、という点である。さらに重要なのは、もし彼が演技中の存在だったとすれば、その瞬間、彼女自身もまた劇中の登場人物として取り込まれていた可能性があるということである。

彼女がそこまで深く考えていたかどうかは定かではないが、語られた内容によれば、絵の男に出会ったことによって、彼女はすでに「懸命に頭の中を整理しようと試み」(280)しており、その整理とは「現実をきちんとした現実の枠の中に入れ、イメージーションをきちんとしたイメージーションの枠の中に入れ」(280)ることであった。この懸命の整理が示しているのは、彼との出会いによって、彼女の内的世界において現実と非現実の境界が崩壊してしまったという事実である。

このように、第二の小話は第一の小話とは逆の構造を持っている。すなわち、第一の小話が非現実から現実への転換を描いていたのに対し、第二の小話では現実から非現実への転換が描かれているのである。そしてこの転換を導いたのが、現実世界に存在する俳優であるという点において、二つの小話は対称的な構図を成していると言える。

とはいえ、二つの小話における逆方向の転換は、単純な反復にとどまるものではない。第一の小話において、彼女はすでに非現実からの目覚めを経験していたはずであり、再び非現実へと引き込まれることは本来ならば困難であったはずである。にもかかわらず、第二の小話では、彼女は再び非現実の世界へと引き戻されている。この逆転現象は、いったいなぜ起こったのだろうか。

その要因の一つとして考えられるのは、絵の男が俳優であったことに加え、その衣装や場の空気が非現実性を強調していた点である。しかし、それだけでは十分な説明にはならない。実際には、第二の小話における非現実性は、第一の小話とは異なり、現実の内部から生じたものである。つまり、ここで描かれているのは、現実と非現実の対立ではなく、現実と非現実の融合である。現実の只中にあっても、それが本当に現実であるかどうかを私たちは判断する術を持たない——このような認識が、本作全体を通底していると言えるのではないだろうか。

こうした観点からすれば、改めてシェイクスピアの「この世は舞台、人はみな役者」という言葉に立ち返る必要がある。現実の中で彼女の人生に強く影響を与えた二人の男性がいずれも俳優であるという事実はきわめて象徴的であるが、それだけではなく、彼女自身もまた現実における一人の役者であったと考えられる。すなわち、彼女は自らの人生という舞台において、自身の思い描いた役割を懸命に演じていたのである。第一の小話において、彼女は自分が役者であるという自覚を持たず、むしろ自分こそが現実を正しく見つけ、その中で苦悩し、旧来の生活との全面的な断絶を選び取ったと信じていた。だが実際には、それは夢から覚めた結果ではなく、ただ別の役へと切り替えたただけであったにすぎない。そうした彼女にとって、第二の小話に登場する絵の男は、きわめて特別な存在であった。なぜなら、彼は現実の中で、自らが俳優であることを彼女にはっきりと告げたからである。そのやりとりを通じて、彼女は目の前に広がるすべての光景が、演劇の一場面にすぎないということを実感したのではないだろうか。すなわち、「この世は舞台、人はみな役者」であるという真理に、彼女は深く到達したのである。

以上のように、登場人物が俳優として設定されている点に着目して二つの小話を検討することで、次のような結論が導き出せると考えられる。一般的には、現実と非現実とは明確に区別され、しかも現実の方がより本質的なも

のと見なされがちである。しかし実際には、両者の境界はきわめて曖昧であり、場合によっては、現実そのものが非現実である可能性すらある。言い換えれば、私たちが現実と呼んでいる世界もまた、非現実の一形態にすぎないのかもしれない——このような視点こそが、二つの小話を通じて浮かび上がってきた主題なのである。

4. 彼女の「教訓」と「僕」の「コツらしきもの」

「タクシーに乗った男」は、第一の小話においては現実と非現実が相反するものであるという一般的な認識を描き出し、第二の小話においては、その境界がきわめて曖昧であるという事実を提示している。これら二つの小話は、「ある種の絶対的な真実」とでも呼ぶべきものを示しているように思われるが、果たしてそれだけが本作の目的なのだろうか。言い換えれば、もし本作の主眼が、現実と非現実の区別の困難さを示すことだけにあるのだとすれば、なぜ小説は、あえて複雑な幾重もの入れ子構造を採用しているのだろうか。この語りの構造は、いかなる機能を担っており、また二つの小話によって示された「絶対的な真実」とはどのような関係にあるのだろうか。

まず注目すべきは、彼女が二つの小話を語り終えた後に述べる「教訓」である。この教訓こそが、彼女が展開した入れ子構造の語り全体の目的であると考えられる。具体的には、「人は何かを消し去ることはできない——消え去るのを待つしかない」（281）という一文に明示されている。この「人は何かを消し去ることはできない」という主張は、第一の小話に対応している。彼女は、自らを非現実から目覚めさせ、凡庸な生活に閉じ込められていると認識したうえで、過去との決別をはかろうとする能動的な行動を取った。だが、このような能動性は、次の二つの前提に基づいて成り立っている。すなわち、第一に、現実と非現実が明確に二項対立していること、第二に、人間がそれらを正確に認識する能力を有しているということである。しかし小説は、第二の小話において、これらの前提が成立しないことを明らかにする。つまり、現実と非現実は明確に区別できるものではなく、人間はしばしばその両者を混同してしまう。ゆえに、「消し去る」という能動的な行為そのものが成立せず、人は結果的に「消え去るのを待つしかない」という受動的な立場へと追い込まれることになるのである。

このように、入れ子構造を通じて語られる彼女の物語は、一見すると人間の能動性を否定し、消極的な処世観を示しているようにも見える。しかし、果たしてそれだけだろうか。小説において「僕」は、彼女について次のように描写している。

彼女は決して美人とは言えなかったが、人の心をふとなごませてくれるようなおだやかで上品な顔つきをしていた。

(中略)

その時壁に飾られた版画は僕のような素人が見ても上出来な作品とは思えなかったが、彼女の人柄の中にはある種のマグネティズムのようなものが潜んでいて、その奇妙な力が彼女をとりまく様々な事物を実際以上に輝かしく見せているように僕には感じられた。(269)

「僕」から見た彼女は、決して凡庸な存在ではなく、むしろ輝きを放つ人物として描かれている。そしてこの描写は、数年前、「僕」がある美術雑誌の取材で彼女にインタビューした際の記録に基づいており、彼女の魅力は、語られた教訓とも無関係ではないと考えられる。そうだとすれば、能動性を放棄し、消極的な処世観を受け入れたにもかかわらず、なぜ彼女は輝いた存在たり得たのか。言い換えれば、現実と非現実の区別が不可能であるとすれば、人は何を拠り所として行動するべきなのだろうか。

表面的に見るならば、彼女の教訓は人間の能動性を否定するものであり、きわめて消極的な立場に立つものである。しかし、この消極性は、あくまで現実と非現実とを二項対立的に捉える視点に立脚した結論にすぎない。もし、現実とは非現実であり、非現実とは現実であるとするならば、彼女の教訓はもはや消極的なものではなく、むしろ世界の真実を見抜いたうえで導かれた、最も適切な処世戦略として再評価することができる。このような処世観は、宇宙と人間との関係にまで広がる視座を備えており、宇宙を人間の認識対象や把握すべき客体とするのではなく、人間自身を宇宙の構成要素の一部とみなす「天人合一」の在り方を示唆している。

彼女が二つの小話を語るという入れ子構造を通して、小説は以上のような深遠な教訓へと読者を導いている。しかし、近代的主体性を信奉する人間にとっては、なおも彼女の教訓を受け入れることは困難かもしれない。「消え去るのを待つ」とは、すなわち何もしないことを意味するのか。言い換えれば、彼女の語りによって導き出されたこの教訓は、現実と非現実の区別がつかない状況下において、人は何を拠り所として行動すればよいのかという根源的な問いに対し、最終的な答えを提示しているとは言い難い。その根本的な問いに対する答えは、実は語り手である「僕」の語り、すなわち本作における最大の入れ子構造の内部にこそ見出されるのではないだろうか。

「僕」の語りから明らかのように、彼女はかつて「僕」が取材した美術関係者の一人である。当時、「僕」はインタビューに関して次のような「コツらしきものを発見し」(267-268)ていた。

インタビュアーはそのインタビューする相手の中に人並みはずれて崇高な何か、鋭敏な何か、温かい何かをさぐりあてる努力をするべきなのだ。(中略)そしてそれを探りあてることに成功すれば、質問はおのずから出てくるものだし、したがっていきいきとした記事が書けるものなのだ。それがどれほど陳腐に響こうとも、いちばん重要なポイントは愛情と理解なのだ。(268)

インタビューの成否や記事の出来栄は、技術や手法に依存するのではなく、あくまでインタビューに臨む際の態度によって左右される。「愛情と理解」をもって対象に向き合うとき、自然と問いは生まれ、記事もまた生き生きとしたものとなる。もしこの「愛情と理解」が「僕」にとっての取材成功の「コツらしきもの」であるとすれば、彼女が輝く存在となった根本的な理由もまた、そこに求められるべきであろう。

では、「愛情と理解」はなぜそのような作用をもたらすのか。その手がかりは、小説内の興味深い設定に見出すことができる。すなわち、彼女と絵画の男がギリシャ・アテネで偶然出会ったという点である。その際、男は彼女にこう語る。「ギリシャの古代劇はご存じでしょうか？ エウリピデス、アイスキュロス、ソフォクレス……(中略)要するにギリシャです。古いものがいちばん優れています」(279)。第二の小話が、現実と非現実の不可分性を描くことだけを目的としているのであれば、男の職業を単に俳優と設定するだけで十分であり、出会いの舞台をギリシャ・アテネとする必要はない。しかし、ここで「アテネ」「ギリシャ」、さらには「古代」という要素が繰り返し強調されていることから、それらは単なる背景設定ではなく、作品の主題に深く関わる象徴的意味を担っていると考えられる。

実際、「愛情と理解」という観点からこの出会いを捉えるならば、アテネという場所の設定は、古代ギリシャの哲学者プラトンとの関連を示唆していると思われる⁷。張堯均はジンメルという言葉——「ただ一人の偉大な哲学者だけが愛の意味について探究し、この問題に深く答えた。彼こそがプラトンである」(張堯均 2023:231-232)を引用した上で、次のように述べている。プラトンは『饗宴』において、ソクラテスの言葉を通して「愛」について語っている。それは、段階的に上昇し、最終的に永遠のアイデアとしての「美」と融合する過程である。(張堯均 2023:232)言い換えれば、愛とは存在の秩序を把握し、理念の秩序を洞察するための手段であり、この意味において愛は哲学そのものである。もし愛が、最終的に永遠の「美のアイデア」と融合するものであり、存在秩序の理解を経て理念秩序を洞察する手段であるとするならば、「愛の念」をもって世界に臨むことによって、人は自然と宇宙の真理を見出

7 本稿におけるプラトンの愛の議論は、哲学そのものを展開するためではなく、「愛情と理解」という語が作品内で担う機能を説明するための補助的枠組として導入している。

し、美と融合するに至る。すなわち、光輝く存在となることは、目標として追求すべき結果ではなく、愛の念をもって処世した結果として自然に得られるものである。

かつてチェコの亡命画家を徹底的に否定し、結婚や家庭といった人生の根幹とも言えるものと容赦なく決別した彼女は、教訓を得た後には、そのような態度を改めたに違いない。美人とは言えない彼女が、穏やかで上品な雰囲気をもとに、彼女の経営する画廊の作品の多くが傑出したものでないにもかかわらず、そこに展示された版画の一枚一枚からさえ実際以上の輝きを感じさせるのは、彼女がまさに愛の念をもって処世していたからにほかならない。

彼女をめぐる二つの小話は、現実と非現実の区別がつかないという「絶対的な真実」を描き出しているものの、そうした状況において人はどのように生きるべきかという問いに対しては、直接的な答えを提示していない。これに対して、本作の多重入れ子構造を通じて浮かび上がる彼女の「教訓」と、語り手である「僕」の「コツらしきもの」こそが、その答えを提供しているのである。すなわち、人は現実と非現実とを無理に分別しようとする必要はなく、ましてやその分別をもとにして華々しい結果を追求するべきでもない。なぜなら、現実と非現実はそもそも明確に区別できるものではなく、華々しい成果もまた意図的な追求によって得られるものではないからである。人はただ、「愛情と理解」をもって処世すればよい。そのとき、眩い結果は自然と眼前に現れるのである。

5. おわりに

『回転木馬のデッド・ヒート』はある種の真実を掴まえ、従来のリアリズムを蘇生させるために創作された短編集である。したがって、第一作「レーダーホーゼン」と同様に、「タクシーに乗った男」もリアリズムに関わる問題を扱っていると考えられる。一方、前者が「僕」の語りの再構成を通じて、リアリズムがその客観性を必ずしも保証できないことを示したのだとすれば、後者が問いかけるのは一体何なのであろうか。

リアリズムの本質は、主体のもとで、理性に頼って現実を模倣・再現することによって真実を掴まえることにある。しかし、それを可能にするためには、まず「現実と非現実とは何か」を明らかにしなければならない。「タクシーに乗った男」の第一の小話では、現実が認識可能であり、それによって真実を掴まえることができるかのように描かれている。しかし第二の小話では、現実と非現実とは明確に切り分けられるものではなく、むしろ本質的に一体であると示唆されている。つまり、村上は二つの小話を通して、「現実と非現実」という区分が無意味であり、その問い自体が偽りの問題であることを指摘しているのである。前提としての「現実と非現実」という区分が成立し

なければ、従来のリアリズムは当然成立しえないことになる。では、問題は我々はいかにして真実を掴まえるべきなのだろうか。本作は「僕」のインタビューの「コツらしきもの」を通じて、その答えを提示している。すなわち、真実を掴まえるとは理性に依拠することではなく、「愛情と理解」に根ざした生の態度にほかならないという点である。これこそが「タクシーに乗った男」が伝えようとする真意であると言える。

この意味において、「タクシーに乗った男」は「現実と非現実」の区分から「愛情と理解」という生の態度への転換を表現する短編であると捉えることができる。ただし、この転換は発展的性格のものではなく、むしろ構造的な転換である。「愛情と理解」は理性への依拠からの決別を意味しており、これは従来のリアリズムに対する批判だけでなく、新たな認識論を提示する試みであると考えられる。

* テキストは『村上春樹全作品 1979-1989⑤短編集Ⅱ』（講談社、1991年）による。

参考文献（五十音順）

- 浅利文子（2019），「村上春樹『ノルウェイの森』につながる『回転木馬のデッド・ヒート』」，『異文化.論文編』20巻，111-133頁。
- 関氷氷、楊炳菁（2023），「リアリズムの破壊と蘇生の試み——「レーダーホーゼン」と「タクシーに乗った男」における村上春樹の「ツイスト」——」，『早稲田大学国際文学館ジャーナル』1号，13-22頁。
- 駒之嶺泰暁（2023），「〈言祝ぎ〉の物語——村上春樹『タクシーに乗った男』論——」，『Murakami Review』第5号，14-25頁。
- 酒井英行（2001），『村上春樹 分身との戯れ』，東京：翰林書房。
- 張堯均（2023），《隱喻的體：梅洛-龐蒂身體現象學研究（修訂版）》，北京：崇文書局。
- 村上春樹（1991），「補足する物語群」，『村上春樹全作品 1979～1989⑤短編集Ⅱ』，東京：講談社，I -XII頁。
- 村上春樹研究会（2007），『村上春樹作品研究事典（増補版）』，東京：鼎書房。

本論文於 2025 年 10 月 12 日到稿，2025 年 12 月 30 日通過審查。